

---

# 聖痕使い

中間

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

聖痕使い

### 【Nコード】

N5887W

### 【作者名】

中間

### 【あらすじ】

何かを解決するたびに女の子が増えていく話。 ジンは神様に異世界を魔物の侵攻から救ってくれ、と頼まれ自ら異世界に。そこでジンは、世界を守るため世界のあらゆる力と女を集めることに。

正直文章を書くのは苦手なのですが、それでも書きたくて書きました。 勢いで書いたので五話までの話がすごく短くなっています。 気にせず読んでくれると嬉しいです。 処女作ですので、拙いですがよろしく願います。

## プロローグ 神様に会う

目が覚めると白い空間にいた。

どうすればいいのかわからずにボーとしていると

「やあ始めまして天使 仁くん」

後ろから声が聞こえてきた。妙に落ち着いているな俺。

「誰だお前？」

「この世界の神をやっているものです」

後ろを向くと思いつきり腰曲げて神様が頭下げてる。

見た目は、笑っていること以外あまり特徴のないスーツ姿の青年だった。

2

「ずいぶん腰の低い神様だな」

「いやあ今日は、お願いする立場なもので」

「用件は何だ」

「異世界にいつてほしいのです」

「嫌だめんどくさい」

「ちなみにあなたが行かなければその世界は滅びます」

お願いじゃなくていきなり脅してきた。めんどくさいって言いづら

いなあ

「・・・何で俺なんだ」

「あなたしかできないからです」

「だか「神様の事情です。」らな・・・」

話す気はないらしい。

「たくさん死にます。老若男女とわずたくさん死にます。赤ん坊も死にます。美少女も死にます。」

俺はしばらく考えた。美少女につられたわけでもない。異世界に興味がないわけではないのだ、まあまだ夢かもしれないのだが真面目に考えてみた。そして

「・・・わかった、行こう・・・ただ一ヶ月待てないか」

「それくらいならゴットパワーで何とかしましょう」

「神様軽いな」

「いまどきの神様ですからそれでは、細かいことまた後で」

「ああ、わかった。」

・・・後で？

そこで目が覚めた。

「おはようございます」  
「.....」

ベットの横でスーツ姿の人形が喋ってた。神様だった。  
はあ・・・夢じゃなかったのね。夢に出てきた意味あるのか。

あの後いろいろ聞いた  
いわく

・その世界は、ファンタジーの世界で剣や魔法や精霊や龍やエルフ  
やらがいろいろいるらしい  
・もっ少ししたら魔物の大侵攻があるらしいが世界は、それをし  
らない

・それどころか、戦争までやってるので正直やばいとのこと  
・侵攻は三回あってあとになるほど苛烈になるらしい  
・俺が選ばれたのは、精霊と相性がいいからと人格らしい（あまり  
良い性格だとは思っていないのだが）

・俺は、まず精霊界で修行をするらしい（神様は碌な戦闘能力はく  
れないらしい・・・神様使えねえな）  
・今の世界のほうが高位であるため戻ってくることはできないらし  
い。

・基本的に異世界の情報は話せないらしい。  
というものだった。

一ヶ月の間にやったことは、バイトと身辺整理だ。

貯金とバイト代で親に旅行をプレゼントした、学校には退学届けを、  
親友とは今までのことをいろいろと清算した。手紙まで用意した。

そして今日が旅立ちなので両親に気分を重かったのだが、別れを告げようと思ったら

「息子の旅立ちに乾杯」

「」「乾杯」「」

なんか両親と親友と後なんでか元担任がいて宴みたいになってた。

「・・・なんで？」

「ああ私が教えましたよ」

神様がスーツ姿で茶を啜っていた。

「貴様のせいかーーーーー」

「まあまあ私たちも大体わかってたし正確な日はわからなかったけど」

「普段やる気ないのにここ最近妙に真剣だったからな」

「まさか異世界だとは思わなかったが」

「応援しているぞ」

上から俺、母、父、親友、担任だ

さすが俺の両親とこの俺と付き合いのある友人だな。担任は・・・まあ流石は教師と言ったところか。

こうして小さな宴を開かれた後俺は、異世界に旅立った。

あ、精霊界のほうな。

しまった手紙を処分するのを忘れた。

## 1話 精霊界から異世界へ

小さな女の子が聞いてきた。

「ねえ、行っちゃおうの？」

「ああ、そろそろあっちの世界に行く。」

女の子が泣きそうになった。

「大丈夫。大きくなったらあっちで会えるから。」

抱きしめて頭を撫でてやる。しばらくすると

「わかった。パパ」

そうなんです。私父になってしまいました。といつてもこの子は、精霊なので人間とは違う生まれ方なんです。精霊の統合を初めてしたときに、生まれてしまった子で水と風と土の属性を持ちます。新しい雪の精霊です。名前は小雪。

ちなみに精霊界の修行は大変でしたよ。最後なんて精霊王たちあんなま加減してなかった気がする。

そこに刀神が歩いて来た。前の世界の神の知り合いらしい、たまに精霊界に来て刀術の稽古をつけてもらっていた。格好は侍スタイルだが髪は後ろで結んだだけの物だ。



「しつかり鍛錬を怠るなよ」

「最後の言葉まで小言ですか師匠」

「まあ、いいじゃないか君のことが心配なんだよ彼は」

なんか元の世界の神もきた。

その神が始めて真剣な顔になって。

「ありがとう。元の世界を捨てて来てくれて。本当にありがとう」

真剣な顔をして頭を下げる神に、俺は面食らった。

「まあ任せる今の俺は結構強いぜ」

「うん、パパは強いんだよ〜」

「それに、ほかは勝手にさせてもらっしな」

神様が不思議そうに聞いてくる。

「なにするつもりだい」

「せつかく異世界に行くんだ前の世界でできないことをしたいじゃないか」

「俺はハーレムをつくる」

「「「「「「「「」」」」」」」」

「わーい、わたしもパパのハーレムに入る〜」

「ああ、待っているぞ我が娘よ」

娘の頭を撫でてやる。

「こんななんだったつけ？ジンって」

「まあ時間は人を変えるし、その程度の褒美はいいんじゃないか」

と刀神。

「いや、けど娘って」

「まあ血のつながりはないし神ではよくあるだろう」

「・・・うん、そうだね・・・だといいなあ」

「それじゃあ行くか世界でも救いに」

「ああジン、これを渡しておくよ」

懐中時計のようなものを渡してきた。

「最初の侵攻が360日後、ゼロになった時に侵攻が始まる、場所は大陸の中央に大きな山があるからそこだよ」

時計の上の部分に360と青く光る数字が浮かんでいた。ほかは反時計回りをしている時計が三つ（時、分、秒だろう）ある。

「じゃあ門を開くね、水の精霊王の懇意の神殿に落とすからその方が何かとやりやすいと思うし、あと例の能力もついでにつけとくから」

「わかった。」

なんかこいつからなにかもらうの初めてだな。

「いってらっしゃーい」

「達者でな」

そこで門が開いた。

「いってきます」

「頼んだよジン」

こうして俺は第二の故郷に別れを告げた。

## 2話 異世界の女の子

### 異世界1日目

門をぬけたと思ったら、空中に出た。

下がなんか水溜りになってたから、水の精霊に手伝ってもらって自分の位置だけ水をのけた。

よく見ると噴水のようなところだった。今の服装は、黒一色だった。闇の精霊王が作ってくれた服だ。

闇の精霊王は小さな少女でかわいいやつだったな。

「あなたがジン様ですか？」

女の声が聞こえる。力を上げると（服を見ていた）。

水色の髪を腰まで伸ばした綺麗な娘が漫画に出てくるような神官巫女みたいな格好をしていた。

「そうだが。君は巫女さんでいいのかな？」

「は、はい。わたしはこの神殿の巫女をしているソフィアと申します」

「硬いな、別に普通で良いぞ。どこまで聞いている？」

「私の友人が行くとだけ、水の精霊王から聞いています。」

「じゃ簡単に来た目的を話そう」

魔物の大侵攻について話した。

「そのような事が、大変なことになっているのですね」

「へえ、簡単信じるんだな。この世界の人間は知らないって聞いてたけど。」

「巫女ですから」

それでいいのか？ついでに聖痕も見せた。

「すごいです。聖痕はひとつだけでも持っていれば歴史に名を残すような人達ばかりで、

いまはもうほとんどいないのにそれを7つすべてだなんて。」

なんか感動している。

突然雰囲気が変わって真剣な表情で

「あ、あのお願いします。助けてください。」

「???・魔物でも出てるの?」

「いいえ、実はこのあたりの村を盗賊が牛耳っていて毎月食べ物などを奪われているのです。」

毎月?

「略奪じゃなくて定期的に奪いにくるのか?」

「はい、それでこれ以上奪われると村が滅んでしまうのです。」

なんだかソフィアという言葉には違和感がある。違和感を確かめるために

「うーん、じゃあ村の人集めてくれる」

### 3話 村の状況

まだ夜が明けたばかりのようだった。

ソフィアに村の人を集めて集会を開いてもらった。

思ったとおりだった村の人間はみんな痩せている。これでは餓死者が出ていそうだな。考えていると

ほとんどの村人は、不審そう目で見てきた。まあ仕方ないなよそ者だしちよつと強気に言っとくか。

「まず聞きたいんだけどなんで戦わずに滅ぶ方を選んだんだあんたら？」

「な、なんだと」

「よそ者が知ったような口を」

村人が怒り出す。村人A、Bがうるさいな。

「静かに」

なんか村長ぼいのが出てきたな。ダンディなおっちゃんか村人の格好をしていた。

「どういことだね食べ物捧げなければ我々は殺されていた。なのに君は我々が滅びを選んだと言った。それはなぜだね？」

「なんでって」

俺は、あきれてしまった。今若者を制したところからもおそらく村長なのだろう。村長ですらこの状況の矛盾に気づいていないのだおそらくあまり物事を考えずにすごしてきたのだからまあこの世界ではしかたないのかもしれないが

「あんたらすでに食べるのに困ってんだろ本来少しずつたべものを奪うのなら生かさず殺さずが基本だ。だが、この村は滅びようとしているなぜだ？簡単だ他の村が逆らわないようにするための生贄に選ばれたんだよあんたたちは」

「そ、そんな」

盗賊が取ったこの手法には、たまに見せしめがないと村が言うことを聞かなくなるからな。

村人たちが絶望の表情を浮かべる。はあ、少しくらい考えろよな。

「ジンさんどうすればいいのですか？」

いち早く立ち直ったソフィアが聞いてきた。

「少なくともこの村ができることはないな。どいつもこいつも痩せていて碌に戦えんだろ」

なんか絶望が深くなってきた。

「盗賊は、どれくらいいるんだ」

「80人ほどで今日の昼ごろに五人ほどが徴収にきます。」

「ならなんともなるな」

「えっ、なるんですか」



なんか驚かれた。まあ問題は撃退した後の復讐だよなあ殺るならいつきに壊滅させないと後が面倒だ。  
しばらく考え。・・・よしこの作戦でいこう。

「じゃあ報酬の方だが」

また絶望の表情を浮かべた絶望好きだな。

「あ、あのジンさんもうこの村にはなにも・・・」

「ああ、俺がほしいのは旅の友だよそこでだ。ソフィア」

「なんででしょう」

「それをソフィアに頼みたいんだ。」

#### 4話 盗賊一掃

あのあと集会が荒れた荒れた。まあソフィアさん美人だもんな。何より俺が信用できないらしい。特に村長みたいな名前はオルムさん（ソフィアさんの親代わりでもあったらしい）なんか怒ってたなあ。

まあ仕方ないか、その場合は、ソフィアさんのおかげで何とかおさまった。そこに

「ただの王都までの道案内だよ」

と説明しその後ソフィアさんが

「わかりました。ご案内します。」

といていたのでそこで集会は解散となった。

で、今何をしているかという目の前で盗賊が三人ぶっ倒れている内ひとり死んでいる。

「さつさとつれて帰れ、お前らみたいな雑魚が4、50人で徒党を組んでも雑魚は雑魚なんだよ」

盗どもは、仲間を抱えて逃げていった。その顔には、憎悪を浮かべていた。

「どうして先ほど、4、50人と言ったのですか？」

ソフィアさんが聞いてきた

「4、50で言うっておけばもっと大人数でくるかな〜て、それにひとりは殺したから黙っていられないだろうし」

正直作戦といってもこの程度なのだが最初の五人は、格闘だけで倒したから挑発には乗るはず。殺す時だけは、精霊術を使ったが。まあ村人は不安そうだったが、どうにもならん。もともとこの村のためだしな。

この日は神殿に泊めてもつらた。

## 異世界2日目

次の日の真昼間に案の定八十人を超える人数で押しかけてきた。これならほとんど来たと思っただよさそうだな。

「てめえか、うちの部下やってくれたのは」

村のはずれに立っているいかにも村人っぽくない俺になんか話しかけてきた。

俺は、軽く無視して。

「ソフィアさんは、そこで俺の精霊術を見ててくれ」

「はい、ジンさん」

ちょっと震えている。ちょっとかわいい。

「おい無視してんじゃねえぞ」

「知らん、死ね」

手を掲げ

「『炎蛇・四首』」

・ソフィアサイド・

彼は80人程度どうとでもなるといつていました。

確かに精霊術は、強いです。魔法のように詠唱を必要としないので単独での戦闘もできます。その分魔法に比べて習得が難しいのですが。精霊と通じなければならぬので才能も必要です。

それでも80人を相手にするのは、難しいはずなんですというより無理です。

なのにどうしようか考えている間に昨日は昼に来た盗賊を倒してしまい今日の襲撃が決まっちゃいました。

そして目の前には、80人を超える盗賊がいるのです。さすがにこわいです。

「ソフィアさんそこで俺の精霊術を見てくれ」

「はい、ジンさん」

すでに彼の周りには、かなりの火の精霊が集まっていました。それは、わたしの想像を超える力でした。

これには驚きました。わたしは、てっきり聖痕を使うものだと思っていたのです。聖痕を使わずにこれなのか、と。彼は、手を掲げ

「『炎蛇・四首』」

炎の大蛇が四匹出て来ました。

「灰にしる」

大蛇が盗賊に襲いかかりました。大蛇に噛まれた盗賊は燃え灰になりました。

「ひいい」

「なんだよこれ」

「聞いてねえぞ」

一方的でした。剣で攻撃しても剣は溶けてしまい盾で防ぐこともできず3分ほどで盗賊は、全滅していました。

その凄惨なはずの光景は、私を魅了しました。この人は聖痕に頼り切った戦いかたをしません。そんな彼が聖痕を使ったらと思うとゾクゾクします。私はこのとき彼に魅せられてしまったのです。

## 5話 ソフィアの告白

- ソフィアサイド -

村の人たちは大変喜んでいました。わたしもホツとしてしまいました。

盗賊のアジトからお金や食料も手に入って、今年はなんとか大丈夫そうです。

お昼を食べ終わるとジンさん、いいえやはりジン様と呼びましょう、ジン様が

「じゃあ王都までよろしく」

「え、もう行くのですか？」

「まあ、あまり時間もないからね」

今言わなきゃもう言えないかもしれない。

「あの私も連れて行ってください」

「うん、だから王都までよろしくって」

「そうじゃなくて、その先もずっとお側にいさせてください。」

「それってつまり」

顔が体が熱くなってきました。

「はい、その・・・お慕いしています。」

「・・・」

「・・・」

「俺実はハーレム作ろうとか考えてますよ。」

「ジン様ならそれくらい、いいと思います。」

「（なんか様付けに戻ってる）危険ですよ」

「私も精霊術が使えます。」

「オルムさん」

「ソフィアをよろしくお願いします。」

満面の笑みのオルムさん。

「（あんなに怒ってたくせに）・・・僕Sですよ」  
「大丈夫です。受けとめます」  
「・・・わかりました。これからもよろしくソフィアさん。」  
「あのソフィアとおよび下さい」  
「わかった。ソフィア」  
「はい。ジン様」  
「じゃあ挨拶とかあるだろうし出発は明日の朝で」  
「わかりました。」

・ジンサイド・

その夜俺はソフィアと同じ部屋にいた。

俺は、ベットの上でソフィアの髪を後ろから撫でていた。

「ありがとうソフィアついてくると言ってくれて。俺実はこの世界では、一人ぼっちだったんだよな」

そう言っただ俺は、ソフィアを抱きしめた。ちよつと声が震えていたかも。

「ずつとお側にいますから、もう一人にはなれませんか。」

「そうだな」

ソフィアが手を握ってくれた。

俺はしばらくの間、髪をもう一度今度は全体的に、撫でまわした後、ソフィアを抱えてベットに倒れこんだ

「ひゃ」

「ソフィア実は、この前まで精霊界にいたから実は一年ほど禁欲生活だったんだ加減できないかも」

「はい。思う存分に。あの、でも初めてなので最初はやさしく」  
「わかった」

こうして俺はソフィアが気絶するまで彼女を抱いた。



## 6話 奴隷商人

異世界3日目

朝ソフィアの体を拭きながら謝った。

「ソフィア、その、すまん」

「いえっ、そのっ、すごかったです。」

頬を染めてそんなことを言ってくれた。襲いそうになるのを我慢する。

それでもその表情の中に疲れが見える。昨日は気絶するまでしたからなあ。

村の人間も盗賊の一件で俺のことを認めてくれたのかソフィアがついていくことに反対はしなかった。

一分の男どもはまた絶望していたが。

俺のことが怖くないんだな。俺は、殺してもあまり罪悪感を感じなかった自分が怖かったのに。

確かに俺は、必要なことに躊躇はしない性格だったが殺しを平然とするとはいなあ。

今は、王都への街道を進みながらこの世界について隣を歩くソフィアに聞いていた。ソフィアもほとんどあの村を出ることがなかった。ので、あまり村の外のことはいらないらしい。

話を聞くと大陸の中央は、人間の国が多く外側のほうは、人間の国が少なく亜人の国が多いらしい。

今いる国の話になるとソフィアの顔が少し曇った。話を聞いてみると、この国の名前はグーロム王国またの名を『奴隷王国』つまり国

が奴隷を推奨しているのだ。

王もかなりの愚か者らしく奴隷を得るために、戦争を起こすような王で、他国の民どころか自国の民にも嫌われているらしい。

だが他の国の支配者階級は奴隷を手に入れられるので黙認している。表立って反対しているのは、クイント皇国だけであるらしい。

クイント皇国の王は傑物らしく国力も大きい（協力関係を築くならクイント皇国か）。魔物の大侵攻は、俺だけでは無理らしいから国単位の協力が必要不可欠だからな。

クイント皇国を中心に何とかならないだろうか。

「この世界は、本当にだめそうだな。」

「はい、今大侵攻があれば簡単に滅ぶでしょうね。」

今日は暗くなり適当なところで野宿になった精霊達のおかげで野宿も快適だ。警戒もしてくれるし。

そうして、次の日

#### 異世界4日目

「なあソフィアこいつらって」

「はい、奴隷商人と子飼の傭兵といったところでしょう」

俺たちは、ガラの悪い傭兵崩れに囲まれていた。商隊が前から来たと思ったら、傭兵崩れが出てきて、いきなりこれだ。

「それで商品は、あの馬車の中で俺たちもそこに入れと」

「そうでしょうね（気の毒な方たちですね、まあ自業自得ですが）」  
ソフィアは、かわいそうな人を見るような表情をうかべた。俺が手  
加減しないのがわかっていているからだろう馬車から豚が出てきた。

「おまえらも今から私の奴隷だ。ぐっふっふ」

気持ち悪いやつだな。喋るなイライラする。

「気持ち悪い豚だな」

口が滑った。

「なんだと貴様！！おいお前たち男は殺してかまわん」

沸点の低いやつだ。

丸腰だと侮つたのだらう傭兵が剣を抜こうとしているがのんびりし  
たものだった、と思つたらその傭兵が吹っ飛んだ。

ただの風の精霊を使った突風だ殺傷能力はない。これで時間も稼い  
だ。

「なつ、精霊術師だと」

その吹っ飛んだ男が立つたところで

「『風刃』」

腕を横に薙いだ。

とつさにしゃがんだ二人以外の奴隷商人と傭兵の首が風の刃に切り  
飛ばされた。

お、避けたよ、見えないはずなのに。

よけた内の一人が切りかかってきた。

「まて！」

もうひとりが止めようとするが、俺は半身になって剣を避けて、風  
を纏った左手で剣を右手で顔を掴んだ

「なに！」

剣を握つたのに驚いたのだらうはい時間切れ。

「『流雷』」

バチィッ

顔を掴んだ右手から電流が流れ男は気絶した。もう一人の男が悔しそうにしていたので。

「気にするな、殺していない」

「えっ」

「俺の質問に答えれば逃がしてやる」

少し困惑していたが。

「わかった」

敵意がないことを示すためだろう男はその場に剣を置いた。

「何でも聞いてくれ」

「なぜ奴隷商人の護衛をしていたんだ？」

「えっ、どういうことですか？」

ソフィアが驚いていた。

「この二人は、ほかと違う感じがした。」

実際格好からして傭兵もどきとは違った。装備にしっかりと手入れもしているようだし、何より質が違う。

「ああ、俺たちは冒険者だ」

「・・・冒険者がこんなことを」

ソフィアが蔑んだ目で見ていた。冒険者が慌てて

「いや、俺たちは商隊の護衛を受けたんだ。それが奴隷の運搬にすりかえられて前金を使ってしまっていて下りることができなかったんだ」

「そうだったんですか」

ソフィアの表情が和らいだ俺は苦笑して次の質問にうつる。

「なぜ冒険者を雇っていたんだ？」

「運んでいたのが、高級奴隷と戦闘奴隷で結構な額で用心のためだったらしい」

「奴隷を解放するには、どうすればいい？」

「マスターキーを使うか、主が開放するしかない、キーは購入者の所にあるしだろうし主は君が殺しちゃったから」

残念そうに

「中の二人は助けられないと思う」

ソフィアが悲しそうにしていた。だが今は話せない、これはあまり公にはしたくないのだ。

「そうかありがとう。俺はジンこっちはソフィア、俺の女だ。」

ソフィアが頬を染め、ジークは羨ましそうにしていた。

「ソフィアです。先ほどは、失礼しました。」

「俺はジーク、冒険者だ。」

「ジークは中の二人について知っているのか？」

「いや、顔もしないな。」

それなら問題ないだろう。嘘をつく必要もないし。

「中の二人とやらは俺に任せてくれ。ジークは仲間を王都に運んだほうがいい」

「そうだな」

ジークは、仲間を荷物のように馬にくくると

なんか扱いひどいな、ほかにもないかやらかしているのか？

「本当にありがとう仲間を殺さないでくれて、王都に行くんだろ？」

「ああ」

「じゃあまた会えるかもしれないな」

「かもな」

そしてジークは去っていった。  
あれは、前振りだろうか。

## 7話 奴隷の二人

それじゃあなかの二人とご対面しますかね。

馬車の中に入ると暗くてよく見えないが金髪と炎髪の少女が床に座っていた。

首には、複雑な模様のかかれた鉄の首輪のような物がつけれていた。俺の顔を見ると金髪には、ビクツと怯えられた、炎髪の方は俺の前まで来ると突然。床に頭を押し付け土下座の格好で

「奴隷の分際でお願い申し上げます。イリヤは逃がしてもらえませんでしょうか、わたしが戦闘奴隷も高級奴隷もいたします。

だからどうかイリヤを逃がしてくださいお願いします。イリヤはまだ」

「黙ってくれ」

ビクツ

つい言葉に怒気を混じらせてしまった。炎髪が黙ってガクガク震えている。このとき俺は、かなり苛立っていた。

これがこの世界の普通なのか、自分の認識を改めさせられた。軽く会ってみるか、と思っただけが腹立たしい。

「ちょっと頭を冷やしてくる、ソフィア二人を頼む」

俺は馬車から出て少し離れて座り込んだ周りは血のにおいが充満していた。

初対面の誰とも知れない人間に對してすることが、あの対応なのかこの国は、それが普通なのかはわからない。

だが、今決めたこの世界から奴隷制度をなくす絶対になくす。たとえ国を滅ぼしても。

ソフィアに心配をかけてしまったな。

しばらくしてから馬車に戻った。

ビクッ

怯えられた

「ああ、さつきはすまなかつた。」

「い、いえ、ソフィアさんから私達に対して怒っているわけではないと聞きましたので」

金髪の少女が初めて喋った。金髪を肩ぐらいまであつて顔はかなり整っている。髪から耳は尖っているのでエルフだった。

「あ、あの先程は、も、も申し訳ありませんでした。」

炎髪の方は、かなりの怯えている近くで怒気を浴びせてしまったから仕方ないか。

顔が俯いていてよく見えないが、それでも綺麗なのはわかった。髪をポニーテールにしているのも可愛い。

「あの私たちはどうなるのでしょうか」

「悪いようにはしない」

それでも二人は、不安そうだった。

「ソフィア、マスターキーはあつたか？」

実は一応探してもらっていたんだが

「いいえありません。着飾るための衣装と宝石などがあるだけです。」

「やはりないか。．．．しかたない神様のやつにもらった力を使うしかないか。」

「あの助けをいただいております。ですが私たちは・



・・

二人は、あきらめの表情を浮かべた。キーがなければ逃げることはできない、そんな二人に俺は、

「二人とも立ってくれるか？」

「「え」」

「ほら早く」

「「は、はい」」

その姿勢だとちよつとあぶないな

「ちよつと前かがみになつてくれる」

二人は、言われるがまま前かがみになる。

俺は、両手をあげ二人の鉄の首輪に手をあてて神様からもらった力『契約の無効化』を使った。

首輪が少し淡い光を放つたと思つたら。

ゴト

二人の首輪が落ちていた。

「「「え」」」

これには、ソフィアも驚いていた。

「驚いているところ悪いけど、どんどん行くよ、いいかい今から君たちは自由だ、そして俺たちと君達は対等だいいね。

ちなみに今の力は、『契約の無効化』って力で神様とか余程のやつと契約しない限り無効化できる。つまり君たちはもう奴隷ではないんだ」

徐々に状況が飲み込めてきたようだ。絶望の表情は消えその顔に希望が表れる。いいことだ。二人でなにか話しているとおもむろに。

「あのお願いがあります。」

「なんだい、聞けることならきくけど。」

「私達をあなたの奴隷にしてください」「」

「なぜそうなる」

「むう、覚悟はしていましたが、二日目で二人旅が終わってしまいまいました。」

俺は、驚くというより呆れていて。ソフィアはなんだか残念そうだった。

理由を聞いてみると奴隷から開放してくれた恩を返すために側に置いてほしいらしい。

ならばどうすれば側にいられるか考えた挙句出た言葉が「奴隷にしてください」だったのだ。

「それじゃあ意味がないじゃないか」

「そうなんですけど」

「それなら別の形で仕えればいいだけです。それにジン様もハーレムを作ると言っていたではありませんか」

さっきまで残念そうだったのになぜかソフィアが乗り気になっていました。

（これで夜の営みを満足させて差し上げることができます。）

なんて考えていたことにジンが気づくはずもない。ハーレムと聞いて二人は、頬を染めていた。エルフの少女なんかちょっと嬉しそう

だった。

結局エルフの少女はメイド、炎髪の少女は護衛として仕えることになった。

「じゃあよろしく俺は、ジン。聖痕使いだ。」

「ソフィアです。水の精霊術師です。」

エルフの少女は、恥ずかしそうに

「イリヤです。治療術師です。その、未永く可愛がって下さい」

とんでもない事を言っただけだ。この子は絶対天然だな。

炎髪の少女は、くだけた感じで

「リリースよ、冒険者でギルドランクはB。これからもよろしくねジン、ソフィア」

こちらが素なのだろう、これはいい傾向だ。

二人には、衣装のなかで比較的落ち着いた服に着替えてもらった。ついでに宝石類を頂いた。二人とも何か聞いたそうにしていたが。

「先に王都に向かおう、宿でいろいろ話すよ」

「そうしましょう」

「わかりました」

「了解」

## 8話 宿屋とイリヤ

聞いていたことだが二日足らずで王都についてしまった。そのたった二日の距離しかない村が盗賊に苦しんでいたことに俺は、驚いた。これが国民に対する扱いが王なら治安にも気を使うべきだろうに。だが反乱は難しいのだろう成功しても失敗して死ぬのは奴隷だ。ま

ず傷つくのは奴隷、この国ではそれが当たり前なのだ。

門はあっさり通れた。怪しいやつなどいちいち取り締まらないのだろ

もう夕方なので、ソフィアが一度泊まったことのある宿屋を目指した。王都を眺めているとやはり裕福なところと貧しい者の差は激しい裏路地を見たときは、吐きそうになった。

首輪の付いた死体がいくつか転がっていたのだ。俺は密かにこの国を滅ぼす決意を強くした。

もう他の物を眺めたりせず前だけを見て歩いた。ソウイア達もつらそうにしていた。不謹慎ではあるがそのことに安堵してしまっていた。

宿屋に着くとソフィアが女将に、

「ダブルとツイン一部屋ずつお願いします。」

「いやちよつと待てソフィア、まず三人部屋と一人部屋を聞くべきだろう。」

「三人でやるんですか」

「（何いってんだこの子は）いや違うから」

「それにツインとダブルの方が安いんですよ」

後ろの二人は、何も言わないので、後ぶっちゃけ女将の視線が痛い

蔑まれているわけではないのだがなんかニヤニヤしている。実はこのとき後ろでイリヤが何か言いたそうにしているのを見たからなのだが。

「わかった、それでいい」

食堂で先に食事を済ませた後。部屋に行った。ちなみにこの世界の通貨は、ギルだ。

金貨一枚〃	10000ギル
半金貨一枚〃	1000ギル
銀貨一枚〃	100ギル
半銀貨一枚〃	10ギル
銅貨一枚〃	1ギル

になる（半金貨、半銀貨は、混ぜ物があって色が鈍いのだ）1ギル  
〃約10円だ。

一部屋150×2ギル、宿泊客は一食30×4ギル　しめて420  
ギルの出費だ

それを盗賊のアジトから取ってきた銀貨4枚で払い半銀貨を一枚受け取っていた。

盗賊は周りの村を食い物にしていただけあつてかなり溜め込んでいた。換金の必要のない貨幣を幾らか貰ってきていたのだ。

その額は1万ギル　なので残高9580ギルなり

割り当てられた部屋の、ダブルの方に集まり、イリヤとリリスに魔物の大侵攻と神様に頼まれたことについて話した。

ソフィアの時のようにはいかなかったが、ソフィアが室内なのに空から降ってきたことをはなしたり、『契約の無効化』を思い出して

もらったり七つの聖痕を見せて一応の納得を得た。  
嘘をつく必要性がないこととイリヤが聖痕について少し知っていた  
おかげだ。その上でついてくるかを聞くともちろん絶対について行  
くと言ってくれた。

「あのご主人様」

「・・・なぜにご主人様？」

「リリスが、メイドならそれが基本だと」

リリスが、ニマ〜としていた。まあ役得だからそのまま

「で、なんだっけ？」

「確か聖痕は、徐々に力を溜めていくもので使用にインターバルが  
あるのですよね？」

「ああ、よく知っているな。でも今は光と闇以外は、ほぼ満タンだ  
ぞ。光と闇についてはまだ聖痕の発動ができないから溜めることが  
できないんだが」

「それでジン様は、盗賊も奴隷商人も聖痕を使わずに倒していたの  
ですね。」

ソフィアが納得していた。

「そゆこと、まあ聖痕のおまけみたいなもので精霊と仲いいからな、  
でもなんでそんなこと聞くんだ？」

「聖痕保持者が殺されるときは、基本そのインターバルの間ですか  
ら、ここにいる人だけでも知っておくべきかと思いましたが。」

「やっぱりそうなのか、まあ俺は、素でも強いし聖痕も七つあるか  
ら大丈夫だと思うが、ありがとなイリヤ」

頭を撫でてやると嬉しそうに細めた目から涙がこぼれた。

「どうした？大丈夫か？」

震えた声でイリヤが

「はい、うれしくて本当なら私今頃誰かに買われてきつと今も奴隷で、でもご主人様に助けていただいてうれしくて」

怖かったのだろう、頭を抱きしめ頭を撫でてやる。

しばらくそうしていると、リリスとソフィヤが、

「じゃあ今日はこの辺でお開きとゆうことで、ごゆっくりご両人」

「たくさん甘えてくださいねイリヤさん」

部屋を出て行ってしまった。

---

もう外は真つ暗になってしまった。

「ご主人様」

「落ち着いたか？」

「はいご主人様の腕の中とても落ち着きます」

なんか言葉がとろけてきているな。頭を撫でていると顔を上げてき

た近い。周りをみて

「あの、二人は？」

気付いていなかったのか。

「ああもうひとつの部屋にいったよ、ごゆっくりだと」

俯いたイリヤが顔を真つ赤にして

「・・・あのご主人様、・・・その・・・お情けを・・・ください」

詰まりながらもそういつてくれた。

「いいのか、俺はハーレムを作るつもりだぞ。」

「はい、ご主人様ならば当然です。私もそこに入れて同じように愛してくださいればわたしは幸せです。それにもうソフィアさんは入っているでしょう、負けられません」

考えた時間は、ほんのわずかだった。

「わかった。イリヤ、俺の女になってくれ。」

「はい、あなたの女にしてください」

「早速で悪いんだが・・・耳を触ってもいいか」

「ふえ・・・耳ですか、ど、どうぞ」

触ってみると不思議な感じがした、さわり心地は人間の耳とそこま  
で変わらない気がするのだがあきらかに耳の形がちがうのが面白  
かった。

特に触っているとイリヤが

「あっ・ん・んあ」

ちよつと喘ぐのだエルフで耳が気持ちいいのか、やるなイリヤ。そ  
んなイリヤに我慢できずベットに押し倒して

「先に言っておく俺Sなんだ」

「ならば私がMになります。」

さすが天然のイリヤ、凄いセリフを平然と言っな。

俺は、イリヤと体を重ねた。



## 9話 宿屋の朝

異世界5日目

朝起きると隣でイリヤが裸で寝ていた。寝起きにイリヤの耳で少し遊んでからベットを出る。

自分が着替えた後、イリヤの体を布で綺麗に拭いていると。

「あ、おはようございます。ご主人様。」

イリヤが起きた。

「おはよう」

俺はそのままイリヤの体を綺麗にする作業を続けた。

「あの、自分で・・・」

「いいから、させて」

黙ってしまった。イリヤの顔が赤くなっていく。

・・・

「よし終わり」

「はう、ありがとうございます。」

恥ずかしかつたのか急いで服をきている。  
ちよつと意地悪をしたくなった。

「これでイリヤの体で触れていない所はないな」

ピタッ

止まってしまった。可愛いやつである。頭を撫で

「二人を呼んでくるから、早く支度しろよ」

部屋を出ると

「うっ〜ご主人様のバカ〜」

本当に可愛いやつである。

ちょっと時間を置いてからソフィアとリリスをつれて部屋に戻った。

「飯の前に少し話そう、大侵攻については昨日話したな、大侵攻を阻むのが一番の目標だが、それとは別に俺個人の目標もある。」

「ご主人様の目標ですか？」

「そつだそれはだな。・・・この世界から奴隷と奴隷制度をなくすことだ」

「・・・ジン様、それはさすがに難しいと思います。」

「そつだよジン、奴隷を持っているのは、基本的に支配者側なんだよ。」

二人は否定的だが。イリヤは、

「ご主人様、さすがです。どこまでもついていきます。」

とろん、としていた。

「まあ、これは決意表明みたいなものだ、一応手も考えてる。まだ不確定要素が多すぎるがなんとかなると思う。」

この言葉に、二人もなにか考え込んでいたが、何も言っただけで来なかった。

俺は、話を変えて

「大侵攻を阻むための協力体制を取る国を探す必要があるんだが、どの国がいいと思う？」

「それはやっぱりクイント王国がいいと思うよ。あそここの王は、民に慕われているし。奴隷を禁止しているから、ジンのにもありだと思っ。」

冒険者のリリースが発言した。実際のところ村からあまり出ないソフイヤヤエルフの里から出てきて日の浅いイリヤ達に比べリリースは世間についての情報を持っていた。これは正直助かった。

「じゃあクイント王国と協力体制を取る方向で行こう。クイント王国となるとさすがに遠いから、まずは金か」

「それならみんなも冒険者になろうよ、そうすれば情報も力もお金も手に入るからさ」

「情報とお金はわかるが力も手に入るのか？」

「うん、あ、そっかジンは知らないか。あのね冒険者登録するときに丸薬みたいなのを飲むんだ。」

くわしくは、知らないけれどそれを飲むと体質が変わって魔物を倒すと気力と魔力が少くしずつあがるんだよ。個人差はあるけどね。」

「へえ、便利なんだな。戦えばある程度は強くなれるのか」

それなら俺はまだまだ強くなれるかもしれない。

「まあ強さの上限にも、限りがあつて上限までいくとギルドカードの称号に『到達者』っていうのが出るんだよ。」

さらになんと能力ランクS以上の人は、『超越者』っていう称号が出るんだ。『超越者』は、凄く少ないんだよ。後、精霊術より魔術が主流なのもそのせいだと思うよ。」

またまたリリース。冒険者なのだから当たり前なのかもだがちょっと意外だ。

「ジンなんか今失礼なこと考えていない。」

するどいな。

「いいや。それじゃあ装備とかいろいろ準備しなきゃいけないし。」

今日は、お買い物と冒険者登録ということでもいいかなできれば依頼？クエスト？も受けたい。」

「そうと決まれば朝ごはんにしましょう。」

「ちよつと待つて、あともうひとつ聖痕についてはできるだけ伏せておいてまだ目立つわけにはいかないから、あと『契約の無効化』については絶対に喋っちゃだめ。」

「『契約の無効化』もですか。」

「考えてもみて俺はあらゆる契約を無効化つまり無視できるんだ、それでは誰も怖くて契約できなくなるし悪用の仕方はいくらでもある。誰かが利用するために近づいてくるかもしれない。だからもしばれそうになつてもあくまで奴隷解放の能力ということにしておいで。」

実は、もうひとつあるのだがそれについては、今はいいだろう。

「……………」

三人とも呆けた顔をしている  
俺まで困惑して。

「どうした？」

「いろいろ考えているのですね、ますます惚れます。」

「さすがご主人様です。尊敬します」

「ほえ、ジンってすごいね、普通は力を誇示したくなると思うんだけど。人間ができてるのかな？」

照れくさくなったので

「よしこれで終わり飯に行くぞ」

先に食堂に向かった。

朝食 25 × 4 = 100ギル  
残高 9440ギルなり

## 10話 登録とチーム名

朝食を終えた俺たちは、冒険者ギルドに、向かっていた。俺は、道中リリスに質問していた。

「そつえば称号てのはどんなのがあるんだ」

「いろいろあるよ？、ピンからキリまであって、すごいのはやっぱり超越者かな」

「確か到達者と超越者は条件があつたよな全部そつなのか？」

「大体はそつだね、でも中には神様の気まぐれで、ユニークなものもあるらしいよ」

神様の気まぐれ・・・嫌な予感がするな

「なあ、登録するとき称号つて係の人とかに見られるかな？」

「見られるはずだよ」

どつしよつ

「何か困る称号がでるのですか？」

つと、ソフィアが聞いてくる。

「ちょっと神様を思い出したら不安になつたんだ、宿で言ったけどまだ目立ちたくないからな」

「はあ」

良くわからなかったらしい。まあ仕方ないかソフィアたちはあの神様に会ったことないからなあ。あいつ神様のくせにいたずら好きなんだよ。

そうこうしている内に、俺達は冒険者ギルドに着いた。

王都の冒険者ギルドは、あまり大きくない。この国に冒険者があまり来ないかららしい、この国に近づきたくないからだろう。

中に入ると、一応人がいるにはいた。ガラが悪いチンピラみたいなのがたくさん。

チンピラみたいなのは、俺を見た後、後ろの三人を見たらニタニタと気持ち悪く笑ってこちらに近づいてきた。

「なあなあ、嬢ちゃん達そんなのといないで俺達のところに来いよ」と、腕を伸ばしてきた。動こうとしたリリスを止めて。俺がその腕を掴んだ

「悪いなこいつらは、俺の連れでね」

「野郎にようはねえんだよ。ひっこんでろ」

俺は怒気を込めて

「これが最後だ。俺の女に触れるな」

一瞬怯んで何を思ったのかいきなり殴りかかってきた。掴んだ腕に電気を流す。声も無く男が倒れた。

これだけで終わってしまった。周りは、なにが起こったのかわらないといった様子だった。

俺はそれらを無視して三人と奥に向かう。

「やっぱりお強いんですね。ご主人様は」

「はじめて見たけど、あっけなさすぎてジンの実力がぜんぜんわかんなかった。」

さりげなくリリスがさっきの男を雑魚だと貶していた。むかついていたのだろう。

奥のカウンターで受付嬢に

「冒険者の登録がしたいんだけど」

「四名様ですか？」

あれ落ち着いてるな。まあいいか

「いや、三人だ」

「では、こちらにどうぞ。」

別の部屋に通された。

「ずいぶん落ち着いているんだな」

「この国では隙は見せられませんから」

よく見ると彼女は、黒い髪を肩でそろえて少し鋭い目に眼鏡をかけていて美人秘書といった感じだ。

「大変だな、俺はジンこっちは」



「ソフィアです。」

「イリヤです。」

「リリスだよ。」

「始めましてクレアと申します。」

「ずいぶんクールな人だな。」

「それではこちらに両手を置いてください。」

見ると部屋の中央に、腰の高さまである四角い石としか言い様のないものがあった。

石の上に両手を置いて十秒ほどしたら強く光りだした。正直眩しい。

「なんですかこれは、こんなに強く光るなんて。それに時間がかかりすぎ」

「さすが、ジンだね。」

何度か見たことがあるであろうふたりが驚いている。

石からカードと黒い丸薬みたいなものが光から出てきた。出てきたカードは、光になって体に入ってしまった。残った丸薬をもって

「これで終わり？」

「うん終わりだよ。」

とリリスが答えた。クレアさんは、まだ呆けている。

その間に残りの二人の終わってしまった。やっぱり俺のときほど時間はかからなかったし、光も弱かった。

この時には、クレアさんも何とか落ち着いていた。

「それでは、その丸薬を飲み込んでください、飲み込んだらカードを見せてください。登録しますので、出し方は、念じれば出てきま

す。」

三人とも丸薬を飲み込んだ後、カードを出してみる。

「お、出た出た。」

「よし、みんなで見せっこしよ」

「そうだな」

まずソフィアか

名前 ソフィア 女 18歳 人間

ギルドランク F

能力ランク 総合D 気力D 魔力C

チーム なし

称号 水の巫女 精霊術師

「精霊術師ですか、珍しいですね。」

「へえ、ソフィアって巫女さんだったんだ。」

次はイリヤだ

名前 イリヤ 女 17歳 エルフ

ギルドランク F

能力ランク 総合D 気力E 魔力B

チーム なし

称号 ジンのメイド 治癒術師

「.....」

次いこつか。

はい、リリス。

名前 リリス 女 17歳 人間

ギルドランク B

能力ランク 総合B 気力A 魔力C

チーム なし

称号 ジンの護衛 熟練者

「また変なのがある」

「あのクレアさんからでいいですか。」

「まあいいですけど。」

名前 クレア 女 20歳 人間

ギルドランク C

能力ランク 総合C 気力B 魔力C

チーム なし

称号 ギルド職員

「それじゃあ真打といきますか。」  
ソフィアが嬉しそうに言う。クレアさんも興味があるようだ。顔が近い

「見せなきゃだめだよな。」  
「だめですよ」

名前 ジン 男 18歳 人間

ギルドランク E

能力ランク 総合C 気力B 魔力D

チーム なし

称号 聖痕使い 精霊王の友人 救世主 三人の女の主

奴隷の解放者 精霊術師

「あ、あなたなんなんですか？神の使い？」

クレアさんを落ち着けるために魔物の大侵攻について話すことになった。

「ということ、できれば内緒にしてほしいんだ。」  
「わかりました。世界の危機です、わたしも協力を惜しみません。」

ギルドの職員で目の前でカードを出されては、信じるしかなかった

のだろっすんなり信じてくれた。  
思わぬところでギルド内に協力者ができた。

「気を取り直して一応ギルドやカードのことを説明いたします。最初のギルドランクは、能力ランクから二つ下のものがつけられます。ランクは上位から、SSS - S S - S - A - B - C - D - E - F - G となります。依頼は、自分のランクよりひとつ上の物まで受けることができます。」

成功が続けば昇格、失敗すれば降格です。昇格には、自分のランクより下の依頼をこなしてもあまり意味がありません。」

「つまり降格は、依頼のランクに関係なく失敗が続けば落ちるということですか？」

「はい、そうです。丸薬のことは知っていますか？」

「ああ、知ってる。」

「そうですね、あと、能力ランクは、あくまで気力と魔力の平均なので、精霊術師の実力は関係ありません。なのでジンさんは、すぐにランクを上げていけると思いますよ。」

最後にチームについてですね、依頼や探索は複数ですることが多いですし、チームに専門の依頼もあります。あとチームをつくればお金の貯金ができます。個人の貯金は、人数が多くてできないんです。」

チームに関してはそんなところですね、どうしますか、チームをつくりますか？」

「そんなに簡単に作れるのか？」

「ええ、チーム名さえ決まればすぐにでも」

「どうするか」

「ジン様が決めてください。私達は、ジン様の女なのですから」

「そうです。ご主人様」

「私もジンが決めていいと思う。」

「それじゃあ」

しばらく考えて

「『世界を結ぶ者達』でどうだろう。魔物の大侵攻には世界の人々の力が必要だ、そして俺達は国を種族を繋げなければいけない、だから『世界を結ぶ者達』」

どうだろう、真剣に考えてみたのだが

「おお、いいね、それ」

「そうですね。頑張りましょう。」

「今のこのバラバラな世界を繋げる。これは、戦いの後の世界が楽しみですね。」

「すばらしいと、思いますよ。」

こうして俺達のチーム名が決まった。

## 11話 依頼とお買い物

チームの登録が終わるとクレアさんが

「依頼は受けられますか？」

「そうですね、みんなで作られて、お金を稼げるそんな都合がいろいろありますか？」

「ありますよ」

「・・・あるんですか」

これは、驚いた。

「チーム限定の依頼でランクが低くいけどちょっときつい依頼があります。」

「どんな依頼ですか？」

普通なら疑うところだが俺はもうクレアさんを信用していた。

「討伐系の依頼で一週間以内に一定数以上の魔物を討伐する依頼です。成功報酬はそれほど高くないのですが、どの魔物をどれだけ倒したかで報酬が上乘せされます。」

「討伐すればただけ報酬が貰えるのか、いいね。それでお願いします。」

「では、皆さんのギルドカードに依頼をいれますね」

俺たちがカードを渡すとカウンターの石盤の上に置き何か操作していた。

「これで誰がどれだけ魔物を倒したかが分かります。ギルドカードを見てください。一番したに欄が増えますから。」

作業が終わり返してもらった。

ギルドカードを見ると。一番したに

総合討伐数 000

ジン討伐数 000

内訳

と、いった具合だ

「討伐指定地域は、オルムの森です。指定討伐数は300です。報酬に上乗せできるのは500なので上限は800ですね。」

「ありがと、次いでに何処かい武具屋と宝石商を知らないか？」

「武具屋でしたら、ギルドを出て左側の三件先あるところがいいですよ、ギルドが近いので商売もまともですしギルドが懇意にしているので、宝石商は武具屋の正面にあるお店をおすすめします。」

「ありがと。じゃあ皆行こうか」



「頑張ってくださいね」

こうして俺たちはギルドを出た。

俺たちはまず宝石商で奴隷商人の馬車から取ってきた宝石や装飾品を売りはらった。

宝石と装飾品は三万ギルになった。

そして今俺たちは、勧められた武具屋にいる。

「誰に何がいるんだっけ？」

「わたしはレイピアかな、前使っていたのもレイピアだったし」

リリスは、すんなり答えたが、ソフィアとイリヤは黙ったままだ

「どうした？二人とも」

「実は何がいるのか解らなくて」

「実はわたしも」

「じゃあ店主に聞いてみようか」

「じゃあ、わたしはあっちでレイピアさがすね」

「ああ、頼む」

リリスは剣が並ぶ場所にいった。

「じゃあ、二人とも行くこうか」

奥に行くとは恰幅のいいおじさんが話しかけてきた。

「いらっしやいませ。私はこの店の店主のドルトンと申します、何かお探しで？」

「ええ精霊術師と治癒術師で使えそうなものってありますか？」

「ふむ、精霊術師のかたは、どの精霊をお使いになるのですかな？」

「水の精霊です。」

「それでしたら」

ドルトンは、奥から小さな箱を持ってきて中を見せてくれた。それは青い石のような物のついた石の栄える綺麗な指輪だった。

「こちらについている石は、水の石といまして魔力を込めると水の精霊が集まりやすくなるものです。名前は、そのまま水の指輪といます。」

「試しても？」

「どございどござい」

ソフィアに持たせてみる。するとしばらくしていつも以上に精霊が集まってきた。

これは、アリだな。

「これはいくらですか？」

「精霊術師は少ないので、需要は少ないのですが、水の石が貴重でして。8000ギルになります。」

「買います。」

「え、よろしいのですかそんな大金」

「装備をケチってソフィアが怪我したら大変だろ、だからいいの。」

「ありがとうございます。(やった、ジン様から指輪をいただけるなんて)」

「いいなあ、ソフィアさん」

イリヤが羨ましそうにしている。

それを見たドルトンが、気を利かせたのかおもしろそうに

「治療術師の方は、こちらなどがでしょうか？」

別の箱を取り出した。こちらも指輪だ。こちらは、石は無く少し幅広く複雑な文様が描かれているこちらも水の指輪に劣らず綺麗な指輪だった。

「これは単純な、治療魔法を含む魔法の補助ですね。その中でも治療術を意識して作られたものです。ヒーリング・リングといえます。」

「  
イリヤが目を輝かせていた。ソフィアは、少しうなだれていたが。  
イリヤがおそろおそろ

「あの、おいくらですか？」

「そのこちらは、治療術を意識しているのと、装飾品もかねており  
まして10000ギルとなります。」

「うう、高いです。」

イリヤが落ち込んでしまった。

「イリヤ大丈夫だから」

と頭を撫でる。撫でていると

「どうしたの？」

リリアが戻ってきた。

「ちょっとな、それより決まった？」

「うん、ちょっと高いんだけど。」

そして、レイピアを出してきた。

「わたしスピードタイプだから。強度補強と軽量化の魔法がかけら  
れてるこれを選んだんだけどね。値段がね、その、」

リリスが、言いづらそうに

「4000ギルなんだ」

少なくとも二人よりは安い。

ああ、ふたりが落ち込んでしまった。

「あーえーと、後俺だな。刀はあるか？」

「刀ですか、内にあるのは、これくらいしか。」

刀の入った箱を持ってきて中から二本取り出した。あまりいい物ではない。ドルトンもそれはわかつているのだからバツがわるそうだ。箱を見るともう一本小太刀があった。俺は妙に気になって

「それは？」

「ああこれですか。これは不良品でして抜けないのです。」

「見せてもらえますか」

「どうぞ」

持って抜いてみる。簡単に抜けた、すると突然、

「【初めまして、我が主、わたしは『鉄餓刀』（てつがとう）と申します。テツとお呼びください。】」

小太刀が喋りだした。みんなにも聞こえているのだからみんな驚い

ている。しかし土の精霊術師でもある俺は、落ち着いていた。これは、土の精霊に似ている。

「よろしく俺はジン、誰にも抜けなかつたらしいんだが？」

「【私は、土の精霊使いでないとぬけません。私の製作者が土の聖痕保持者でしたので。】」

「それですか。それでテツおまえは何ができるんだ？」

「【刀は切るものです。あえて言うなら金属等を吸収して成長することができますね。】」

「よし買った。店主こいつは、いくらだ？」

「きみすごいね。土の精霊術師のかな？勉強になったよ。凄そうだけど他の人には売れないし1000ギルでいいよ。」

「これからよろしくなテツ」

「【はい、よろしく願います主】」

全部で23000ギルか・・・

「なあ、鎧以外に体を守るものってあるか？」

「それでしたら、防御の護符などいかがでしょう。魔力を通すだけで体の周りに障壁を張ってくれます。強度を魔力に左右されてしまふのが難点ですが。」

「それはいくらだ。」

「ひとつ1000ギルになります。」

「よし四つ買おう、全部で27000か」

「いえいえこれだけの金額を買っていただけるのです。珍しい物も見れましたしサービスで25000ギルでどうぞでしょう。」

「ありがたい。それで頼む」

お金を払い各々自分の武器と護符を持って出口に向かう

「毎度ありがとうございます。またのご来店をお待ちしております。」

9440 + 30000 - 25000 = 14440

その後も、イリヤとリリスの服や食料などこれから必要な物を買集め940ギルになった。

残金 13500ギル

## 12話 初恋

異世界6日目

- リリスサイド -

私は、今イリヤと魔物退治をしている。

最初はみんなで森に入ったのだが、この森のランクはEランクつまりFランクの冒険者まで入ることができる。

Bランクの私やジンにとって少々退屈だったのだ。総合で50匹ほど狩ったところでジンが（一週間で300なので単純にノルマは終わっている）

「ソフィアの修行をやるうと思うんだ」

という話になり

なので効率を上げるために二手に分かれたのだ。

ジンがソフィアの修行をするため、イリヤと私が組むのは必然だろう。

イリヤと知り合ったのは、奴隷時代に奴隷される際に負わされた怪我を、こっそり治してもらったのがきっかけで友達になった。（奴隷には、自害以外のことを命令でき禁止もできるが、イリヤは治療行為を禁止されていなかった）

奴隷の間、わたしは友達として不安に潰れそうなイリヤを支えることはできたと思う。でもその不安を取り除くことは出来なかった。



それを簡単に取り除いてくれたのがジンだった。イリヤにとってジンが特別になるのに時間はかからなかった。

そして私も奴隷の身から救ってもらった恩がある。好きではある、あるが、イリヤやソフィアと同じなのか自信がない。

小さい頃から冒険者をしていて忙しかったし、同じ場所にいる事がなく恋愛などしたことがない。初恋もまだだと思っ。

ジンは、ハ、ハーレムを作るって言っていたし時間はあるだろうか。

わからないことはわからないのでわかるまで放置することにした。

「イリヤ残念だったね、ジンと一緒にいられなくて」

「うん、ちよっとね」

少し沈んでいる。

わかる時は、平気そうだったのにやっぱりジンの側が一番安心できるのだろう。励ますために

「それじゃあたくさん魔物狩ってジンにほめてもらおうよ」

「そうだね、頑張ったら。頭撫でてくれるかな」

イリヤが赤くなってる。イリヤは、ジンが絡むと頭が桃色になるなあ。いや天然なだけかな。

私達は、それから順調に狩りを行った。気付くとずいぶん奥に来てしまった。

そろそろ戻ろうかと思っていた時に私達はそれに出くわした。

それは、サイのような形をしていた魔物で、だが角は太く長さにいっては、2メートルぐらいある。

皮膚は、黒い鉱物の様なもので出来ていてとてもスピードタイプの

わたしやイリヤの攻撃魔法が効くとは思えない。  
名前はノワールサイ、サイ型の堅さが売りのAランクの魔物だ。  
(何でこんなところに上級の魔物がいるのよ)

心中で嘆いていると、ノワールサイが突っ込んできた。  
ヤバイ

私はイリヤを抱えて右に跳んだ。ノワールサイは、私達がいた後ろの木を、

三本ほどへし折った。

デタラメな突進力だ。ジンには悪いがこの突進に護符はあまり意味がないだろう。なので呆けているイリヤに

「イリヤ！きた道を戻ってジンを呼んで来て」

声が大きくなってしまった。

「リリースはどうするの？」

声が震えている。怖いのだろう当たり前だ今を見たのだから。それでもこちらを気遣うイリヤに

「私は、あいつを引き付ける。大丈夫ノワールサイの動きは、単調だから時間稼ぎくらいはできるから」

これは事実だが逃げられる保証はない。ノワールサイに障害物は、関係ないのだから

「わかった。待ってて絶対にご主人様を連れてくるから」

そう言つてイリヤは走り出した。

「それじゃあ張り切つていきましようか。」  
私は、引きつけるために無駄と知りながら切りかかる

あれからずいぶんたった。突進を防御せずにすべて回避する。回避しながら考える。

正直イリヤがジンを連れてくるのは、難しいだろうこの森は広いし、木で視界も悪いイリヤの体力も心配だ。だけど諦めた訳ではない、こいつの視界を奪えればスピードタイプの私は、逃げられるはずだ。こいつの動きも大体覚えた。

眼を潰してからの逃走

これしかない。決めたら回避しながら時を待つだけだ。  
それから何度目かの突進でノワールサイは、苛立っているのか無理な停止をした。  
いい位置だ一歩で突ける。

(ここなら)

私はレイピアを突き出す。

ガキン

ノワールサイは首を下げてレイピアに角を当ててきた。レイピアは弾かれ体勢を崩してしまふ。しまったこのノワールサイ、自分の弱

点を知ってる。ノワールサイが体当たりをしてきた。

ヤバイ

助走がなかったたので、私は回避とレイピアと護符で何とか受け流すことができたが。しかし、今度こそ完全に体勢を崩されて転倒してしまいすぐには動けない。

ノワールサイが再度突っ込んで来る。

(避けられない、死ぬ、ジン助けて)  
眼を閉じてしまう。

……いつまでも衝撃は襲って来ない。

代わりに、心地良い風と暖かい体温を感じる、その体温が戦いで疲れ冷えた体を温めてくれる。

眼をあけると私はジンに、お姫様抱っこされていた。

(タイミング良すぎだよ、ジン)

「ジン！」

ジンに抱っこされたまま首に抱きついて頬にキスをした。

私は、初めて恋をした。

### 13話 魔物討伐

話は二手に別れる前まで戻る。

しかし、この辺の魔物は弱いな。ほとんどの魔物が、動物が少し強くなった程度のもので護符があれば死にそうにない。危険がないのはいいことなどだが。

俺は、狼に似たハイウルフを、鉄餓刀で切り裂きながら。鉄餓刀に話しかける。

「なんかお前普通だな。」

「【今の私は、主に抜かれたばかり初期性能ですので。】」

「前の所有者のときには成長しなかったのか？」

「【いいえ、ただ主が移った時に初期化されてしまうのです】」

「そらまた、面倒な機能をつけたもんだ。」

「【いいえ、そうとも言えません。前のままですとあまりに癖が強すぎますし、成長にもいろいろあるので主の好きなように育ててください。】」

好きなようになって

「具体的にどうすればいいんだ?。」

「【金属等を吸収させる時に、私を持って意識を集中してください。成長を続けなければ隠し機能もあつたりします。】」

「それはそれは、楽しみにしていよう。」

いったん会話をやめてギルドカードを見る。

総合討伐数	050
ジン討伐数	019
内訳	ハイウルフ 10 グリーングリズリー 2 ラビットドン 7

50か、ソフィアのほうを見る。指輪の力は使えているのだが、攻撃が不得手らしいのだ。まだ、一体も倒せていない。ノルマは終わったしソフィアの修行でもするか

「皆ちよつときてくれ」

三人に側に来てもらおう。

「どうしました?。」

「ソフィアの修行をやるうと思つんだ」

「何故ですか?」

「私やっぱり弱いですか? 一体も倒せていませんし」

イリヤは不思議そうにしていた。ソフィアは泣きそうになっていた。

「いやそうじゃなくて、ソフィアって攻撃が苦手みたいだからその指導をしようかと思ってな、これから先自衛は出来たほうがいいだろうしな」

この言葉にソフィアも納得してくれて。泣き止んでくれた。

「たしかにそうですね。それではご指導お願いします。」

「それでは私達は、どうしましょう?」

「二人には悪いけど、このまま狩り続けてほしい。討伐数がものをいう依頼だからね。」

イリヤは、一応攻撃魔術が使えるので今は、大丈夫だろう。

「わかりました。」

「了解」

二人と別れソフィアの修行が始まった。

いくつか術を見せてもらったが制御はうまいし精霊の力も申し分ない。となると、ただ攻撃用のイメージが持てないのだろうそれなら見せるのが手っ取り早い。

「ソフィア今から俺がいくつか攻撃用の術を見せるからそれをヒントにして。」

「はい。勉強させてもらいます」

ソフィアが意気込んでいる。

見せたのは、圧縮して撃つ『水撃』と圧縮した水でものを切る『斬水』この二つだけこれから自分の形を見つけてくれるといいのだが、精霊術には決まった形が無い、なので自分で形を作ったほうが力を発揮できるのだ。

練習を重ね『水撃』に近い物でハイウルフを倒せるようになったころ。

探査用の風の精霊がイリヤの声を拾ってきた。イリヤはなにか焦っているようだ。

「ソフィア今日は、ここまでにしよう」

「はあ、はあ、わかりました。」

しまったやらせすぎたか。

「大丈夫か？」

「大丈夫です。早く足を引つ張らないようになりたいですから。」

別にソフィアも集団戦なら問題はないのだが、今はイリヤのほうだ、リリースの音が聞こえないのも気になる。



「ソフィア悪いけどついてきて、何かあったのかも」

「何かって何ですか？」

「まだわからん、急ぐぞ」

俺は、駆け出す。迷わずに森の奥に進みすぐにイリヤを見つけた。

「大丈夫か？」

「ご主人様、・・・あの、はあはあ、その」

息切れしているし、えらい慌てようだ。

「落ち着け、なにがあった。リリスは？」

そこでソフィアも追いついてくる。

「ノワールサイに襲われて、今リリスが引きつけてくれてご主人様を呼んでできてって」

俺は、ソフィアに聞いてみた。

「やばいのか？」

ソフィアの顔も強張っていた。

「ノワールサイは、Aランクの魔物です。単純な意味でBランクのリリスさんでは勝てない可能性が高いと思います。」

くそ、俺のせいだ一日目から二手に分かれるんじゃないものな。こつ  
いう依頼は、なにが起るかわからないものなのに。

「すぐに行く。二人はここで待ってて」

「どつちやって行くのですか？」

道案内のことだろう。しかし、それには取り合わず。使う覚悟を、  
決める。

「聖痕を使う」

俺は、リリースのためにこの世界ではじめて聖痕を使うことを決めた。

風の聖痕を発動

「聖痕発動『嵐帝』」

俺の、周りを風が包む傍目には風の衣を着ているようにも見える。  
発動と同時に俺の視界と感覚が広がっていく。

見つけた。

『嵐帝』状態の俺は、このオルムの森をすべてを見通すほどの探索  
範囲を持つリリースを見つけたのかかった時間は、二秒ほどだ。

呆然とする二人に

「ちよつと行ってくる。『疾風』」

俺は、ものすごい速さで走り出した。覚えたばかりの気を使い脚力をあげ、『疾風』で空気抵抗をなくし追い風を起こす、邪魔な木や魔物を風で吹き飛ばしながらリリスの場所に向かう。

二人の目からはすぐに見えなくなってしまった。

「あれが、ジン様の聖痕の発動」

「ご主人様の、本気」

二人は、自分達の近くにラビットドンが来るまで呆然と突っ立っていた。

見えた。

黒いサイの前からリリスを掻っ攫い嵐帝を解く。

リリスが突進を受ける寸前に、助けられた。

ギリギリだった。よかった本当によかった。後少し遅れたもうリリスに会えなかったかもしれない。この世界ではじめて死を身近なものに感じた。

目を閉じているリリスの身体は、長時間の間、回避のみの体力より精神面の戦いだったからか、とても冷えている。

リリスが目を開けると、目を潤ませて

「ジン！」

抱きついてきて頬にキスされた。

この状況でキスされたことに驚きながらも俺は嬉しくなった。特別になれた気がしたから。

「リリス、大丈夫？」

「うん、平気ジンが助けてくれたから。」

「じゃあちよつと待っててあれ片付けてくる。そういつて側に降ろす」

リリスは残念そうにしながらも腕を離してくれた

「うん、待ってるね」

リリスが信頼の眼差しを向けてくるなか律儀に待っていた、ノワールサイの前行き。

「おい黒いの。俺は、俺の大切な女を傷つけるやつを許さない。ちよつと残酷な死に方をしてもらうぞ」

次の瞬間ノワールサイが突っ込んで来る。俺は、右足を上げ地面に落とす。

「『五重・土壁』」

俺とノワールサイの間に5枚の土壁が地中からせりだす。ノワールサイはそのまま突っ込み土壁を粉碎するが4枚目で突進が止まった。

今度は両手を地面置いて

「『落とし土牢』」

ノワールサイの地面が陥没し円柱状に穴が開き、ノワールサイが落っこちる。ノワールサイは、狭くて身動きがとれず這い出ることができない。

そこでリリースが近づいてくる。

「もう終わったのさすがだねジン。」

「いいや、まだまだよ。言つたる残酷な死に方をしてもらつて」

「な、何するの？」

「こつする、『炎蛇・六首』」

炎蛇を一分ごとに一匹ずつ穴に順次投入し長時間熱する。皮膚のおかげで燃えることはないが、熱は感じるだろう。生き物なんだから当たり前だ。

つまり俺は、ノワールサイを生きたまま焼き殺したのだ。

ノワールサイは身動きも息も叫ぶことも出来ず悶えながら死んだ。

「ジンすごい、大好き」

リリースとしては、自分の好きな人が自分のことで怒ってくれたのが嬉しいらしく、抱きついてきた。俺も失ったかもしれない女の子を大事に抱き締めた。

しばらくした後、キスをして離れる。

「二人のところに戻るか」

「ちょっと待って。あれ冷やしてくれないかな？」

リリースが、ノワールサイを指す。俺は怪訝を思いながら水を出して冷やす。

穴に降りてリリースが近づき

「『採取』」

光がノワールサイの身体を包みこむ。するとノワールサイの角が根元で折れたり体から黒い鉱石が出てきた。

「この魔法で素材とか貴重な部分を取れるんだよ。まあランクB以上の魔物じゃないと碌な素材が無いから最初はいららないんだけど。Bランク以上の冒険者では、わりと必須なんだよこの魔法。」

そういいながら角を冒険者用の袋に入れる。この袋は、入れた物を自動で圧縮してくれる優れものだ。リリースのレイピアと同じ軽量化の魔法もかけられている。次に黒い鉱石も入れていった。

「今度こそ行こうか」

と声をかけるとリリースは近づいて来て、腕を絡ませてきた。今までで一番いい笑顔で、

「そうだね。行こ」

そのまま俺達は来た道に戻った。

## 14話 三人の思い(前書き)

稚拙な文章ですが、よろしくお願いします。

## 14話 三人の思い

戻った俺達を迎えたのは、温かい目線で俺とリリスを見る二人の姿だった。

「どうしたんだ、二人とも？」

「いえ、やっぱりこうなりましたか。」

「ジン様が助けに行っただけです。リリスが惚れても仕方ありません。」

そのことが、まあ俺は、前から俺の女発言しているしな。リリスを見ると。

俺の背中に隠れて顔を真っ赤にしてもじもじしていた。なにこれかわい。

「今日は、譲りましょう」

「今日だけですよ、リリス」

リリスが小さく返事をした。

「うん」

---

今このテントには俺とリリスが向き合って座っている。



リリスが髪と同じくらい真っ赤な顔で一生懸命に

「あの、ジンお願い、抱いて」

俺は無言でリリスの手を持って引き寄せ、キスをする。俺は、長いキスの後リリスのすべてを征服していった。

リリスは、冒険者なだけあって体力がありすべての行為を受け入れてくれた。

## 異世界7日目

横で裸のリリスが寝ている。起こさないようにその場を出る

今日で依頼二日目か、と思いながら鞘からテツを取り出します。取り出した小太刀に

「そういえばお前、金属とかを吸収するんだよな。」

「【そうですよ、主】」

「これなんかどうなんだ？」

昨日手に入った、ノワールサイの鉱石をテツの近くに置く。

「【これはノワール鉱石ですね。かなり良い物ですね、吸収してもよろしいのですか？】」

「ああ、かまわない」

「【それでしたら私をノワール鉱石の上に乗せてください】」

「どうか？」

テツを、ノワール鉱石の上に置く。すると、鉱石が光だし粒子になってゆつくり吸収されていった。鉱石がなくなると、今度は、テツが光だし光が消えるとテツの刀身が綺麗な黒色になっていた。

「へえ綺麗だな。」

「【ありがとうございます。】」

なんか、うれしそうだな。

「【切れ味も良くなっていますよ。昨日の魔物を切れるくらいには】」

それは、何気に凄いのではないのか？聞いてみると

「【それだけ良質だったのです。倒し方も良かったのでしょーう】」  
ああ、丸焼きだったもんなあ。たしかに傷なんかもなかっただろーうな。

あとは、問題がひとつある。これを解決するために討伐に出る前に一度皆にあつまってもらった。

「実は、これからの討伐に問題がでてな」

「問題ですか？それはどのような？」

「聖痕を使ったときに見つけたんだが。ノワールサイが、奥のほうにまだいるんだ。」

「『『えええ！』』』」

「だから、俺が先行して倒すから皆にはここら辺の魔物を討伐してほしい」

「わかりました、けど、大丈夫なんですか？Aランクなんですよね。」

心配そうにソフィアが聞いてくるそれに

「大丈夫だよジンなら、私を助けてくれた時も余裕そうだったし。」

自慢げにリリースが答えた。

「そうゆうことじゃあ行つて来るね。と、その前にリリス『採取』の魔法教えてくれる」

「いいよ」

『採取』を教えてもらった俺は、一人森の奥に向かった。

- イリヤサイド -

ご主人様は、森の奥に行つてしまいました。私達は、この辺りの魔物の討伐を任せられました。

今日もご主人様とあまり一緒にいられないのが残念です。

それにしてもあの聖痕の発動『嵐帝』といいましたか、あれは凄かったです。精霊術師ではない私にも精霊の存在がわかるほどの精霊が集まっていたのです。

その後の探知も数秒で終わりました。後で聞いたら、風の精霊は探知が得意で、雷の精霊の次に早いそうです。

その力で救われた、リリスは、帰ってきたときすでにご主人様のことが好きになっているようでした。それにすごく可愛くなっていました。

このあたりの魔物を粗方片付けたころ、お昼になっていました。ソフィアさんが

「そろそろお昼にしませんか？このあたりにはもうあまり魔物はいないようですし。」

この方は、ソフィアさんご主人様のこの世界に来たときから行動を共にしているそうです。羨ましいです。

「そうだね、ジンもまだかかるだろうし」

こちらはリリース、私の友達です。奴隷にされていたときにできた友達でいろいろ相談に乗ってもらいました。ご主人様という呼び方も彼女に教えてもらいました。

私もお腹がすいてきていたので

「私も賛成です。」

三人一致で昼食となりました。周りの良く見える場所に移動して、携帯食料や果物やパンなど簡単な物を食べています。

実は、このパーティー料理の得意な人がいなかったのです。ご主人様が一番まともではありましたが、簡単なものしか作れないしこの世界の食材に詳しくないと行っていました。いつかは、改善したいです。

「リリースさん、昨日はどうでした？」

いきなりソフィアさんが爆弾を投下しました。

「ど、どうってなにか」

「夜の営みです。」

「えと、その、ねえ」

リリスはこの方面は、ウブですねえ。

「勘弁してください。」

リリスは、何気に一番ウブだと思います。  
そういえば、

「そういえばこうやって三人で話すのって初めてですね。」

「そうですね。いつもジン様がいましてから。」

「そうだよね、私達の中心って間違いなくジンだしね。」

「あっ」

ソフィアさんがなにか思い出したようです。大事なことなのか真剣な表情で教えてくださいました。

「ジン様もいないですし、伝えたいことがあります。これは、ジン様がこちらに来たばかりのことなのですが。」

ジン様が、（ありがとうソフィアついてくると言ってくれて。俺実はこの世界では、一人ぼっちだったんだよね）といていたことがあのです。」

「それって」

「ご主人様」

声に、悲しみが混じります。

それは、どれほどの孤独なんだろう。わたしはご主人様の強さに目を奪われて、私はそのことに気づけませんでした。

「当たり前なんですけど、この世界にジン様が来たとき、縁のある人は一人もいませんでした。

ですから、仲間であり私と同じでジン様が大好きなあなた達に話したのです。そしてこれからも一緒にジン様を支えていきたいのです。お強いジン様の孤独を埋め、支えるのは一人では無理ですから」

「そうですね。もっと力をつけて役に立たないといけませんね。その点リリスはいいですよねえ、冒険者の知識を持っているからご主人様のお役に立てて」

「でもあたし冒険者なのに戦闘では役に立てなかったし、イリヤは治癒術があるじゃない」

「ご主人様は怪我しませんし、してほしくもありません」

「私も攻撃の術がまだいまいちで。」

・  
・  
・

「「「はあ」「」」

みんなでため息をついてしまいました。

「でも好きな人のためです。がんばりましょう。」

「そうだね」

「その点は、ここにいる人は大丈夫でしょう」

私達は、決意と結束を強い物にしてご主人様のため何ができるかを考えます。

日が沈む少し前にご主人様が帰ってきました。私達は三人ともご主人様のもとに走って向かいます。

「お帰りなさいませ、ご主人様。」

「お疲れ様です。ジン様」

「おつかれ」

「ただいま、みんな」

ご主人様は最初驚いていましたが、すぐにうれしそうに笑ってくださいました。

ご主人様ずっとお側にいますよ。

経過報告としては、昨日より順調に進んでいます。内容としては

1日目 072

2日目 242

内 ジン 105

ソフィア 028

イリヤ 036



リリース 073

これなら一週間より、はやく終わりそうですね。

「ご主人様、あしたも頑張りましょう。」

## 14話 三人の思い（後書き）

最後まで読んで頂きありがとうございます。

ご指摘・ご感想等ありましたらよろしくお願いします。

## 15話 討伐報酬と幼い龍

異世界11日目

「お帰りなさいませジンさん。ご無事で何よりです」

俺達は、5日で依頼を終え6日目には王都に戻りそのままギルドに  
来ていた。

「クレアさんお久しぶりです。これが討伐数です。」

そう言っただけは、ギルドカードを見せる。

クレアさんが俺のカードを、受け取りながら三人に。

「他の皆さんのも見せてもらってよろしいでしょうか、内訳が計算  
に必要なので。」

三人も渡す。クレアさんが内訳を読みはじめた

「え〜とノワールサイが、さん、た、い？」

「どうかしました？クレアさん」

「あの、欄にAランクの魔物があるのですが」

「ええ、倒しましたよ。あ、リリースに聞いたんですけど、素材つて  
ここで買い取ってもらえるんですね。」

「え、ええ、はいそうです。能力ランクCでAランクの魔物を倒し

ますか、さすが聖痕保持者ですね。・・・ちょっと待っていてください。」

奥に戻り、貫禄はあるが少し疲れていそうな中年の男性が連れて戻ってきた。

「君がAランクの魔物を倒したのかい？」

少し不審そうにしている、仕方ないがちょっとムカつくな。なので証拠を出す

「ええこれがノワールサイの素材です。」

角とノワール鉱石を取り出す。

「こちらの方が例の聖痕保持者です。」

「・・・聖痕を見せてもらってもいいかな？」

クレアさんが話しているのなら仕方ないか。

「どうぞ」

左腕の聖痕を見せる。

「先程は失礼しました。ギルドマスターのガルダと申します。突然ですが特例であなた達のランクを上げたいと思うのですがよろしいでしょうか、クレアの推薦でして。」

「はい？いいんですか？」

「ええ実力がある人に、依頼をどんどんやってもらうためにたまにあるのですよ。受けていただけますか？」

「まあランクが上がるのはありがたいから構わないが」

「それでは、Aランクを倒した、ジンくんはEランクからBランクに、イリヤさんとソフィアさんはFランクからEランクに上げたいと思います。」

「いきなりBですか、よろしいので？」

「ええそれだけ期待しているのです。それでは、わたしはこれで仕事がありますので」

奥に戻っていつてしまった。すぐに行ってしまったたな忙しいのか？  
思わぬ形で昇格してしまったたな。

「それでは、報酬についてですねちょっと待ってください」

討伐した内訳は

総合討伐数 812

内訳

ノワールサイ	003	ハイウルフ	332	グリーングリ
ズリー	101	ラビットドン	296	バインドスネーク
80				0

となっている。

上乘せ報酬は

Aランク⇨金貨一枚  
Bランク⇨半金貨一枚  
Cランク⇨銀貨一枚  
Dランク⇨半銀貨五枚  
Eランク⇨半銀貨一枚  
Fランク⇨銅貨一枚  
Gランクの魔物はいないらしい  
「上乘せ報酬としては、Aランクが3、Dランクが181、Eランクが628なので。超過の12体を除いて金貨三枚と半銀貨152枚分なので総額45210ギルになります。」

「「「「「おお「「「「」

「お金持ちです。」

「一週間で45000ギル、冒険者って儲かるんですね。」

「いやいや本来Eランクの報酬じゃないからねこれ、普通なら10000ギル前後ってところだよ。」

リリスが二人の間違いを正している。  
それを横目に

「素材の方はどうなりますか？」

「ちょっと待ってください、ええと、ノワールサイの角700ギル、ノワール鉱石ひとつ250ギルいくつ売りますか？」

「?ほかにも使い道が？」

「ありますよ、鍛冶屋で加工したり需要の高いところで売ったりです  
ね。」

角は3本、鉾石は14個ある（ひとつはすでに消費している）  
一応少し残すか

「じゃあ角を二つと鉾石を12個売ります。」

「はい、ありがとうございます。4400ギルになります。」

合計49610を受け取り

13500 + 49610 = 63110

持ち金63110ギル

「クレアさんこの辺りで一番いい鉾石って何ですか？」

「鉾石ですか？」

「金属ならなんでもいいですよ」

「それなら竜輝石がありますが。これは入手困難なんです。」

「なぜですか？」

「昔はよかつたんですが、今は龍の縄張りなのです。」

いるのか龍が

「龍ってやっぱり強いのか？」

「種類にもよりますが上の方は最強種に選ばれるほどです、知能も高く言葉も扱います。」

「ぜひ見てみたい会ってみたい。」

それに協力を取り付けられれば大きな戦力になる。決めた

「それってどの変ですか？」

「・・・行くのですか？」

クレアとしては心配なのだろう

「行く」

「あなた達はいいの？」

クレアさんは後ろの三人を見る。

「どこまででもついていきます。」

「ご主人様の望むままに」

「右に同じ」

クレアさんがしびしび。

「わかりました。教えますよ、龍のいる場所はノーバル山です。」



俺は今ひとりでノーバル山にいる。なぜ一人かというクレアさんが

「ただしあそこは龍がいるのでBランク以上の人しか入れません。」

「「ええ〜」」

「やった」

リリスが喜んでるが

「リリスは、王都に残って長旅の準備をしてほしいんだ。」

「ええ〜」

三人には駄々をこねられたが何とか説得した。ベットの中で。

そういうわけで一人で山の頂上を目指しているのだ。ここに来るのに一日かかった。

ここは、龍がいること意外はいたって普通のところで。龍がいないころのノーバル山は、Dランクの冒険者が入れる山だった。だから、強い魔物はいないはずなのだ、はずなのだか。

少し先で小型の龍とBランクの牛鬼三体が戦闘していた。いやどちらかというと牛鬼が小型の龍を襲っているようだ。

どうするか迷っている間に牛鬼の持つ棍棒が龍を襲い直撃を受け倒れてしまった。

(悩むのはやめだ)

まず助ける。それからだ

決めたら即行動、駆けると同時に龍に止めをさそうとする牛鬼の顔に炎球を叩きつけ一番近い牛鬼の首を後ろから鉄餓刀で切り飛ばす。

あと二匹、こちらから手を出さなかった牛鬼がここで状況を理解したらしく棍棒を振り下ろしてくる。これの攻撃に対し、右の鉄餓刀で受け流しながら風を纏った左手で喉を貫く。首に穴の開いた牛鬼は、血を吐きながら後ろに倒れる。

あと一匹、最初に炎を顔にぶつけた牛鬼は、仲間が倒されたことで逃げようと背を向ける。その背を見ながら左手を空に掲げる

「『落雷』」

上空に集めていた雷の精霊で牛鬼に雷を落す。

『落雷』を受けた牛鬼は黒焦げになり絶命する。

ひとまず片付いたな。

龍の状態を確認しようと、後ろを向くと女の子になっていた。

「・・・何故に？」

気を失っている女の子が答えてくれるはずもなく、疑問はなくならないが。

「まあまず安全なところに移すかね」

近づく顔が見えた。文句無し的美少女だ。驚くほど綺麗で長い銀髪だ。年は10歳くらいに見えるが龍であるなら見た目はあてになるのかわからない。

少女が横になれる場所を作りそこに寝かせ、精霊術で結界を作る。荷物の中で一番回復効果のあるポーションを少しずつ飲ませる。

俺にはこれ以上のことができない、駄目だな俺。

夜通し看病を続けいつの間にか寝ていた。

## 異世界14日目

座ったまま眠っていたらしい、目が覚めると少女は先に起きていた。どうすればいいのかわからないといった感じだ。

昨日のことを思い出し、こちらから話しかける

「おはよう、体大丈夫？」

「は、はい。大丈夫みたいです。」

答えてくれた。さてどうしたもんか。

「良かったよ、ポーションが効いたんだね。龍に効くか心配だったんだ。」

「あの、ありがとうございます。わたしは、ティリエルと申します。」

「そんなにかたくならないでいいよ。俺はジン、冒険者だ。」

「あの、何で助けてくれたのですか？それにこんなに親切に」

「うーん、何故と聞かれても特に理由は無いんだよなあ。牛鬼がムカついたからかな？親切にしたのは、君が可愛かったからかな」

「な、なな、なんです。いきなり」

真っ赤になって慌てている。初々しい反応だ。

「いや俺は、君の問いに答えただけなんだけど」

「むう、変な人です。それだけで助けるなんて」

「いやいや、美少女は貴重だよ、宝だよ」

「も、もういいです。それでなにかお礼がしたいんですが」

「そんなのいいよ。」

「そういうわけには」

身を乗り出そうとして

「イツ」

痛みに顔をゆがめるティリエルに

「じゃあお昼までは安静にしておいてくれると助かるかな」

「むう、わかりました。そうさせてもらいます。」

やはり本調子ではないようだ。不服そうではあったが横になってくれた。

「そういえば籠って、なにが食べられるのかな？」

「人と同じ物を食べますよ。」

「それじゃあ軽く食事にしよう。」

持ってきた食べ物の内、果物類を中心に渡す。

「いいのですか？」

「いいのいいの。そういえばこれからどうする？」

「父の所に戻ろうと思います。心配しているでしょうし。」

「そっか」

そういえば俺って籠りに会いに来たんだけ。ティリエルに頼んでみようかな、と考えていると。

「あの、一緒に来てもらえませんか？」

## 16話 聖痕使いVS銀龍

あの後、いつしよにティリエルの父親の所に向かうことが決まった。朝食を食べた後にポーションをもうひとつ飲んでもらい、いくらか良くなったがまだ体が痛むようなので、俺が背負って行くことにした。

背負われたティリエルは、この時、道を指差しながら

（背中広いです。強いし優しい、私にはないけどお兄様とはこんな感じなんでしょうか。）

なんて暢気なこと考えており、この後起こるであろうことをまったく考えていなかった。

ティリエルの言うとおりに進み、開けた所に山小屋が見えてきた。山小屋？え？

「もしかしてあれ？」

「そうですあれです。」

なんとというか。イメージが崩れていった。

「家なんだね」

「わたし達を何だと思ってるんですか。私達は、人の姿になれますから、家にくらい住みます。それに人の方が燃費もいいんですよ、怪我したとき人の姿になったのもそのせいです」

それでかと俺が疑問をひとつ解消していると。山小屋の扉から

「ティリエル、いつたいど・・・ここに・・・」

渋いおっさんが出てきた。おそらくティリエルの父親だろう。心配していたのだから慌てて出てきた、しかしそのティリエルの父親の言葉が途中から小さくなっていつて最後は俺に焦点を合わせる

「貴様の仕業かー」

「・・・面倒そうな父親だね。ティリエルちよつと降りてもらっていい」

「人の娘を勝手に呼び捨てにするなー」

「落ち着いてください、お父さん」

「だれがお父さんだー」

最後はちよつと遊んでみた。

「貴様殺す」

ティリエル父は、いきなり銀色の光に包まれ丸い光の玉ができる。それが一気に大きくなって二階建てくらいの大きさで光がはじけた。すると中から、いかにも強そうな銀龍があらわれた。銀龍は、この世界でも有数の力を持った存在らしい。たしかに、彼から受けるプレッシャーは、戦闘時の精霊王たちに近いものを感じる。手加減なんてできそうにない。

「ティリエル急いで離れて、ちよつと派手な喧嘩になりそうだ。」

「だめです。死んじゃいます。私とした方が」

泣きそうになっている。まったく父親の癖に何してるんだ。ティリエルの頭を撫でながら

「大丈夫どつちも死んだりしないから」

いざとなれば切り札もある。

「信じますよ。」

「信じて。」

ティリエルは急いで距離を取る。

「娘といい雰囲気をつくるな——」

「うっせー、子離れの時間だ親バカやろう」

聖痕使いと銀龍の喧嘩が始まった。

「『七重・土壁』」

まず土壁で俺の姿を隠すが、すべての土壁を尻尾の一振りで破壊される。狙いの定まっていな尻尾をなんとかよけて、土煙の中側面に回り込む。

「『炎蛇・四首』」



炎の蛇、四匹で多角的に攻撃する。三匹直撃した。が、まったくの無傷、しかし驚いてはいた、俺が二種類の精霊を使ったことに対してだろう。それでも銀龍はその驚きを押し隠し、避けずにつくった時間を使って魔法を行使する。

「駆けるは魔の風、無数の刃となりて我が敵を切り刻め『トルネード』」

チツ、口を狙うんだった。というか喋れるんだな。放たれた『トルネード』は広範囲に回転する風をぶつけてくるものようだ。その中に、風の刃が無数に存在する。詠唱そのままだな。

これは防ぐのも避けるのも難しい。なのでもうひとつの方法を取った。

次の瞬間俺のいた場所に『トルネード』が直撃する。風が止むと俺は、

地中から這い出た。

つまり、地中に潜ったのだ。それを見た銀龍はそれならばとプレスを放とうとしている。

このバカがこいつクラスの龍がプレスを放てば周りが吹き飛ばすぞ、ティリエルのこと忘れていないか。仕方なく

「火の聖痕を発動『炎王』」

体を炎が包み炎の鎧を着ているようにも、ジンが燃えているようにも見える。

銀龍はまた驚きながらもブレスを放つ、規模は小さい意外と冷静か？それとも侮っているのか？

「『陽炎竜砲』」

俺はそのブレスを、超高温の熱線で全力を持って迎え撃つ思ったよ  
リブレスの規模が小さかったため、一瞬の拮抗の後、熱線がブレス  
をお押し返し銀龍に向かう。

銀龍は、自分に向かってくる熱線を見てブレスを中断し熱線を避ける。  
熱線は後ろの森に落ちクレーターを作る。

「避けんな！」

「避けるわ！」

ちっ、炎蛇はよけなかつたくせに。

あゝあ、銀龍の後ろの森が火の海だよ。

「貴様、聖痕持ちかそれに複数の精霊術を扱う。人間か？」

「失礼なやつだな。俺は異世界人だ。」

「ほう、いつそその方が納得ができる。面白い、良かろう次の攻撃  
を凌いだら娘との仲を認めてやる」

まだ勘違いしてるよ。まあ親に先に認めてもらうのも悪くない。

俺は『炎王』を解除し、

「いいだろう受けてたつ。土の聖痕を発動『岩皇』」

『岩皇』は『炎王』とは違い見た目は変わらない。しかしよく見るとジンの足が地面に沈んでいる。ジンがとてつもなく重くなっているのだ。

「ほかの聖痕もあるのかますます面白い受けてみる、銀龍の最大のプレスを」

「受けてたつ。全力防壁『土鉄岩金壁』」

これは、土壁・岩壁・鉄壁・金剛壁の壁を最大の大きさでつくる術で、もつとも防御力が高い。

完成と同時にプレスが放たれる。土壁が岩壁が受けて威力を散らし鉄壁と金剛壁が防ごうとする。

金剛壁に亀裂が入った。地形すらも変えるだろう凄まじい威力。しかしこの術の最大の特徴、

それは、防壁の維持が必要ないことだつまり。

「雷の聖痕を発動『雷神』」

『雷神』は雷が体を包みジン自身が雷のように見える。

「『タケミカヅチ』」

雷で螺旋状の槍を作り出し、プレスが防壁破ると同時に投げる。雷槍は、プレスの中心を突き破って進む。勢いは止まらず銀龍は、直撃する前にまたも避ける。

「どひょ」

「・・・完敗だ。まさか人に押し返される、いや貰かれるとは思わなかったよ。」

そう『タケミカツチ』は、雷の槍を回転させて一点を貫く技だ。

「いいや、まだだ、あんたに見せたいものがある」

「まだ何かあるのか？」

「ある。この後話することを円滑にするために見といてくれ」

「いいだろう」

俺は、銀龍に切り札を見せる。

---

今日の前には、誤解を解いたあとティリエルと銀龍あらためアルベルトさんに、魔物の大侵攻についてと異世界人であること、精霊界で修行しすべての聖痕を持っていることを話し終わったところだ。

「そのための切り札か。それでここに来た目的はなんだ？大体予想はつくが。」

「まずは、アルベルトに戦列に加わってほしいんだ、頼む」

俺は、頭を下げる。

「・・・いいだろう。我はしばらくの間ここにいるから、必要なときに呼んでくれ。」

「いいのかそんなにあっさり、龍でも危険な戦いかもしれないぞ」

「かまわない、ジンは我を凌駕しているし、全力をぶつけ合った仲だ。龍は強い物に従う。それに私はジンと友になりたいと思っている。」

凌駕か、確かに切り札の俺は反則みたいなものだからな。しかしこれはありがたいので。

「ああ、これからもよろしくアルベルト」

「そこでだな。ひとつ頼みがある」

「なんだ？」

全然予想がつかない。

「ティリエルを連れて行ってやってほしい」

「なにを言い出すのです。お父様！」

「はっ？お前ティリエルのことであれだけ怒ってたじゃないか。」

「まあ、そろそろティリエルにも世界を見せるべきだと思っていたんだ。ジンなら安心だ。それにティリエルもお前のことを好いてい

るようだしな。そうだろうティリエル？」

「うっ……はい」

頬を染めて小さく頷く。

「えと、俺複数の女性と関係持ってますよ。」

「龍はそんなこと気にせんよ、なあティリエル。」

「はい、その、連れて行ってください。お願いします。」

「いや、でも、まだ年齢的に」

「私これでも15歳です！」

15歳なのか12歳くらいに見えるぞ、でもかわいいしいつか。

「わかった。ティリエル一緒に行こう。」

うれしそうな表情を浮かべた後、恥ずかしそうに頼んできたのが

「あの、お兄様と呼んでもいいですか？」

これはいい、可愛すぎる、アルベルトの前なのにティリエルを抱きしめてしまった。

抱きしめられて赤くなったティリエルに

「こちらからお願いしたいくらいだ。よろしくティリエル。」

「はい、お兄様」

「うおーーー」

アルベルトが暴走しそうななるが、

「お父様！またお兄様に迷惑をかけたら承知しませんよ。」

「ううゝわかったよ、すまなかったよ」

「本当に反省していますか、お兄様でなければ死んでいたんですよ。」

俺としては、この世界で始めて本気で戦闘をできて楽しかったのだが、ティリエルは先の戦いについて父に対して少しご立腹らしい。旗色が悪くなったのを感じたのか

「そういえば先程、まずは、とっていたね。まだあるんじゃないかな？」

話を変えてきた。なのでもうひとつの方をきりだす

「竜輝石つてのを探している。ついでに入手もしたい。知っているか？」

「ああ、知ってるしちょうどあるぞ。もう必要ないからあげよう」

「もう必要ない？」

「竜輝石は幼い龍が成長するのに必要な物でな、人間で言う栄養みたいな物だ。そしてティリエルには、もう必要ないからな。」

それでこの山に住み着いていたのか。それより少し前は、必要だったのか。

引き出しから袋を取り出し、渡してきた。竜輝石がいくつか入っているようだ。

これが竜輝石か。竜輝石は、自分で光を放っている宝石の原石に見えた。光が強いほどいい物らしい。

「そうか、ならありがたく貰おう。」

竜輝石の入った袋を冒険者の袋に入れる。

「今日は、泊まっていくといい、戦闘で疲れただろう。わたしも今すぐ娘と別れるのはつらい。」

後半に本音が出ているぞ。まあ聖痕を三つも使って疲れているのは事実だから。

「そうさせてもらおうかな」

「それでは、もう遅いですしお食事にしましょう。」

ティリエルの雰囲気に対し料理は丸焼きというワイルドなものだった。こんな山奥ではしょうがないか。



夜、枕を抱え黒いひらひらした寝巻きを着たティリエルが、

「お兄様、あの一緒に寝てもいいですか？」

本当に可愛いなティリエルは、

「いいよ、おいで」

この夜は一緒に寝た。ティリエルは抱きつき癖があるようで、腰に腕を回し、脚を俺の脚に絡ませてきた。

この日は俺もティリエルを抱き枕にして寝た。寝ただけだぞ。だってアルベルトいるしな。

16話 聖痕使いVS銀龍(後書き)

ご指摘・ご感想等ありましたらよろしくお願いします。

## 17話 小太刀が少女

異世界15日目

目が覚めると綺麗な銀色の髪があった、下を向くとティリエルの寝顔があった。

起こすのも忍びないので起きるまでティリエルの感触を楽しむことにした。

しばらく楽しんでいるとティリエルが起きた。

「おはよう、ティリエル」

「おはようございます。お兄様」

寝ぼけ眼で、すりすりしてくる。徐々に、目が覚めてきたのだろう。恥ずかしくなったのか顔が赤くなってきた。逃げられないように頭を抱きしめる。

「あうあう」

ちよつとやりすぎたかな。開放してあげて

「起きようか」

「はい」

「それでは、お父様行ってきます。」

「行ってらっしゃいティリエル。ジン、ティリエルのこと頼んだよ。」

「ああ、大事にするさ。」

こうして俺と顔が赤いティリエルは、王都に向かった。

## 異世界16日目

王都に戻ったのは昼過ぎだ。集合場所の宿に行ってみたが、皆出かけていたのでもうひとつ二人部屋を取って部屋に向う。

部屋に入ってテツを取り出す。

「【主、どうかしましたか？】」

「ひゃ」

ティリエルが驚いている。二人しかいないはずの部屋で突然知らない声が聞こえたのだから当然だろう。

「こいつは鉄餓刀のテツ、俺の小太刀だ」

「【初めまして、ティリエルさん。】」

「は、初めまして、テツさん」

「テツいい物が手に入ったんだ。」

竜輝石を取り出しす。

「【竜輝石ですか、吸収してもいいですか？】」

なんかテツの声がはしゃいでいるように感じる。

「いいぞ」

テツと竜輝石を重ねる、いつかのように竜輝石が、粒子になって吸収された。黒い刀身が変化して白い龍の模様が現れた。しかし、今回はそれで終わらずに光が強くなっていき光が球体ようになった。アルベルトが銀龍になった時のものに似ている。光がはじけてなくなったとき裸の少女が現れた。

「主二つ目で人の姿になれました。」

「・・・テツか？」

「はい。テツですよ主。」

にっこり笑って抱きついてくる

「テツまず服を着ようかティリエルも驚いてる。ティリエル服を貸してあげてくれないかな。」

「ご主人様帰って来たんですか。」  
「ジン！」「ジン様」

三人が来てしまった。

簡単に今の状況をいうと、龍のいる山から戻ってきた主が二人の美少女を侍らせていてしかも片方は裸だ。どう説明しようか。

「ご主人様、龍の山に行つたはずでは？」

「どうして女の子を侍らせてるんですか？」

「どうして裸なのかな？」

「・・・まずはテツ服着て。」

何とかなだめてベットに座って説明を始める。

「こっちはテツだよ。」

「えっ、テツさんなんですか」

「そっだ、俺も驚いてな。竜輝石を吸収させると人の姿になったんだよ。」

「あらためて、はじめまして主の刀で所有物のテツです。ハーレム加入を希望します。」

テツがすかさず俺の膝の上を占拠する。

「歓迎するよ。」

「こんな子だったんだ」

「わかんないもんだね」

「羨ましいです。」

「こっちはティリエル、龍だよ。それも銀龍」

「わ、わたしもハーレムに入りたいです。」

ティリエルが何故か焦っている。テツのせいか？

「もちろんだよ、おいでティリエル。」

ティリエルは、うれしそうに俺の右隣にやってくる。

「まあもうあきらめています」

「そうだね、目を離れた数日で二人も、いやテツは元からいたんだ  
つけ。」

二人はあきれていた。もう一人は

「わたしもご主人様の隣に行きます」

といて左隣に座って服の袖を掴んできた。

この世界の女の子は、本当にハーレムに抵抗がないんだな。力が第一の世界だからか？それとも側室があるからおかしくないのか？  
まあいいか俺にとっていいことには変わらないからな。

「それじゃあ細かい事情を話すよ。」

説明が終わると

「龍にまで勝ったんですか。それも成体に」

「それもティリエルの父親ってことは銀龍だよ。龍の中でも上位のはずだよ」

「ご主人様、凄いです。」

「本当に凄かったんですよ。」

「ええ、主は凄いです。」

後半凄いしか言われていないな。

「これからのことについてなんだが、リリース準備の方はどうなった。」

「ばつちりだよ。長距離移動だから馬車と馬を買ったよ。ほかに保存食や必要な装備も。それで全部で15000ギルくらいだったよ。馬車は、ソフィアとイリヤが練習したから多分大丈夫だよ」

「ありがとう。三人とも」

「ふふふん、夜楽しみにしているよ」

「久しぶりですね」

「ご主人様、たくさん可愛がってくださいね。」

三人一緒にですか。それは楽しそうだ。

外はもう夕飯時だ。



「それじゃあ飯に行こうか。明日はギルドに行くからね。それでクイント皇国に行く日を決めようと思う。」

## 異世界17日目

目が覚めると身動きが取れなかった。右腕をリリスの、左腕をソフィアの胸に抱えられている。体の上にはイリヤに占領されている。皆裸だ。左右の二人にいたずらする。

「んっ」

「あっ」

起きたのでいたずらをやめて。

「おはよう二人とも」

「おはようございます。ジン様」

「おはようジン」

解放してもらった両腕でイリヤにいたずらして起こす。

「やん」

「おはようイリヤ」

「おはようございます〜ご主人様〜」

まだ半分寝ているな。

とても刺激的な朝だった。

ティリエルとテツを起こして食事を済ませてギルドに向う。

ここ数日の出費は

宿泊費	1500ギル	食費	1000ギル	その他	610	
ギル	合計3110					
63110	-	15000	-	3110	=	45000

今の持ち金45000ギル

ギルドについたが何か慌ただしいクレアの姿も見えないので。ほかの係りの人に頼んでギルドカードの更新とティリエルのギルドカードを作った。

名前 ティリエル 女 15歳 龍族

ギルドランク E

能力ランク 総合C 気力B 魔力C

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 ジンの義妹 幼い銀龍

・・・神のやつ義妹ってなんだ義妹って。それにしても『幼い銀龍』か幼いがとれるときが楽しみなな。

名前 ジン 男 18歳 人間

ギルドランク B

能力ランク 総合B 気力A 魔力C

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 聖痕使い 精霊王の友人 救世主 五人の女の主  
奴隷の解放者 精霊術師

俺は、気力と魔力が両方ランクが上がっていた。そういえば牛鬼と戦ったときよく動けたんだよな。  
気力が上がったおかげだったのか。

「ジンは、成長も早いね。まあAランクの魔物とか倒しちゃってるから当然っちゃ当然だけど。」

「五人に、増えています。人化してテツさんも含まれたんでしょうね。」

「はい、次ソフィアとイリヤ」

名前 ソフィア 女 18歳 人間

ギルドランク E

能力ランク 総合C 気力D 魔力B

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 水の巫女 精霊術師

名前 イリヤ 女 17歳 エルフ

ギルドランク E

能力ランク 総合C 気力D 魔力B

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 ジンのメイド 治癒術師

「うんうん、順調だね。こっちが普通だよ」  
「二人の能力が綺麗に並んだな」

「リリスは」

名前 リリス 女 17歳 人間

ギルドランク B

能力ランク 総合B 気力A 魔力C

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 ジンの護衛 熟練者

「変化ないな」

「まあBランクまで行くとCやBランクをたくさん狩らないといけないからね」

ギルドカードの確認が終わったところ、懐かしい声が聞こえた。

ジークだ。もう一人たしか俺が一撃で気絶させたやつだ。

「ジンくん久しぶり」

「誰なんですか？」

そういえばソフィア以外初めて会うな。

「ああ、彼はジーク。王都に来るときに知り合っただ。」

「彼女達は、俺の連れで」

「ソフィアです。ジークさん久しぶりですね。」

「イリヤです。ご主人様のメイドをしています。」

「リリスよ。肩書は一応ジンの護衛、ほとんどいらなけれど」

「ティリエルです。お兄様に最近同行させてもらうことになりました。」

「テツです。」

「これは、ご丁寧には俺はジークこっちはカイル一応俺の相棒だ」

「何だよ一応って。あの、ジンあの方はすまなかった。」

「いや別にいいよ」

「そつだ。そんなことよりジン早く王都を出た方がいい」

「？何故だ、その内出るつもりだったんだが」

「まだ、正式に公表されていないが、おそらく戦争が起こる。ギルドが騒がしいのもそのせいだ」

この国の王は、どこまでバカなんだ。

「・・・どこことやるんだ？」

「クイント皇国」

「待て、クイント皇国は、ここらで一番強いんだろう。戦争なんかして勝てるのか。」

「いいや。勝てないだろうな。」

「なら何のために」

「奴隷を作るため、だろうな」

「わけがわからん。奴隷もなにも負ければ国がなくなるだろ」

「・・・かつてこの国は、自分より大きな国を倒したことがある。その方法は相手の国の奴隷を軍のいたるところに配置しての特攻だった。兵は、戦えなかった。戦えた者も心を病んだ。」

「・・・」

俺は怒りで一瞬訳が分からなくなった。この国はこの世界はここまですごいのか。許されるのか。

「たぶん、勝つことが目的じゃなくて、クイント皇国の奴隷を得ることが目的だろう。そうなればクイント皇国も下手に動けなくなる。」

「ジンさん！戻ってきたんですね。」

クレアさんがギルドの外から入ってきた。

「お願いします。助けてください。このままでは、この戦争は泥沼化します。」

さっきの説明だけなら長期戦にはならないと思ったのだが、まだ何かあるのか。

「どういうことですか？」

「ここでは、ジンさんだけで奥に来ていただけませんか」

「わかった。皆は待ってて」

奥に来てと言われてきたが、そこはギルドマスターの執務室だった。もちろん俺を迎えたのはこの部屋の主ギルドマスターのガルダだった。クレアもいる。

「よく来てくれた。立ち話もなんだし座ってくれ」

正面のソファを指しながらの言葉に力がない。前会った時も疲れてるのかと思っただけ今は、度をこしている今にも過労で倒れるんじゃないかとすら思う。

俺がソファに座ると

「すまない、ギルドカードを見せてくれないか」

あまり見せたい物ではないんだが

「どうぞ」

しばらく俺のギルドカードを眺めると突然頭を下げて

「頼む、力を貸してもらえないだろうか」

「頭を、上げてくれ。まず何があったのか何が起こるのかを教えてください」

「そうだな、単刀直入にいう。この国の愚王が大使として来られる予定の姫を捕らえようとしている。」

「・・・そんなことをすればクイント皇国は引けなくなる。なるほど、泥沼だな」

あきれて怒りを忘れてしまった。

「ええ、何とか救ってお国にお返ししなければいけないのです。だが我々では大使達の居場所が分からないのです。力を貸してくれないか？」

「わかった、協力する。わかっていることは？」

「ほとんど分かっていないのです。」

それなら

「少し調べてみましょう」

部屋の窓に近づき

「『風見鳥』」

どこにでも居そうな鳥を二羽ほど作り出す。風の精霊に形を与えて偵察を行う術だ。これなら景色も見えるし音も聞こえる。

「それは？」

「偵察用の精霊獣です。」

そして言おうか迷ったが二人に



「……場合によっては、俺はこの国を滅ぼしますよ。」

「それもいいでしょう、この国は、たくさんの犠牲で成り立つ国。んな国はなくなるべきなのでしょう。」

「わたしも、別にこの国は好きではありません。ジンさん、思いっきりやっちゃって下さい。」

これで決まった。国民が滅べとっているのだ。決まりだ

この国、グーロム王国には消えてもらおう。

## 17話 小太刀が少女（後書き）

最後まで読んで頂きありがとうございます。

ご指摘・ご感想等ありましたらよろしくお願いします。

## 18話 愚王の蛮行

ここはグーロム王国の王都にある王城。

贅を凝らした広い部屋の豪華な椅子に豪華な服を来た男が座っていた。周りには、見目麗しいの奴隷の女性を侍らせていた。

若い兵士が、伝令に来た。

「申し上げます国王陛下。」

「話せ」

「クイント出身の奴隷の選別はまもなく終わります。その、その後国内のクイント皇国出身の者を奴隷にするとありますが、よろしいのですか？」

「余に意見するののか？」

「い、いえ決してそのようなことは」

若い兵士は、慌てて弁明する。

「しかたない、余自ら話してやろう」

国王は、すばらしいことのように

「此度の計画は、クイント皇国の皇女レティーシアを捕らえ奴隷とし戦争の旗頭とする。そして今回の戦争でクイント皇国の力を削ぎ、

手にいれた奴隷で最近うるさいクイント皇国を黙らせる、というものだ。そのために多くのクイントの奴隷が必要なのだ。しかし数が少ないならば作るしかないだろう奴隷を。何か意見があるか？」

「いえ、そのようなことは、ありません、陛下の深いお考えに感服いたしました。」

このとき若い兵士の中には、

（そんな理由で奴隷を作ればこの国から人が出て行くのではないか、皇女を奴隷にしたら皇国との泥沼の戦争になるんじゃないか等疑問は尽きないが、ここは追従するしかない）  
その言葉を聞いて満足したのか

「さがれ」

若い兵士を下がらせ、別のことを口にする

「おい、レティーシアの方はどうなっている？」

側のぶくぶく太った文官風の男が

「ラシード將軍に騎士団500名を変装させて持たせ捕獲に向わせました。今頃コルテス地方の辺りでしょう」

この王城内の奴隷以外のほとんどの人種は、こんなばかりである。他国の姫を呼び捨てにしたり、捕獲などとほざくのが当たり前なのだ。

「それでは、期待しよう。かの姫騎士を奴隷として迎える日が楽しみだ。」

といやらしい笑みを浮かべた。

これを精霊で作られた鳥が一部始終を見て聞いていた。

ところ変わってギルドのギルドマスターの執務室のジン。

「なんだ、これは！。皇国を黙らせるこれだけのために戦争をするのか、そんなことをすれば最悪の場合共倒れだぞ、負けなくても、この国から人は離れる。この国は、何もせずとも滅びる。混乱だけを残して」

「それがこの国の末路ですか」

少し寂しそうにクレアさんが聞いてくる。

「ああ、この国は、終わる。だから最もいい形で終わらせる。終わらせてみせる。」

決意を込めて二人を見る。

「手を貸してもらいますよ。ギルドマスターあなたの依頼だ。」

「任せてくれ。どうすればいい？」

「まずは、後見人になってもらう。二つ目ここからクイント皇国に行くにはどうしたらいいか教えてくれ」

「後見人の件は任せてください。クイント皇国に行くには三つの道があります。」

「ならその三つの道が描かれている地図はあるか？」

「クレア取ってきてくれ」

クレアさんが慌て部屋を出る。

「あとこの世界の戦争を簡単に教えてくれ。」

ギルドマスターに、簡単な説明を受けるが、ほとんど予想の範疇だった。飛び道具が魔法になっている感じで白兵戦が基本らしい。

「持ってきました。！」

「ありがとうございます。コルテス地方とはどの辺りですか？」

「ここです。」

ガルダが指したのは、王都とそんなに離れていないところだった。近いかなりやばそうだ。だが、離れていないとはいってもおそらく徒歩で二、三日はかかる。まだ間に合うかもしれない。

「この地図は借りれますか？」

「本来はよくないのですが、持って行ってください。」

「最後に、俺のことは内密にお願いします。」

「わかった」

「わかりました」

「では、姫様を救いにいきます。」

皆のところに戻り開口一番に

「すまん、またちょっと出る。ティリエルだけ付いて来てくれるか、テツは小太刀に戻ってくれ」

「……またですか」「」

三人が泣きそうになる

帰って来たばかりだからな。

「すまん緊急なんだ。三人は、クイント皇国の皇都に向ってくれ。ジーク突然で悪いが、三人の護衛をしてくれないか、金は払う。」

みんなの表情が変わる。この情勢での緊急だ碌な事ではないだろう。

「お金は、いいよ。もともとこの国を出るつもりだったんだ。借りも返したいしな。」

「じゃあ頼む、お前達は皇都に行くのに一番短い道を通ってくれ。」「  
むくれる三人の頭を撫でてやる。」

「すまないな、すぐに出ることになって。」

「早く来てくださいね。」

「怪我しないでくださいねご主人様」

「いつか絶対ジンに「ついて来てくれ」って言わせてやるから」

「楽しみにしているよ。あれテツは？」

「【主ここに】」

テツが座っていた椅子に小太刀があつた。

「ティリエルできるだけでいい俺を乗せて飛んでくれないか？」

「お兄様、喜んで」

嬉しそうに言ってくれる

「ありがとう、時間がないすぐに出る。いいかい？」

「はい。大丈夫です。」

「じゃあ行こう」

外に出て三人に振り返り出てきた三人をまとめて抱き締め。

「行ってくる。」

「はい。行ってらっしゃいませ。」

三人が見送ってくれる。



龍化したティリエルに乗って飛びだつ。

なんの障害物もない空を飛んで目的地に向かう。

二時間ほどでティリエルが疲れ始めていた。

まだ幼く体もあまり大きくないのに良く頑張ってくれた。

一度地上に降りて方向を確認してから、ティリエルを脇に抱えて走り出す。

ランクAに上がった気力を使って『闘気』（全体的な身体能力の強化）を使う。

二時間ほど走り。

コルテス地方の手前で

「ティリエル飛べるか？」

「なんとか、乗ってください」

「いやここからは探索もやるから、自分で飛ぶよ」

「飛ぶ？」

ティリエルが、きょとんとしている。

「聖痕発動『嵐帝』」

精霊を使ってコルテス地方全てを見渡す。いた、かなり街道をそれている。逃げている最中のような。追っているのは百人ぐらい、別のところに四百人いる。

追っている方を潰すことにする。

「ゆっくりでいいから付いてきて。すぐに降りたらダメだからね。終わったら俺が呼ぶから」

そうティリエルに注意して

『嵐帝』の力で人の身で空を飛ぶ

追いついたときには、もう乱戦になっていた。

人間が入りに乱れているこれでは白兵戦しかできない。テツを抜いて空から落ちるように飛ぶ。

三人で一人に攻撃する山賊風の男達がいたので、真ん中の男を、空から地上に落ちるのに合わせて肩から斜めに切り殺す。男の体は切った軌跡にそって斜めにずれ血を噴き出して絶命した。

着地と同時に一人殺し、立ち上がって右の男を小太刀で首を切り飛ばし、左の男は風を纏った左手で首を突き刺す。

三人を瞬殺した俺は、攻撃を受けていた奴を見ると

ジリッ

警戒されていた。しかたない突然空から降ってきたのだからな。驚いたことに、助けたのは女だった。女騎士だった。美人だが今は時間が無い

「助けにきた。今は、先にコイツらの殲滅を手伝って欲しい。」

女騎士もそうするべきだとわかっていただろう。頷いて

「わかった。感謝する」

俺は、近くの山賊風の一団に突っ込んでいく。女もついてきた。

一番近い敵を小太刀で切り、別の者を炎で燃やす。囲まれそうになると風で吹き飛ばす。三方向から攻撃されれば水で防いだ。その間に、俺は刀技の実践を重ね洗練されていく。

戦いの中、刀神との修行を思い出し、徐々に精霊を使わずに回りの敵を片づけるようになり、精霊は周りの援護につかうようになっていた。

三人を相手にしていたことから見当はついていたが女騎士もやはり相当の手練だった。

長剣を巧みに使い危なげなく敵を倒している。一対一なら不覚を取ることはない様に見えた。女騎士ひ援護はいらなかった。

数が減り不利を悟った敵は逃げ出した。

「『風刃』」

敵味方がはつきりしたので『風刃』で逃げる敵を、横に真っ二つにして殺して戦闘は終わった。

これからが問題だ。残った周りの人間は、感謝はしているが、その強さに得体の知れなさを感じているようだ。時間がない早めに話をつけたい。まず、どうやって皇女に会うかが問題だ。

そんな時、女騎士が近づいてきた。

「君、一緒に来てくれないか？話を聞きたいんだ。」

この状況で話しかけてくるのだ、少なくとも話は進むだろう。

「わかった。ちょっと待ってくれ、ティリエルー！」

「はい」

空から龍が降りてきた。みんなが驚き身構える中、ティリエルは空中で人の姿に戻る。落ちてきたティリエルを受け止めた。

「お兄様、疲れました。」

周りは啞然としていた。

「君は龍なのか？」

「俺は違うよ」

女騎士は訳が分からなくなったようで

「とにかく来てくれ」

考えることをやめ連れて行くことにしたらしい。

馬車に案内された。馬車は、派手さはないが質がよく皇女が乗るのに恥ないものだった。中に案内されて、女騎士が

「この者が、先程助力してくれた者です。」

俺のことを中の人に紹介する。馬車にいたのは、ドレスを着た令嬢が一人とメイドが二人、護衛が一人と俺を連れてきた女騎士の五人の人間いた。

メイドが喋る。

「此度のご助力まことにありがとうございます。主が何かお礼をしたいと仰いまして。こうしてお呼びさせていただきました。」

お礼をするのに呼びつける必要はない、つまり

「ですが、その前に何故こんなところにいたのか、お聞かせ願えませんかでしょうか？」

こっちが本命だろう。ここは街道を外れてたまたま通りかかった、ということはあるしありえない。

目的があるはずだ、と思っているのだろう。時間がなささと終わらせよう。令嬢を見て

「あなた方を助けるためですよ。皇女様」

## 18話 愚王の蛮行（後書き）

最後まで読んで頂きありがとうございます。

ご指摘・ご感想等ありましたらよろしくお願いします。

## 19話 皇女

「あなた方を助けに来たのですよ。皇女様」

五人全員に動揺がはしる。それを見て確信した。

「よかった。あなた達が皇女様ご一行であることは間違いなさそうだな。」

「お前は何者だ？」

「俺は、冒険者のジン。グーロム王国のギルドマスターに頼まれて助けに来た。」

俺は皇女様といいながら。口調を変えなかった。ティリエルは、戸惑っていたが、俺は改めなかった。案の定、

「き、貴様こちらのお方を皇女様と知っているなら、その口調を改めろ！」

護衛の男が怒りだす。

これからのことを考えると俺は皇国とは対等でなければいけない。従うつもりはなかった。

「断る、俺はあんたの国の民ではない。公の場ならともかく、この場にその必要性を感じない」

「なんだと！」

「落ち着いてくださいレオン卿。ジン殿あなたギルドマスターの部下なのですか？」

訝しげに見てくるメイドさん。にしても皇女は喋らないなお飾りなのか？

「いや、違うあくまで対等な関係だ。依頼主ではあるが」

ギルドマスターは基本一国に一人しかいない。そして冒険者を束ねる存在でそれなりに力があるだが、俺はそのギルドマスターと自分を対等だと説明した。

「じゃあ、あなたは」

「ちょっと待って、時間がないんだ、まだ続くかな？」

その無礼な物言いに護衛が声もなく怒りを顔にするが

「では、最後に・・・あなたは味方ですか？」

「それはこれからする話を聞いてから、あんた達が判断してくれ。」

「貴様は、私の敵だ」

話の腰を折るなよ。

「ちょっと黙れ単細胞、話が進まん」

「単細胞？どついう意味だ？」



あゝ細胞がわからんか、そりゃそうだな。男は無視して

「時間がない、そろそろ俺の話を聞いてもらおう。まずあんた達には、皇国に戻ってもらいたい。」

「それは無理です。皇女は大使として来ています。その責任を放棄することは出来ません」

「果たせない責任を守る必要はないだろ」

メイドさんが声を荒げる

「果たせないとはどういう意味ですか!？」

皇女をバカにされたと思ったのかな？

「皇女に問題があるわけじゃない、グーロム王国があんた達を大使として扱わないといっている。」

「な、何故ですか？私達はグーロム王国に招待されて」

初めて皇女が声を出した。戸惑っているようだな

「招待はおそらく罠だろう。大方、奴隷制度の緩和か皇国出身の奴隷を解放するとかなんとか言って呼びつけたんだろ」

「(そこまでわかっているのか!)」

交渉の内容を知っていた皇女付きのメイドは驚愕していた。

事実なのだ交渉の内容は皇国出身の奴隷の解放についてだった。何

を要求されるかはわからないが無視できない内容だったのだ。実際グーロム王国は皇国出身の奴隷を集めていると聞いている。

「グーロム王国は戦争の準備をしている。そして、その前に皇女を捕らえるつもりだ。」

「えっ、そんな」

皇女の顔が青ざめる。他の者も動揺している。

「姫様、落ち着いてください。ジン殿それを証明できますか？」

「あなた達の状況そのものが証明だろう。この襲撃初めてじゃないんだろ、おそろくなんどか襲撃を受けたはずだ」

「なぜそんなことまで」

「生き残りと死体の数を数えたが皇女を守るにはちと少ない」

「それが何故襲撃を受けたことが証明になるのですか？」

「普通は勝てない相手を襲撃したりしない、なのにあなた達は何度も襲撃を受け護衛が少なくなってしまった。しかし、壊滅したわけではないから、戻ることもしかない」

「護衛が少なく？」

「戻ることができない？」

女騎士とメイドが呟く

「そこが大事なんだ護衛がある程度いけば勝てなくても皇女を逃がすことができる。今のあんた達は敵から皇女を逃がせるかな？それに壊滅させては皇女に逃げられる。」

「しかし！それは証明にはなりません」

メイドは、理解できても納得できないらしい。さっきの戦闘を考えれば皇国に戻ることはおかしくないはずなのだが

「私は彼の言葉を信じる。先程の戦闘、彼がいなければ我々は死んでいた。信じるには十分だろう。ミア、今は耐えてくれ。」

女騎士が援護してくれた。

「わかりました。皇国に戻りましょう。」

「なら急ぐうまだ追手は四百人ぐらいいるから」

「「「えっ」「」」

「だから急いでいると言っているだろ。いつそ、そいつらを証拠にするか」

「で、では早く戻らないと」

「駄目だ、相手は四百もいるんだぞ当然前の街道は封鎖されてる」

地図を取り出して一つの街道をしめす。そこは前の街道の反対側の街道だった。

「だからこつちの街道に出る」

「何故だ？その街道はもつとも皇都まで距離があるぞ。それに道はわかるのか？」

「道はわかる。理由は追手が分散してかなり数を減らせる。それに元々この道しかない」

道は、聖痕を使ったときにあらかた調べていた。

三つの内一つには敵がいる、もう一つには今の場所からは行けない。

「・・・わかった。皇女様」

女騎士が皇女に採決を促す。

「わかりました。あなたの言葉を信じましょう。直ちに皇国に戻ります。」

「了解しました。それでジン殿、君を雇いたいのだが」

「ああ、俺が裏切らないように。なにか繋がり欲しいのか」

「すまない、何かないかな？」

「謝ることじゃないさ。そうだな皇都についたら戦争について皇王と話したいその渡りをつけてもらいたい」

「わかった。掛け合ってみよう」

「それで君達、名前はなんて言うんだ？」

「そうだったな。私はレイシアだ。さっきはありがとう。」

女騎士が名乗りほかも名乗りはじめる

「私はミリアと申します。こちらは、我らの主のレティーシア様です。」

「よろしくお願いいたします」

こちらは、応答していたメイドと皇女

「ミーシャです。」

「レオンだ」

終始喋らなかったのがミーシャで護衛がレオンらしい。

「これからのことについて話したい、戦えるのはどれくらいいるんだ？」

「・・・八人」

「八人が、戦うのは無理だな。どうするか？馬は？」

「人数分はある」

「移動しながら話そう、すまないがティリエルを馬車に乗せてくれないかここに来るのに無理をさせた」

「かまいませんよ」

「よしでは行こう」

俺が馬車を降りると

「ジン殿馬を」

「いやいい乗れないからな、走る遅れるなよ」

「はい？」

外の騎士が今に乗るのを確認してから走る  
気力と精霊の力で驚く早さで駆ける

「は、早い。全員遅れるな」

レイシアは、慌て馬を走らせる。近くにきたレイシアに

「街道に出るまで走る」

「本当に何者なんですか？」

その後、道なき道を進み、時には道を強引に作り進んだ。  
街道に出た時に

「新しい道ができてしまった。」

皆呆然としていた。

「すまん疲れた。馬車に乗せてくれ」

周りの人間は安堵していた。

「よかった。ちゃんと疲れるんだな」

と別の騎士が呟いた。失礼な

馬車に入った俺は、最初のメンバーを集めて話をはじめ

「これでゆっくり話が出るな」

「正体について教えてくれないか」

「それは時間がかかるから追手を振り切ったらな」

「ここまで来るのか」

「来るだろな四百人の内二百ぐらいは騎兵だった。分散しても、その内五十人前後が来るだろう。」

「どうする、相手は騎兵なのだろ馬車のいる我々はすぐ追いつかれる」

「だからこの先の川まで行く。そして橋を壊す」

橋の手前で追手に見つかった。

「手筈どつりに」

八人の騎士が引き付けながら橋を渡る。

追手が橋を渡りはじめ、土の精霊術で脆くしたところまで来た時

「『炎蛇・六首』」

炎の蛇がその場所にいた騎兵ごと橋を破壊した。石造りの立派な橋が木っ端微塵だ。

何故こうなったかという橋の破壊方法を言った時にミーシャが

「橋と一緒に敵さんを破壊すれば。後のことを気にしなくて良くて一石二鳥ですね」

と、とても怖いことを言っただけだ。

ミーシャは見た目は小動物みたいで性格も引つ込み思案なのだが、たまに怖いことをいう、それも天然なので腹黒いのはちがいがよく分からない子だ。

俺達は、夜になり移動が困難になったところ開けたところで野営にすることにした。

準備が終わったころレイシアが

「そろそろ君の正体を教えてくれないかな？」



19話 皇女（後書き）

最後まで読んで頂きありがとうございます。

ご指摘・ご感想等ありましたらよろしくお願いします。

## 20話 龍の思いと小太刀の思い

「俺は異世界人だ。」

「……………」

まあそうなるよな。ちなみにこの場にいるのは、皇女のレティールシアとメイドのミアアそして女騎士のレイシアそして俺とティリエルの五人、これは俺が人数を減らすように頼んだ結果だ。この五人で馬車の中で話している。風の結界で防音して外には漏れないようにしている。

「まあ、信用できないだろうから、これを見てくれ。」

そっいつてギルドカードを、見せる。

名前 ジン 男 18歳 人間

ギルドランク B

能力ランク 総合B 気力A 魔力C

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 聖痕使い 精霊王の友人 救世主 五人の女の主

奴隷の解放者 精霊術師

「救世主？精霊王の友人？」

「そ、俺って救世主らしいんだよね。」

「聖痕使いというのは？まさか」

「これのことだな」

左腕の聖痕を見せる。

「これが聖痕か、それであるの精霊術か、納得だな」

「それで、俺が何をしにこの世界に来たかだけど」

魔物の大侵攻について話した。

「そんなことが本当に起こるのですか、とても信じられません」

と、メイドさん。

「誰が何を言おうと起こるものは起こる、それに嘘をつく必要もないだろう。」

「そうですね」

「というより、考えても答えなんかでないだろ。今は、知っていてくれているがいい。皇族が知っているだけでこれからのことも変わるからね。」

「ジン殿、聖痕を使えば簡単に勝てたのではないですか？」

レイシアが不満というより単純に不思議がっていた。

「あゝ実は、いま水の聖痕以外使えないんだわ」

「「「「「えつ」「」」」」」

「実はここに来る前に銀龍と戦ったときに三つ使ってあんたら見つけるのに一つ使っていてな。聖痕って連続しようにできないし、力が戻るまで少しかかるんだよね」

「ぎ、銀龍？銀龍と戦ったのか！」

「ああ、勝ったぜ。ちなみにティリエルの父親な。」

「.....」

「だから、皇王との謁見よろしく頼むよ。」

「【ご主人様、人の姿になってもよいでしょうか？】」

ビクッ

三人が驚いているな。

「いいぞ。」

テツが人の姿になる。

「こいつはテツ、俺の小太刀だ。」

テツは突然、

「皆さん主はお疲れです。主については、これ以降ティリエルさんに聞いてください」

「どうしたんだテツ今は、」

テツが無理に俺を外に連れ出そうとする。

「お願いです。主一緒に来てください。お願いします。」

テツの声が震えている。

「わかった。すまない後は、ティリエルに聞いてくれ、ティリエルも何でも答えていいから。」

俺はテツを連れて馬車を出る。

・テツとジン・

人気の無いところまで俺を連れていくと、突然テツは、抱きついてきた。

「どうしたテツ大丈夫か？」

「私は問題ありません。私が心配しているのは主のことです」

「俺の、こと？」

「人を斬った時、主の心が軋んでいるようでした。」

その時に持たれていたからこそ、聞けた心の悲鳴だ。

「・・・俺は、この世界で何人も殺している。今さらだな」

盗賊、奴隷商人とそれなりに殺している。

そのはずなのに、

なぜ俺は今泣いている。

「私は、ずっと主の側にいました。なので主のいた世界のこととも一番聞いています。」

それは他愛もないことを話した、ソフィア達との会話のことだろう。

「だから知っています。主の周りは、とても想像できないくらい平和な世界で、魔法はなく亜人もいない世界だったと」

テツは、俺のことを理解しようとしてくれていた。

「だから主にとって、人を『斬る』というのは、精霊術を使つてのものより『殺し』を特別意識することで。その事で、自分を責めているのだとわかりました。」

そうなのだ俺は今までの人間を、精霊術だけで殺してきた。怖かったのだ人を斬つた時の感覚を覚えるのが、殺した人間の血を浴びるのが。

そして今日俺は斬る感覚を覚え、血を浴びた、恐怖を隠すために途中からは稽古に見立てたりもした。稽古に見立ててたくさん『斬つた』のだ。

「主は優しいです。すべてを捨てて、この世界を救いに来てくれました。主は強いです。銀龍にすら勝ってしまいました。主は私達の誇りです。」

テツが喋ることを、やめない。

「ですけど、主は人なんです、時には私達に甘えてください。自分の中に溜めず、たまに吐き出してください。わたし達は受け止めますし支えます。そしてずっと側にいます。」

「ありがとう、テツ」

今日俺はテツの胸の中で泣いた。

馬車の中

ジンがでて行った後の馬車は沈黙が続いていた。テツ出現しその後すぐにジンを連れて行ったことで、その場をしばらくの間沈黙が支配していた。

レイシアが、沈黙を破って口を開く

「その、ティリエル殿」

「ティリエルで結構ですよ。」

「じゃあティリエル、ジン殿もあ言っていたしジン殿について聞いていいかい？」

「どうぞ、なんでも聞いてください」

「ありがとう、さっき龍がどうたら言っていたがジン殿はやはり強いのか？」

「ええ、強いんですよ。私の父に勝ってしまいましたし、個人で勝てる人間はいないと思います。聖痕を使えば一国とも戦えると思いますよ。」

「そこまでか、お兄様ってどういうこと？」

「旅に同行するさいに私からお願いしました。」

こうしてレイシアが、質問しテイリエルが答えレティーシアとミリアは聞き役に徹した。

質問にいくつか答えたところにレティーシアが

「お二人の様子を見に行かなくてよろしいのでしょうか？」

「絶対に行かないでください！」

幼いテイリエルの剣幕に三人が戸惑う

「お兄様は今きつと辛い思いをしています。」

「ここに来るまでに何かあったんですか？」

「いいえ、お兄様が辛いのは、人を殺したからだと思います。そのことはテツさんの方が分かると思います」



。だからお兄様を任せたのですから。」

「人を殺したから？それだけ？」

「お兄様は、お優しいのです。本当は殺しなんてしたくないんです」

「あれほど力を持っているのに」

「そんなことは関係ありません。お兄様は、この世界を救うために力をつけたと言っていました。人を殺すためではありません。」

また馬車の中が静かになる。レイシアは、ジンの力のみを気に取られていたことを恥じていたし、テイリエルも今自分がジンになにもできないことを再確認して沈んでいた。

「え〜と、テイリエルちゃんは、どうしてジン殿と一緒にいるのですか？」

皇女が場の空気を変えるために新しい質問をする。

「えっ、え、えと、大好きだから」

空気がやわらぐ

「あ、あと支えになりたいんです。お兄様はこの世界に一人で来たらしいので故郷もないですし、だから、その」

「俺の話か？」

「うひゃ！」

「どうしたティリエル？」

「ど、どこから聞いて」

「どうしてジン殿と一緒にってあたりからだな」

ボン

真っ赤になった。

落ち着くのを待っていると

「その、大丈夫ですかお兄様？」

「大丈夫だよ。にしても俺ってそんなに顔に出てるかな」

「大丈夫ですよ。少なくとも皇女様方は気づいていなかったのだから」

「それはよかった。」

「お兄様、あの、今日は三人で寝ましよう。」

「……ありがとうティリエル。じゃあまた明日、お休み皇女様」

そういつて馬車を後にする

その後の馬車

「ティリエル様の言葉を聞いてどう思われますか？レティーシア様」

「信用していいだろう。ティリエルの信頼は本物だった。」

「その上でどうするのですか？、皇女様」

「わたしはあいつが気に入った。何より強い」

（姫様がここまで異性を気に入るのは初めてね。どうなるのかしら）

「強いのは関係ないでしょうに、まあいいです。では、渡りはつけるといふことでいいんですね？」

「ああ、そうしてくれ。ふふっ、あいつの驚く顔が楽しみだな」

20話 龍の思いと小太刀の思い（後書き）

最後まで読んで頂きありがとうございます。

ご指摘・ご感想等ありましたらよろしくお願いします。

## 21話 皇都へ

異世界21日目

俺達は今、追手に追いつかれそうになっていた。その数80前後の完全武装の正真正銘の騎士団だ。

「あいつら軍馬まで出してきやがった」

レオンが毒づいている。

しかし、騎士団と軍馬を出してきたということは軍が、つまりは国が動いていることの証明だ。

この行動は、皇女達に俺の言葉に信憑性を持たせてくれた。

この場を切り抜くことができれば、交渉はしやすくなる。

「どうするんだ、貴様のせいだぞ」

たしかに、追いつかれたのは、一番距離のある道を選んだ結果ではある。他の道が2、3日で皇国に着くのに対してこの道は、5日もかかるのだ。

他の道が正解だとも思えないが、軍馬を出してきたのは、想定外だった。

グーロム王国はもう隠すつもりがないようだ。

それに敵は、甲冑を着けていて、聞くとおれには耐魔耐精霊の術がかけられている。負ける気はしないが、守りながらでは厳しい、だから

「あの狭い道まで行けば俺が何とかする」

「本当だろうか？」

レオンがさっきからうるさいな

「レオン卿今は逃げることだけ考えなさい」

レイシアが一喝する。

「了解しました。」

狭い道までたどり着いた。俺は、馬車から飛び降りた。

「お兄様！」

「ジン殿！」

「先に行け」

これ一度言ってみたかったんだよな。

「『岩壁』」

道を岩の壁でふさぎ馬車が見えなくなる。

「悪いな、ここから先は、通行止めだ。死にたいやつはかかってこい。」

俺は、高低差を埋めるため土で足場を作り80近い敵を迎え撃つ。

皇女達は、夜にはなんとか国境を超え、国境の近くで野営をしていた。皇女たちはジンを待つているというよりティリエルへの配慮のつもりだった。

「お兄様」

ティリエルは、ジンが来るであろう方向をずっと見ていた。

そこに、レオンとミリアが近づいて来た。

「お前、戻って来ると思ってたのか？」

ドコッ

「ゴフッ」

声にびつくりしてティリエルが振り返ると、ミリアの拳が脇腹を抉っていた。

「言葉を選びなさい。ジン様は、我々のためにあの場に残ったのですよ。」

「ふふっ大丈夫ですよ。お兄様は帰ってきます。」

二人はその年下の少女の揺るがない声に呆気に取られていると

「あっ」

街道に二つの人影が見えた。次の瞬間ティリエルが走り出す。

「お兄様！遅いです。」

ジンのところまで走り飛び付く

「痛い、痛いティリエルそこはやめて」

「お兄様どこか怪我したんですか！」

「ああラシードって奴がわりとできるやつでな、痛み分けになった。」

そこにミリアたちも追いついてくる。

「ラシード將軍ですか、よくご無事で彼は気力がSの実力者なんですよ。」

「へ〜じゃあ、あいつ『超越者』なのか？」

「いいえ、彼は魔力が低かったのでAランクなんです。超越者は、能力ランクがSランクからなのでちがいます。彼は『到達者』です。」

レイシアまで出てきた。

「ジン殿戻ってきたのか、信じていたぞ。」

「ああ、レイシア達は、怪我はなかったか？」



「我々は大丈夫だ。それよりジン殿怪我しているのか、大丈夫なのか？」

「かすり傷だよ。」

レイシアは、心配そうな顔をしていたがそれを聞いて安心し今度は真剣な表情で

「ジン殿此度の件、真に感謝する。グーロム軍が出てきていたのだ、あなたの言葉は真実なのだろう。わたしはあなたを信る。皇帝陛下への取次ぎは任せてくれ。まあ元々皇女の恩人だ、会うことは簡単だと思うが。」

「それはありがたいな。」

「ジン様は異世界から来たのでしたね。ジン様は、なんのために戦っているのですか？この世界に思い入れのないあなたがどうしてそこまでできるのですか？」

ミアアにとって、それはとても不思議なことだった。

しかし、ジンはとっては当たり前のことです。

「自分のためだな」

「自分ののですか？」

「そう、さあ明日は皇都までまだ距離はあるんだ今日は休もう。と

「いうより疲れた休みたい」

「そういつて締めくくった。」

## 異世界24日目

三日かかって、やっと皇都の城門についた。  
もう昼を回っている。

「やっと、皇都についたな。」

「ご主人様、ご無事で」

イリヤが凄い勢いで走ってくる。側まで来ると飛びついてきた。

「ご主人様、寂しかったです。」

「ずっと城門前で待っていたのか？」

呆れるような嬉しいような。

「はい。三人で順番に待っていました。」

「ジン殿我々は、先に城に向います。明日の昼ごろにお出ください。」

「気を使ってくれたのか、レイシアたちとはここで別れることになり先に城に向った。」

「わかった。イリヤ二人のところに案内して。これからのことを話そう」

「わかりました。行きましょう」

イリヤはそう言って俺と手を繋いで歩き出す。

クイント皇国は皇都は、グーロム王国の王都に比べてとても綺麗な所だった。少なくとも表通りには孤児は、見えない。しかし、孤児院も見えなかったからどこかにはいるのだろう。

市場にも活気があり個々の家も立派だ。あらゆる点でグーロム王国を凌駕している。

なぜ、グーロム王国は、皇国に戦争しようとしているのか、わからない。とても皇国に勝てるとは思えない。そこで、グーロム王国の目的が勝つこちらではないことを思い出し怒りを覚えた。

いかんな、こんな状態であいつらに会うのは、なんとか気を鎮めようと思つて、テツを抱きかかえる。

「と、突然、ど、どうしたのですか主？」

「ちょっとだけこうさせて」

「はい、ど、どうぞ、好きなだけ、むしろずっとでも」

「むっ〜」

ティリエル達がむくれているのは見ないことにして二人の待つ宿を目指す。

宿に着くと

「ジン様」「ジン」

テツを降ろして飛びついてきた二人を抱きとめる。

ソフィアなんかちょっと泣いている。

二人を解放して全員の顔を見る。

「これから忙しくなるぞ、なんせ国を一つ潰すんだからな」

「わたし、あの国嫌いです。」

「そうそう」

奴隷にされていたことがあるイリヤとリリスは、全面的に賛成という感じで、他の者も

「主が潰すと言うのなら潰すまでです。」

「人の国にあまり興味ありません。」

龍と小太刀の二人には、人の国という形に興味がないらしい。ただソフィアだけは

「ジン様、わたしの村は大丈夫でしょうか？」

ソフィアの村は、王都から近いいため巻き込まれないか心配なのだろう。

「大丈夫できるだけ綺麗に片付けるつもりだし、皇国が勝てば国民からは問題なく受け入れられるだろう」

ソフィアは、一応それで納得してくれたようだ。

「わかりました。」

「明日の昼に、登城だ。皆準備しておいてくれ。」

「はい」

「それでご主人様今日の夜は」

「イリヤさん、お兄様は疲れています。そういうことは後日にしてください。明日は登城なんですよ」

「むぐ、いいじゃないですか、お二人はずっと一緒に寝ていたんでしょ」

「うえ、まあそれは」

「やっぱり寝てたんだ」

「うっ」

「大丈夫だよティリエル。まあでも一緒に寝るだけな」

「やった」

イリヤが嬉しそうにしているところに

「じゃあわたし達もいいですよ、ジン様」

「そうだね、ジン」

「なんでそうなるんですか！」

「まあまあイリヤ、二人も一緒にいられなかったのは、同じだよ」

「ううわかりました。」

世界は救うつもりだが、やっぱりこういうのは大事だよな。

結局この夜は、三人を抱くことになったが。

## 21話 皇都へ(後書き)

最後まで読んで頂きありがとうございます。

ご指摘・ご感想等ありましたらよろしくお願いします。

## 22話 登城と皇帝

異世界25日目

「ずいぶんと大きいな。」

まあ当たり前なのだが、皇都の城はかなり大きく贅を凝らしている。グーロムの城は遠目にしか見ていないが、皇国の城との格の差は歴然だ。

正直日本出身の俺としては無駄な気がするが、この時代には権威を保つためには必要なのだろうな。城門に近づくとミリアさんが待っていてくれた。

「お待ちしておりました。ジン様」

「ミリアさん、どうなりましたか？」

顔見知りのメイドが迎えてくれた。

「すぐにお話になるそうです。ついて来てください。」

問題なく通してくれた。

入ってみると城内はとても慌ただしい、グーロム王国が動いたんだろっな

「こちらです」

ミリアさんが扉を開ける。俺達はミリアさんと共に、部屋に入ると



部屋には、男女が三人ずついる、その内一人に問題がある。

「レイシア？何故？」

レイシアがドレスを着て座っているのだ。

「はっはっはっ、実はわたしが皇女だったのだよ」

「えーーーーー」

これはティリエルだ。

「はあ」

俺はため息をついていた。

ため息を吐く俺を見て残念そうに

「なんだジン驚いてくれないのか」

「想定内だよ、想定内だが」

レイシアいやレティーシアの元に迎え両肩に手を置いて体重をかける

「驚いてはいない、だがな、どこの国に影武者がいるのに一対三をする皇女がいる。この国の皇女はアホなのかバカなのか、というかミリアさんはあれを認めているのか、影武者の存在意義は、なんのための護衛だ、俺が着く前に死んでたら全部台無しだったぞ、だいたい」

「わ、悪かった。すまん謝る」

レティーシアを知る者たちは、怒るといふより感嘆していた。  
（おお、あの姫に謝らせたぞ）

「まだ言い足りないが、まあ許そう。それで誰が皇帝かな」

「わたしだ。娘が迷惑をかけた。」

皇帝は、髭を伸ばした、威厳のありそうな男だった。

それにしても、皇族に対しての無礼を受け流すか、ずいぶん器の大きい男だな。誰も騒がないところを見るとこれは、身内だけの会議らしいな。

「まあ、まず自己紹介からしましょうか」

「そうだな、わたしはクルト・クイントこの国の皇帝だ。」

皇帝の左側の女性が

「アイリス・クイントよ。王妃よ」

右の男が

「アツシュ・クイントです。一応皇太子をやっています。」

優男みたいだが、目に力のある青年だ。

「アリシャ・クイント。第一皇女」

第一皇女と名乗ったが、明らかにレティーシアより小さい。その上、

表情があまりない子だな。

「一応名乗ろうレティーシア・クイントだ。第二皇女だな」

「ゲオルグだ。將軍をやっている」

老將軍といった感じの軍人だな。

「じゃあこつちだな。俺は、ジン異世界人だ。神のバカにこの世界のことを頼まれこの世界に来た。」

「ソフィアです。ジン様の付き人のようなものです。」

「イリヤです。ご主人様に仕えております。」

「リリースです。護衛をやっています。まあジンには必要ないんですが。」

「ティリエルです。銀龍です。」

「テツ。主の小太刀」

ある程度聞いていたのだろうとくに質問はなかった。

「自己紹介も終わったことだし、話に移ろう。」

「そつだな。そちらの目的は何だね?。」

「要求じゃあない提案だ」

「提案?」

「そつだ。魔物の大侵攻については聞いたんだろそれを一緒に防がないか、という提案」

「それについては、一応起こるものとして行動することになった。わたし達としても協力体制を敷きたいと思っていた。」

「それはありがたい、これからよろしく」

二人握手を交わす。

レティーシアのおかげか簡単に話がついたな。

「しかし、それには問題もある。軍を動かせば、他国が黙っていないだろう」

「他国は巻き込むしかないだろうな、巻き込まないと攻められる、そうなったら魔物の大侵攻を知っていても王の立场上動けないだろうし、元々魔物の大侵攻は、皇国独力では厳しい」

「目の前の問題もある」

「グーロム王国か、外の様子だと宣戦布告でもされたか」

皇帝は、目を見張った。その情報は、ここにいる者しか知らないはずだからだ。

もっとも感じている者はいるだろうが、それは少数で情勢に詳しい物だけだ。その少数に入っていることが異常なのだが。

「ほかには、他国を巻き込む方法か、それは後回しにしよう。まずこの戦争だな」

「他国を巻き込むことについては、この戦争に勝てればを何とかするだろう。勝ち方にもよるが、かなりの発言力を持てるはず。その

ためにジン殿力を貸してもらいたい。」

「わかった。それだと勝ち方が問題だな。」

「話が早くて助かる。では、戦争に関する話に入っても」

「お願いする。しかしあなたは一国の王なのでしょうもう少し上から目線でもいいと思うんだが」

「いいですよ。ここには、身内しかいませんし。戦力についてですが、グーロム王国は

奴隷兵	5万
戦闘奴隷	1万
兵士	2万
貴族の私兵	2万

の約10万こちらは

兵士	5万
貴族の私兵	3万

の約8万の兵がある」

「それなら正面からでも勝てるんじゃないか？5万は奴隷何だろう」

「三つ問題がある。一つ目は、クイント出身の奴隷がいること。二つ目は、戦えば損耗は避けられない。三つ目、これが一番問題なのだが、わが国の北側の国境付近にカルモンド王国の軍が近づいているその数5万これが問題なのだ。宣戦布告はされていないがあこの国

の王は、ゲロム王国と仲がいいのだ」

「どうするつもりなんだ？」

「損害を小さくしてに勝つ方法が今のところない」

しばらく考える。

「俺にいくつか案がある」

「おお、ありがたい。聞かせてくれないかね」

「まずはな……」

こうして二人の間でポンポン話が進んでしまい。周りは、口を挟む隙もなく呆然として二人を眺めて終わってしまった。

「二人は、何か打ち合わせをしていたのでしょうか？」

「いや、していないと思うが」

レティーシアとミリアさんがそんな会話をしていると

「これなら何とかかなりそうだ。アッシュ、ゲオルグ將軍この方針で以降と思うのだが？」

「問題ないと、思われます。」

「それで進めましょう。」

「レティーシア」

「ん・・は、はい」

レティーシアは、呆けていた。

「お前にジン殿の副官を命ずる補佐するよつに」

「はっ」

「アツシュ、ゲオルグあとは頼んだぞ」

「「はっ」「」

二人が、部屋を出て行く。

「ところでジン殿後ろの女性は、君の女かね」

「はいっ？」

「いや、君が複数の女性を愛する男ならレティーシアもどうだね」

「な、なにをいっているのですか、父上」

レティーシアが、照れている。脈アリなのか？しかし

「何が目的ですか？この国に留めておくためですか」


「そんなに深く考えなくていいよ。先程娘を叱って謝らせただろう。あれは、おてんばでなかなか嫁の貰い手がなくてな君ならばと思つてな。あれも君を気に入っているようだし」

「なっとなな」

レティーシアが超照れている。どちらかというところ綺麗という感じが、意外と可愛い所もあるな。

なんだかこの流れアルベルト（ティリアルの父）のときと似てるな。

「まあ、すぐでなくともいいさ、今は戦時だからね。」

その戦時に娘の縁談の話かよ、太いやつだな。

「それじゃあ失礼するよ、特訓しないといけないからな。」

後ろの水の精霊術師の方を向って

「がんばるぞ、ソフィア」



## 22話 登城と皇帝（後書き）

最後まで読んで頂きありがとうございます。

「指摘・感想等ありましたらよろしくお願いします。」

## 23話 戦場へ

異世界32日目

宣戦布告から一週間後俺達は戦場にいた。

「時間がありません。急いで陣地を組んでください」

陣地設営の指示を出しているのは、アツシュ皇子だ。

総指揮は、ゲオルグ将軍が執っている。

「アツシュ、俺は手筈どおり時間稼ぎと、仕込みをやってくる。」

アツシュとは、すぐに気安い中になれた。アツシュにとって身分を気にしなくていい相手は初めてで、付き合い易いらしい。

「お願いします。なんせこの戦いは、あなたにかかっているのですから」

そうなのだ。ここにきているのは兵は三万のみ残り五万は、カルモンド王国との国境の近くに行かせてカルモンド王国軍を牽制している。俺達は三分の一以下の戦力でそれも野戦を行わなければいけないのだ。国境を越えられると国民を奴隷にされるから国境付近まで出るしかないのだ。

「テツ行ける？」

「はい、大丈夫です主」

「わかった。アツシュ、行ってくる」

「行ってらっしゃい」

俺は、敵軍が来るであろう方向に向かって走り出す。

時間稼ぎ自体は簡単だった。

まずは地の精霊で落とし穴を作る道具を使わない天然の落とし穴だ。次に水の精霊で沼もどきを作る。

これを行軍進路にいくつか作ったただけだ。それだけで行軍速度は落ちた。

あるかもわからないものを気にしながらの行軍は、格段に落ちるし沼も人数が多くて迂回するのも一苦勞なのだ。

「ええい、なにをとろとろやっている。」

グーロム軍のコートル將軍は苛立っていた。これの戦争は、コートル將軍にとって勝ち戦なのだ。將軍としては、さっさと勝って報酬と奴隷を手に入れたいのだ。

実際この戦いを勝ち戦と見て予定より貴族共が多く集まっている。まあ集まっていたっても奴隷商からのなりあがりの貴族ばかりで、昔からの貴族は不参加だったが。

「兵が落とし穴を気にしているようですね」

これはラシード將軍だ、レティーシア皇女を捕まえられなかったため、コートル將軍の補佐をするはめになった。

「そんなもの、指輪の力でどうとのもしろ」

奴隷を兵隊にするときは、一度奴隷を王の下に集めそのあと命令権を与えた指輪を将軍に与える、という仕組みをとっている。そこからさらに奴隷を指揮するようために命令権の一部を指輪に移譲して士官に渡していく。実際問題、五万の奴隷を一人で指揮できるはずがないのだ。そのために、指輪を与えて指揮をさせるのだ。

「それは不可能です。穴を無視しろと命令すれば、穴に気づいても落ちていくことになります。それに後続も避けずに進むのでそのまま落ちてしまいます。」

「ちっ、所詮は奴隷か」

奴隷にしたのも奴隷を取り入れたのもグーロム王国ゆえだろうに、とラシードは思ったが、口には出さなかった。

「このままいくと着くのは、夕刻ですな。決戦は、明日にした方がよさそうですね。」

「そんなこと知るか、こちらは三倍以上なのだ。ついたら夜だろうと攻撃を開始する」

こいつは疲労のことは考えないのか、とラシードが呆れていると

ドンッ・・・ドンッ・・・

(来たか)

二度爆発音が聞こえ外が騒ぎになっている。これなら今日の決戦は

さすがにないな、とラシード將軍は落ち着いていたが

「なんだ、何の音だ」

コートル將軍にとっては、それどころではないらしい。

「『炎爆』」

これの技は、殺傷能力はかなり低いが爆音と衝撃が強いくこういう混乱させることが目的のときは、大いに役立つ。一応直撃はさせないように全体に満遍なく『炎爆』を落とした。程よく混乱したら地中から潜入する。案外地中が一番発見されないのだ。

潜入したのは、戦闘奴隷一万の軍団でそこで孤立しているやつを探す。

いた、少年だ。風の精霊を使って音を消して後ろから近づき少年を物陰に引きずりこむと同時に首輪の契約を破棄する。

「えっ」

少年は驚いて首の手を伸ばす。引きずり込まれたことよりも首輪が外れたことに驚いているようだ。

次第に落ち着いてきたのだろう。感謝を、言うためか大声を出されそうになったので口を押さえ黙らせる。

「静かに」

コクコク

「時間がないんだ。頼みたいことがある」

言いながら手を離す。

「何でも言ってください」

奴隷から解放されただけでここまで信頼されるのか

「戦闘奴隷のリーダー格ってわかるか？」

「何人かはわかります。」

「居場所に、見つからないように案内してほしい。」

「わかりました。お名前を聞いてもよいでしょうか？」

「ジンだ、君は？」

「僕は、レイトといいます。」

陣地内を移動して

「あの人です。」

「ここに呼べる？」

「はい、呼んできますか？」

「頼む」

レイトが男に近づいていつて何事か話ですぐにこちらに來た。

「レイトいいものってなんなんだ？」

それで釣れるのかよ、まあ見た目からしていかにもなマッチョではあるが。

レイトの時と同じようにして気づかれないように首輪をはずす

「えっ」

レイトと同じ反応だな。

俺は、これを何度も繰り返して敵陣地で味方を増やしていった。

数が増えたら作戦を説明し、さらに数が増えていくと誤魔化す係りや説明する係り、奴隷を連れてくる係り、捕まえる係りと効率を上げていった。

その後リーダー格の人達に後を任せて皇国軍に戻った。

「お帰り」

「お帰りなさいませ」

レティーシアとソフィアが迎えてくれる。

ソフィアとテツとレティーシア以外の女には、後方に下がってもらっている。イリヤを医療関係のところに行かせてリリスとティリエルは、その護衛についている。

「しかし、以外だな。君の女達あっさり後方に下がったんだな。冒険者風の女とか來たがると思ったんだけど」

「それはですね。それがジン様のためになるからですよ。ジン様は、私達が戦場にいるとどうしても気にしますから。」

「ありがとな、ソフィア」

ソフィアの頭を撫でていると

「主、わたしも」

テツが人に戻り、おねだりしてきたので  
片腕で抱き上げてテツの小さな体の感触を楽しむ。

「ジン殿ここは戦場たぞ」

レティーシアが怒ったので

「わるいわるい」

俺は謝罪して、テツを降ろす

「羨ましいんですか？」

「羨ましいんですね。」

「ち、ちがうもん」

自分の叫んだ言葉を思い返したのか、真っ赤になって無言で走って逃げていった。

「今の可愛かったな」



「やりますね。皇女様」

「主に気があるの本当みたいです」

「やっぱりそうですよね、皇帝も二人を認めるようなことを言っていますし」

「仲間になるかな？」

俺は、二人がレティーシアについて話しているのを聞きながら陣地を見渡す、3倍の敵と戦うのにみんな諦めていなかった。希望を持っていたのだ。この状況で希望を持たせることのできるこの国は、やはり良い国なんだろうな。だからこそ絶対に勝つ。

「やれることは、やった。後は戦うだけだ。さあ完勝するぞ」

「「はい」」

## 23話 戦場へ(後書き)

最後まで読んで頂きありがとうございます。

ご指摘・ご感想等ありましたらよろしくお願いします。

## 24話 皇国軍VS王国軍

異世界33日目

グーロム王国軍側

「なんだ聞いていたのよりさらに少ないではないか」

コートル將軍は、敵の数を見てほくそ笑む

「そつでございますね」

副官が相槌を打つ。ラシード將軍は、自分の部隊を率いている。

「こちらから仕掛けてやろう。全軍に伝令、あのような陣地正面から粉碎させる」

194

クイント皇国軍側

ワアアー

「来たな」

「ええ来ました。手筈どおり陣地内まで引き込みます。」

「ああ頼むぜ、なんとか持たせてくれよ。」

「わかっていますよ」

しかし、この陣地には、今一万しか残っていないのだ。残りは、伏兵として左右に、一万ずつ伏せている。

今は、旗を増やしたり陣地を使って数をごまかしている。

一万で十万を受け止めることには不安がある。

不安が顔に出ているだろう。

「大丈夫です。相手は奴隷兵こちらは、正規兵です。見事に釣って見せます」

「わかった。信じるよアツシュ」

「全軍迎撃準備、各部隊長は手筈どつりに」

一番隊から十番隊まで作り各部隊長に千の兵を持たせたのだ

「敵近づいてきます。」

「弓構え・・・放て」

無数の矢が敵軍に降り注ぐ。

この矢のさきは潰してあるが、万の軍が動く戦場では、死者も怪我人もでる。

だが、もちろん被害は普通の矢に比べ少ない。

その代わり勢いもあまり落ちないまま先頭の部隊がぶつかり合う。

何とか初撃を受け流すと

「一番隊と二番隊は、後退してください。七番隊と八番隊はその援護を」

この陣地は元々逃げやすく作っている。

第一と第二部隊は陣地をうまく使い難く後退をこなし、追撃してきた敵を七番隊と八番隊が攻撃する。一番隊と二番隊は、体制を整えたら部隊の援護に回る。これを繰り返しながら戦闘を行い敵を引き連れながら後退する。

これを難なくこなすのは、皇国軍の練度の高さの賜物だろう。

グーロム王国軍側

「いいぞ。押しているこのまま一気に全軍で攻め落とせ。」

コートル將軍には、それがわからず意気揚々と指示をだす。

「全軍で、でありますか？」

「そつだ、さつさとしろ」

隊長達は、渋々言われたとつり全軍が前進した。

皇国軍側

「思ったより早く。後続がでて来ましたね。」

アッシュが、嬉しそうな表情を浮かべる。

「よほど、こらえ性のない將軍なのでしょうな」

副官が相手の將軍を評価する。その評価は見事に当たっていた。

「ではそろそろ。全軍、全力で後退してください。ジン殿に伝令を」

ジンの側には、ソフィアとレティーシアあと小太刀のテツがいた。

「ジン殿、アッシュ様から「いつでもやってくれ」とのことです。」

「了解。ソフィア準備はいいかい？」

「はい。大丈夫です。」

「じゃあ、いくよ」

俺は、そういつてソフィアの手を握る

「水の聖痕発動『水龍』」

水の精霊が俺とソフィアを、包む。

「『水翼』」

さらに背中に、大きな水の翼ができる。

『水翼』は、大量の水を使うための準備だ。

「ソフィアは、危ないと思った人を助けることだけを考えて」

「はい！」

「いくよ。『陸津波』」

次の瞬間、翼から大量の水が噴出し、大量の水は制御され津波になる。陸に出来た2メートルの津波が五万の奴隷兵を押し流した。

ジンとソフィアは、この技そのものより、呑み込まれた人間を助けることに全力を尽くした。

ソフィアとの修行とは、この共同作業のことだったのだ。

溺れそうな人間を、波から出したり、流された武器を安全なところによけたり、何かにぶつかりそうな人をそらしたりした。

陸の津波がおさまった時五万の奴隷と後続の突出していた正規兵五千の兵が左右に押し流されていた。戦線復帰は不可能だろう。

「すごいな、これがジン殿の実力の一端か。」

アッシュは、しばらく呆けてしまった。その間に空に、青い光が撃ち上がった。

ジンが、光の精霊術で出した合図だ

この合図を、待っていた複数の人間がいた。

例えばクイント皇国軍には、

アッシュ皇子が、

「合図だ。騎馬隊を先頭に、突撃してください。魔術師はその援護を」

アッシュは、今まで温存していた九番隊と十番隊の騎兵二千を出して正面から反撃にでた。その後ろを、馬に乗った魔術師千人がついていく。

伏兵の指揮をしているゲオルグは、

「合図じゃな。一気に攻める。我らの目的は、貴族の私兵二万のみじゃ、それ以外は、手柄にならないと思え。突撃！」

次の瞬間一万もの伏兵が、地中から現れた。ジンが土の聖痕の『岩皇』を使って作った地下の空洞から出てきたのだ。ジンが、敵軍の足止めをしていたのは、彼らをここに伏せる時間を稼ぐためだったのだ。グーロム王国はこの空洞を知らないため伏兵に対して無警戒だった。

さらに敵軍を挟んで反対側には、ゲオルグの副官が、同じ内容を叫んで突撃を仕掛けた。

グーロム王国では、

戦闘奴隷の一角のレクト達が

「合図ですムガルさん」

ムガルとは、レクトの次に解放した戦闘奴隷だ。レクトをつけて後を任せただ一人だ。

「見えとるよ。」



彼の目の前では、部隊長だった者の死体がある。この時、いたるところで奴隷を操る指輪持ちの部隊長が不意討ちで戦死していた。

「虐げられるのは今日で終わりだ。俺達には、救世主のジン様がついてる。ジン様の頼みで今から貴族共を殺しに行く。いいか野郎ども」

「「「オオオー」「」」」

ここにいるのは、五十人程だが、解放した戦闘奴隷は、二千いる。

「救世主様のために」

「「「救世主様のために」「」」

二千の奴隷が牙を向いた瞬間だ。

正規兵の一角ではラシード将軍が

「私は、民達を守るためこの国を捨てるついてきてくれるか？」

「我らラシード将軍と共に」

彼らは、ラシード将軍に鍛えられ、ラシード将軍を尊敬している兵達だ。その数五千。

「ありがとう。これよりコートル将軍を討つ。ついてこい」

ラシード將軍と五千の兵が、駒から人に戻り。反旗を翻した。合図を聞いた五ヶ所が反撃に出たとき、ジンはティリエルの背に乗り空から戦場を見渡していた。ティリエルも合図を見て行動した一人だ。

戦場は、すでにほぼ決着がついていた。

奴隷兵五万は、すでに『陸津波』により左右に割られており、元々高くない士気が全くなっている状態で騎兵を止められる筈もなくほぼ素通りして貴族の私兵に肉薄する。

戦闘奴隷一万は、指揮官をすべて失い。何もせずに伏兵一万と元戦闘奴隷二千を、貴族の場所に通した。

正規兵二万は、五千を『陸津波』に呑み込まれ、さらに五千に裏切られ半分になっていた。残った一万もラシード將軍を見てどうすればいいのか分からなくなりラシード將軍と合流したゲオルグ將軍率いる一万に簡単に突破されてしまう。

こうして

貴族の私兵 二万

対

正面 三千

右 一万二千

左 一万五千

の三万の戦闘入った。

貴族の私兵は、何とか抵抗しようとするが、『陸津波』を見せられ動揺しているところに、突然の三方向からの攻撃に組織立った抵抗ができず簡単に崩されていく。

それに比べて攻める側の、皇国軍、ラシード將軍の兵、元戦闘奴隷と三種類の間人が混じっているにも関わらず。かなりの連携が取れている。

この時、指示していたのは、戦場の流れを空から見ていたジンだ。風の精霊を使って各リーダー格に命令を出し、合流させ連携を取らせていた。空から戦況を見ていたジンには簡単なことだった。

グーロム王国側は、

「なんだこれは、なぜこんなことになっている。」

命令を出すべきコートル將軍は呆然としていて、碌に命令も出せていない。

しばらくして自分を取り戻した時の第一声は

「もう無理だ。私は、逃げるぞ」

とだけ叫び一番最初に、逃げたした。元々將軍の器でわなかったのだ。それを見た他の貴族（奴隷商人でもある）達も我先にと逃げ出す。逃げる彼らの道は、後方しかない。

前方は三千の敵と五万の奴隷の壁その後ろには七千の敵、左右には一万を超える敵がいる。彼らが後方を選んだのは必然だった。しかし、その必然は作られた必然だった。

後方には、『嵐帝』を発動したジンが待っていたのだ。

コートル將軍がジンを見かけた時すでに辺りは血の海だった。すでに逃げようとした者がいたようでジンは、『嵐帝』の広範囲索敵を使い後ろ側に逃げてきた敵をすべてを殺していた。一人残らずだ。

「お前がコートル將軍だな。その首貰うぞ」

ヒュン

小さな風の音がした。

それだけでコートル將軍は、首を体から切り離され絶命した。

この時のジンは、口以外全く体を動かしていなかった。

コートル將軍の首が風に運ばれジンの近くに落ちた次の瞬間、

「『削嵐』」

逃げてきた貴族とその私兵は、声を出すこともできずに無数の風の刃にすり潰されて肉片になった。

間もなくして、正規兵の指揮を取っていたグーロム王国側の最後の將軍が降伏勧告を受け入れ戦いは、終わりを告げた。

こちらの被害は死者百人、怪我人が七百人ほどだ。

グーロム王国側は、貴族の私兵二万のほぼすべてが戦死、それと正規兵に少し死傷者が出た。

文句無しの完勝だった。

## 25話 解放宣言

この場の戦いは終わったがまだまだやることがある。

俺は簡単な後始末を終わらせると二人に

「アツシユ、ゲオルグ將軍作戦の第二段階に移りたいと思う。」

「わかった。ゲオルグ將軍後はお任せします。」

「わかりました。」

「さあ行くぞ、王都へ」

### 異世界34日目

休まず馬を走らせて（俺は自分の足で走ったが）何とか次の日には、王都にたどり着いたその数は、騎兵八千その騎兵が王都の四つの門を2千ずつ付き東西南北の門を封鎖している。この八千は、皇国軍五千頭とラシード將軍率いる千頭、残りの二千頭は王国軍から奪った馬だ。八千もの騎兵はそうそう見れるものではない。

「ラシード貴様、娘がどうなってもいいのか！」

今城壁の上で肥満体型の男が、首輪のついた小さな女の子を引き連れてラシード將軍を脅している。

驚きはない、以前ラシード將軍と戦い今回の謀を持ちかけた時に、何故現政権に逆らわないのか聞いたら、娘を人質に取られていることを聞いていたのだ。

「ジン殿頼む娘を助けてくれ」

「もちろんだ。」

今のラシードには、俺と戦った時の雄壮さはなく娘を出され精神に余裕がなくなっているようだ。

「大丈夫だラシード。お前を連れて来たのは、お前がいればあいつらがお前の娘を連れて来ると思ったからなんだ」

「どついう意味だ？」

「つまり外に連れて来てくれれば絶対に助けられるってこと・・・  
雷の聖痕を発動『雷神』」

次の瞬間には、雷速で近づいた俺は肥満体型の男からラシードの娘を奪い取っていた。

「な、に」

呆然とする男を無視して城壁の上から飛び降りる。雷速で逃げないのは、女の子が耐えられないからだ。

「ひゃ~~~~~」

女の子の悲鳴を上げている。良い悲鳴だ元気そうだな。気付いた兵が矢を射かけて来るが、すべて雷で焼く。

地面に降りるとすぐにラシード將軍の元に行く。

「おお、フローラ良かった本当に良かった」

「お父さん、うっ」

「どうした！フローラ！」

突然フローラが苦しみだした。首輪の逃亡防止のための機能だろう。すぐに、首輪を外してやる。

「あっ」

「なっ」

きょとんとしたフローラがこちらを見ている。頭に手を置いて

「もう大丈夫だよ。君は自由だ。」

フローラの目から涙が零れた。そうなるともう止まらず泣き出してしまふ。

ラシード將軍が、娘を抱き締める。

その場を離れ

「アッシュ降伏勧告は、すんだか」

俺の声はかなり冷たくなっていた。

「その返事が、あの子だったんだよね」

「そうか。じゃあ適当に殺して来るから」

「気を付けてください」

「誰にいつてんだよ。」

俺は、そのままにしていた『雷神』の力で城壁の上に戻る。そこからは、一方的な殺戮が始まった。

人間が雷速に、反応できるはずもない。めばしい者を雷で殺していく。

奴隷と女子供以外をあらかじめ片付けると城門を開けて外で待っていたアッシュ達を中に入れる。

その後王都からも人を集め城の庭園に来てもらう。

庭園には、皇国兵、王国兵、国民、奴隷達にラシード達が集まっていた。

そこに、俺は一人の男を放り出す。

「ひい、わ、わたしを誰だと、お、思っている」

男をこの国の王を無視して。

「皆聴いてくれ。この男は、この国の王だ。此度の戦争はすべてこ



の男がやったことだ。そして私は、この国と奴隷制度を否定する。この男は、その象徴だ、ゆえに俺が判決を下す。そして俺は奴隷のいない世界をつくることをここに宣言する。」

周りは状況をあまり理解できていないようだ、構わず

「『炎蛇・四首』・・・消えろ、元凶」

俺は男を四肢から炎蛇に食わせる。喰われた部分は、焼かれ血はないそのせいで失血死はせず長い苦しみを味わって死んだ。死刑のあと男の存在したはずの場所には王冠だけが残っていた。

近くに、アツシユがやってきて

「私は、アツシユ・クイント、クイント皇国の皇太子です。ここにクイント皇国皇帝クルト・クイント名の元にクイント皇国の勝利とグーロム王国内の奴隷の解放を宣言します。」

一時の静寂後に、ここに集まった全ての人間が歓声を上げた。

王都は、そのまま宴に入った。

しかし俺には、仕事が残っていた。奴隷を解放する仕事だ。首輪を外しても次から次へと奴隷が来るので休む暇がない。

この戦争で、聖痕を四つも使ったのでかなり疲れていた。それでも休む訳にはいけないのでふらふらになりながら解放していた。一度寝ぼけて頭からこけてしまった。奴隷の解放は、見かねたテツが止めるまで続いた。

「ありがとうな、テツ。実は結構限界だった。今日は、一緒に寝よう」

「はい。お供します」

俺は、城にあった一室でテツを抱っこして眠りについた。奴隷兵五万と戦闘奴隷八千のほうは、城からマスターキーが見つかりどうしても見つからなかった少数だけですんだ。あぶなかった六万近い人間を解放していたらぶっ倒れていた。

### 異世界35日目

マスターキーが見つからなか五百人の解放が終わった時すでにお昼を過ぎていた。全員が感謝を口にするのでかなり時間がかかった。中には忠誠を誓う者までいた。

今俺の側には一緒に寝たテツしかいないの仲間達を探すことにする。つとその前にアツシユに挨拶するか。

「よっアツシユ大変そうだな」

アツシユの部屋には、紙の壁が出来ていた。

「やあジン、失敗したよ。秘書官を連れてくるんだった。」

「レティーシアは、手伝わないのか？」

「役に立たない」

バツサリ切った

「ジン手伝ってくれないか？」

「いやだ、それに俺じゃあ大したこと出来んだろ。それより俺の女達を知らないか？」

「ああそっちの問題があった。実は一人判断に困る人がいてね、その人の扱いに困っていてレティーシア達に頼んだんだよ」

「判断に困る人？」

「この国の王って子供はいなかった筈なんだけど。その人、私はあの男の娘だ」って言うんだよ。変だろ」

確かに敗戦国の王女を名乗る意味がわからない。普通敗戦国の王族なんて殺されるか良くて妾にしたりと政治の道具にされるのがおちだ。

「確かに変だな。俺も女達に会うついでに会ってみるよ。」

居場所を聞いてその場に向かう。

## 26話 忘却の王女

教えてもらった部屋に行きノックすると中からソフィアが顔を出した。

「ジン様！ご無事で」

「ジン」「お兄様」「ご主人様」

聞き付けた三人が飛び出してきた。なんとか三人を受け止める。

「みんな元気そうだな。中の人に会わせてくれる」

中に通してもらい自称王女に直面する。

見た目は、森を思わせる深い緑色の長い髪。顔立ちはかなり整っているが、どこことなく表情が硬い。体は小さく10才を越えた辺りだろうか。

「はじめまして俺はジン、君は？」

「これはどうも私は、ミリーと申します」

傍目にはわからないが、どこことなく不安定な感じがする。

「みんな外で待ってて」

「ジン様、彼女に王女についての話をするなら気を付けてください」

「わかった」

みんなを外に出す。

ボタン

「それで何が聞きたいんですか？」

「君は何者だい？」

「一瞬ピクツとなったが」

「私はこの国の王女です。」

「どうして王女を名乗ったんだい？」

「王女が王女と名乗るのがおかしいですか、英雄さん」

「知っていたか」

「ここから見ていました。」

なるほどここは昨日の庭園がよく見える。

では、俺は仇になるのか

それにしても、彼女から憎しみは感じない

「どうして王女になりたいんだ？」

「ですから」

苛立たそうにしたミリーに

「いやこの際君が王女かどうかは問題じゃないんだ。」

「な、何で？」

あきらかなに動揺だ

「君のことを知っている人がいない以上、君は王女になれない」

「そんな」

彼女は、かなりの衝撃を受けているようだ。

「この国の高官の、ほとんどは死んでいるんだが、君を知っているのは？」

彼女の言ったのは重臣ばかりであろう事にゴミのような奴らだった。つまり俺が殺している確認はできない。

「王宮でその人数しか知らないということは、君は何処かの村で王宮とは直接関係なく生まれたんじゃないか？」

「そうです。私は妾ですらない女から生まれて。数年前に連れてこられました。」

ミリーの声が低くなった気がする。  
それでも続ける

「なら村には帰れないのか？」

「私の村は燃やされました。」

「・・・」

「私はこの国に全て奪われました。私の家族は殺され、村は焼き払われ、忘却の魔法で名前を忘れさせられ偽りの名前を与えられ。娘と呼ばれながらも、わたしの立場は伯爵の娘でした。そしてほとんどの間ここに監禁され教育だけを受けていました。」

ミリーは、全てをぶちまけるように語る

「もう私には、家族も生まれた村も名前すらありません私には、何も無いのです。確かなものが、信じられるものが、なら愚かであるうとこの国の王女でいなければ私は何なんですか？教えてください私は何なんですか？嘘で着飾った私は何者なんですか？」

空虚な顔に涙を浮かべた彼女を見ながら思った。

この子は俺に似ている。

一度世界との繋がりをすべて失い自分のことがわからず、とても不安定になっている。

違うのは、俺は自分で選び、ミリーは奪われた。

「たしかに君は何者でもないのだろうね」

「ッ、そう、ですよね」

絶望に打ちひしがれるミリーに俺は近づき脇に手を入れ抱き上げる。

「な、何ですか？」

できるだけ声に入れて話しかける

「何者でもないのなら、何者かになれば良い、まず名前を与えてやる。これから一生使う名前だ。」

「名前？」

「そうだ。そうだな………今から君はフェリスだ。」

「フェリス？」

「そうだ。フェリス何か好きなことや得意なことはないのか？」

「えっえっ」

この時女の子は、ジンの勢いに吞まれていた。

「何かあるだろう？」

「えと、料理が好きです。」

「上手い？」

「と、得意です。」

「なら俺のところで料理人をしないか？」

「え、なんで」



「俺の仲間で料理が得意なやつがいなくなてな。」

「そうじゃなくて・・・なんで、そこまでしてくれるんですか？」

「俺も似た経験がある。その時、俺はすぐにソフィアたちに出会えたから大丈夫だった。」

「えっ」

「だから、俺が居場所になってやるよ、名前もやる、だから新しい人生を歩んでみないか、君には未来も自由もある、これから君は何でもできるんだよ。確かに君は一度終わったのかもしれない。けど、もう一度俺の側で始めてみないか」

「あっ、わたし」

フェリスの目から涙が溢れる

「いいんですか？」

「おいで」

フェリスになった女の子は、ジンの胸に顔を埋めて

「わぁーーーーー」

大きな声で泣き出した。

「はじめよう、新しい君を」

フェリスは落ち着くと

「ありがとうございます。それで、その願いがあるんです」

恥ずかしそうに

「あのジンさんのこと、お兄ちゃんって呼んでもいいですか？」

「えっ」

「だめ？」

「いや、いいよ」

それだけで、顔を輝かせてくれた。  
テイリエル、なんて言うかな。

「フェリス仲間になってくれる？」

「はい」

新しい仲間が加わった。

そこで外の皆を呼び戻した。

あらためて自己紹介をした。みんな名前が変わったことに驚いていたがフェリスが名乗った時にとても嬉しそうに笑ったのを見て、なにも言わなかった。

ただ、ティリエルは

「お兄様は、私のお兄様です」

「お兄ちゃんになってくれるっていったもん。だからお兄ちゃんは、私のお兄ちゃんだよ」

フェリスが子供っぽくなっている。こちらが素なんだろうな

「む」

「う」

「こら、二人とも仲良くしなさい。」

二人を左右に抱き抱えキスをする。

「お兄様」

ティリエルは、うつとりしていたが

「~~~~~ッ」

フェリスは、言葉にならない悲鳴を上げ、顔を真っ赤にしている。

フェリスは、初々しいなと和む。

「そういえばアッシュに話通さないと。ついでに皇国に帰ること  
も話すか、皆それで良いか？」

「はい。いいですよ。」

ソフィアが返事をして他の皆も頷く。

「そういえばレティーシアは、どうするんだ？」

「私も戻る。事務仕事は苦手だ。」

うん、アツシユも期待していなかったみたいだしね。  
今日は、もう遅いから帰るのは明日だな。

「よし、皆で夕食にしよう」

「はい」

アツシユに、フェリスは俺が預かることになったことと明日皇都に  
戻ることを伝えた。戻ることを伝えた時泣きそうになっていたが男  
の涙なんかに興味はないので無視だ。

## 27話 我が家

異世界36日目

皆で朝食を取っている時に

「そつえばフェリスの位置付けてどうなったのだ？」

レティーシアが聞いてきたので

「料理人兼メイドだな。」

「まあ、メイドはなんとなくわかっていただけだね。あの格好だしね」

俺の隣のフェリスは、メイド服を着ていた。少々幼いが服装は正統派のメイド服だ。ちなみにイリヤも対抗してメイド服を着用している。二人とも可愛い、フェリスは小さなメイドでイリヤはエルフメイドに仕上がっている。

「料理得意なんだ」

「はい」

「この料理もフェリスが作ったんだぞ」

「え、そうなの。いつもの料理と比べても遜色ないよこれ」

「はい、とってもおいしいです。」

「すごいよね。まだ小さいのに」

「小さいは、余計です。」

そう言いながらフェリスも満更ではないらしい、頬が緩んでいる。

食事も終わった頃に、アツシュが訪ねてきた。

「やあジン、お客さんが来てるよ」

「お久しぶりです。ジンさん」

そこには、ギルド職員のクリアさんがいた。

アツシュにクリアさんを皇国に送るように頼まれ何がなんだかかわらないまま城を出ることになった。

道中何をしに行くのか訊くと

「ギルドマスターは基本一国に一人なんです。普通は戦争などで国が潰れたり増えたりした時に揉めるんですけど、今回はうちのマスターがあっさり降りたんです。そしてギルドマスターがいるところが冒険者ギルドの本部になるので、それで皇国のギルドの方という調整するためにわたしが赴くことになったんです。」

「大変だな。わざわざ皇国を行き来するなんて」

「いえ、そうでもないですよ。もともと皇国には興味がありましたし、それに向こうに住む予定なんです。」

「え、住むの？」

「はい、まだ住む家は決まっていりませんがね。」

「またなんで？」

「毎回報告に戻るのも面倒ですし、それに興味があるんです。英雄様に」

「なぬ」

「む」

「あらあら」

「一名様追加」

「なはは」

女達の反応はそれぞれだな。最近の英雄といえば俺しかないからな。

「あゝまあよろしく。」

「ええ、よろしく願います。」

## 異世界38日目

皇国の城についた時、俺達は国賓待遇でもてなされた。召し使い達が左右に立って道ができている。

「ジン様、ご無事で」

たくさんのお迎えの中からミリアさんが出てきて迎えてくれる。

「皇帝がお待ちです。こちらにどうぞ。」

クルト皇帝の執務室に案内された。

「ようクルト久しぶりだな。」

「ジンくん、ありがとう。君のおかげで問題がいくつも解決したよ。単純な意味での脅威であったグーロム王国を潰してくれたのをはじめ、グーロム王国内の奴隷推奨派の貴族達の殲滅、ラシード將軍の引き入れに奴隷の解放これらすべて君がいなければなしえなかった。」

「といっても、まだ問題は残っているだろ。一応戦場の貴族と王城の貴族はすべて始末したが残党はいるだろ。ラシードだけにグーロムの軍を任せるわけにはいかないしな。元王国領が落ち着くのはいつ頃になりそうなんだ？」

「半年以内には一先ず終わらせたい、他国に集まってもらうのに時間がかかるからな。それまでには終わらせないと魔物の大侵攻に対して動けないかもしれないからね。」

半年か、実際に元王国領を立て直すのまだ先になるのだろうか。一先ずというのは、本当に緊急の要件だけを片付けるのだろうか。

「まあそれまで俺はゆっくりさせてもらおうよ。ここ一ヶ月忙しかつたしな。」

「おおそうかゆっくりするのか、そこでだ、どうだねジンくんゆっ



くりするために自分の屋敷など欲しくはないかね？」

「なんだよ、突然」

「いや、君への報酬を考えていたんだよ。先程言ったとおり君の戦果は計り知れんそれで報酬に関して悩んだ結果、その候補のひとつが屋敷になったんだよ。どうだね？」

「そうだな、ありがたく貰っておこうかな。」

「あれ？意外だな。君はどこかの国に肩入れするのは嫌がると思っていたのだが」

「まあな、でもいつまでもどこかの宿屋に泊まるのも問題だし、それに屋敷は報酬なんだろ。それに帰る所があるっていうのは良いことだからな」

帰る家があるのは、割と重要だと俺は考えている。

「そうかい。それはそれとしてレティーシアについては、考えてくれたかい？」

「俺としては、歓迎なんだが国としてどうなんだ？」

「たしかにすぐに結婚というわけにはいかないな。だから今は一緒にの屋敷に住ませてやってくれないか？」

「ち、父上！」

縁談は以前にきいていたが今度は同居の話まで出てきたのだ黙って

いられない。まあレティーシアは、怒っているというより恥ずかしかつているようだ。

「俺は構わないが、屋敷は大きいのか？」

「まあまあ大きいよ。それでレティーシアは、どうするんだい？」

「わ、わたしは」

「ジンくんの側には魅力的な女の子がいっぱいいるようだ、このままでは出遅れてしまつぞ」

「うっ、……ジン殿その〳〵厄介になつてもいいのだろうか？」

「もちろん」

「よし決まりだ。それじゃあ、屋敷の場所は、ミリアが知っているミリアに案内してもらつてくれ」

「わかつた」

そして俺達は、ミリアさん先導のもと俺達の家になるところに向つた。

「……でかい」  
「……大きい」

「確かにでかいな。」

「どこを見ているんですか！」

ソフィアに怒られてしまった。

「ミリアさんの胸」

「確かに大きいですけど、今はそっちじゃありませんお屋敷のことです」

大きいを連呼されてミリアさんが赤面している。

「皇帝が言ってたじゃん大きいって」

「ですがこれは」

目の前には、豪邸と呼ぶにふさわしい建物だった。軽く迷子になれそうな大きさだ。皇族のレティーシアはともかく、ほかの女達は、萎縮してしまっている。

「それだけの仕事をしたってことだよ。」

「でもそれはほとんどジン様の手柄で」

「なに言ってるんだよ。俺はお前達がいるから頑張れるんだ。お前達のおかげで俺は孤独にならずにすんでいるんだからな。俺が住む以上俺の女が住むのになんの問題もないさ。」

「うーん、わかりました。」

まだ、不服そうだがその内なれるだろう

「それでもこの規模だと掃除が大変だな」

「それなら大丈夫ですよ。私がジン様のお世話をさせていただくことになったので、掃除等はお任せください。」

これには、焦った。

「いやいや、それはさすがに悪いだろ。せつかく皇族付きなんだし、それにいくらミリアさんでもこの規模を一人で管理するのは」

屋敷を見ても慌てなかった俺が、ミリアさんという個人が関わった瞬間焦りだしたのを見て。

「「「あはは「「「

ミリアさんを含めみんなに笑われてしまった。

「主らしいです。」

テツよ、どついう評価なんだそれは。

「ふふっこれは、私から志願したんですよ。レイトという名前を覚えていますか？」

「ああ覚えてる、戦闘奴隷二千を解放したとき一番最初に解放したやつだ」

「レイトは私の弟です。」

そうだったのか、そういえば俺が皇女を助けた時、ミリアはどうしてもグーロム王国との交渉に行きたそうだった。弟が奴隷だったからなのか

「ジン様、弟を助けていただきありがとうございます。このご恩を返すために私は志願したのです。」

言いきつた後顔を赤らめて

「あと、その、気になるのでしたら、わ、私の胸を好きにしてください。でもいいですよ。」

女達は、少し呆れ顔だ。俺としてはうれしい、ミリアさんの胸は、この場では一番大きいのだ。

「それでは夜にでも」

ポカ  
ビシッ

フェリスにパンチされレティーシアにチョップをくらった。

その後その二人を何故か周りの女達が諭していた。

内容を聞いてみると内、ジンと一緒にいるなら早くなれなさい、ということらしい。

「でも一人だと大変だろ」

「私も手伝いますよ」

「私も」

ジンのメイドをやっているフェリスとイリアが名乗りを上げる。

「それでも三人だしなあ」

「それも大丈夫です。ジン様が解放された奴隷の方達から志願した人を国で雇って屋敷にいれるので大丈夫ですよ」

至れり尽くせりだな。

「出来れば屋敷内は女の子だけがいいなあ。俺の女をジロジロ見られるのは嫌だし。それはそうと、いろいろありがとう。それじゃあ改めてよろしくミリアさん」

「私はもうあなたの物です。ミリアと及びください」

「わかった。ミリア」

そうして俺は、新しい我が家に入った。

その夜に、ジンの寝室にミリアが訪ねてきた。

「本当に来てくれたんだ」

「来ちゃいました」

「本当にいいのか？恩といっても弟を助けたことだろう」

ミリアははにかみながら

「ふふっ、お忘れですか、レティーシア様を助けに来て頂いた時わたしも助けてもらってるんですよ」

「まあ、そうかもしれないが」

「それとも魅力ないですか？」

そういいながらもミリアは服を脱いでいくそして下着姿になり。胸を強調している。

明らかに体に自信があるし余裕もある。ならば

「いいや、かなり魅力的だよ。」

そう言ってミリアを後ろを向かせて胸を両手で包む。そして気と電氣を使って一瞬でミリアを絶頂に導く。

この世界に来てから少しずつ性技を練習していたのだ。ミリアの余裕は一気に消え去った。

「寝かさないからな」

「あ、ちょ、まっ、~~~~~ッ」

28話 女達との休日 1日目

異世界38日目

食事中にイリヤが

「これからどうするのですか？ご主人様」

「そうだな、今は聖痕が使えないから、使えるようになるまで、家で束の間の休みを楽しむことにする」

「それでしたら皆さんと順番に楽しむというのはどうですか？」

それいいな、個人と一緒にいられる時間少なかったからな。

「それ採用」

「わたしも賛成です」

声が膝の上から聞こえる。フェリスが俺の膝の上で食事を一緒にとっているのだ。

料理人の特権だそうだ。毎日すると皆が怒りそうなのでほどほどにしよう。

皆と遊ぶということはお金を使うな今の残金は

それほど大きな買い物はなかったがお金は消費するものなので、これまで細かいところで使ったのが1000ギル、フェリスの服類



に1000ギルの2000ギルを使ったので

45000ギル - 2000ギル = 43000ギル

皇国軍と一緒に行動していたのであまり出費はなかったようだな。

でもこれ俺だけの金じゃあないんだよなあ。まあ、なんとかなるか。

- レティーシアの場合 -

お昼すぎにレティーシアが俺の部屋に現れた。

「ジン殿、くじ引きの結果最初はわたしになったのだが、……  
何をしよう?」

「確かになほとんど考える時間なかったからな」

「うーん、……あつ、そうだジン殿手合わせをしないか、一度や  
つてみたかったんだ。」

「休みじゃあなくなっているが、まあいいか。中庭でやるつか」

「やった」

レティーシアが嬉しそうにしてくれているならいいか。

中庭に出て俺は木刀を、レティーシアは木剣を構える。

「はじめ」

途中で捕まえたメイドさんに合図をいってもらう。捕まえる時に手を掴んだら赤面された。メイドのほとんどは俺が奴隷から解放した人たちで、恩を感じている人が多い、中には好意を持っている人もいるらしい。

打ち合いを始める。

打ち合ってわかったがレティーシアの剣はリリスのような戦いの場で鍛えられた剣ではなく誰かにならったのだから技があり型があるようだ。何かの剣術なのだろう動きが洗練されている。ただ少し単調で型に嵌っている分俺にはやりやすい。フエイントで釣った所に懐に入り足を引っ掛け肩で押し倒す。あっさり転倒してそこに木刀を突きつける。

「負けたか」

ちよつと不満そうなレティーシアを立ちあがらせる

「しかし、依然見たときはもっと早かったと思うのだが」

それで不満そうなのか、手加減したと思われたか

「手加減したわけじゃないぞ、普段は精霊にいろいろ助けてもらってるんだ。さっきの俺本来の力だよ」

「そうなのか、それでも私は負けたのか」

今度は、落ち込んでしまった。

「まあ俺の師は、刀神つまり神様だからな」

「か、神が師なのか羨ましいな」

「そうでもないぞ、あいつの修行って滅茶苦茶だったし。なんと死を覚悟したことが、おまけに期間が短いからって一時期は、朝昼晩飯時、寝てる時も風呂の時も不意打ちしかけてきやがって。風呂の時なんか壁壊して女子風呂と繋がってしまったって闇の精霊王と鉢合っし。」

ちよっとトラウマになっているらしい。少しトリップしている。

「ジ、ジン殿帰って来い。そ、それより私に対してなにか指摘はないか？」

「あ、ああそうだな攻撃が単調に感じたかな、俺も未熟だからよくわからないけど、少なくともレティーシアの攻撃を受けていて驚きはなかったな。まあその分まだまだ強くなれると思うが。」

「そうなのか、ジン稽古に付き合ってくれないか？」

「いいよ。存分にやろう」

二人で夕方まで汗を流したが、全くといっていいぐらい色気のないすごし方だなレティーシアらしいが。

・ソフィアの場合・

レティーシアとの稽古が終わりレティーシアに先にお風呂入ってもらっているよ、

「ジン様、次は私の番ですよ。」

「こんな時間からでいいのか？」

もう日が沈んでいる。あまり時間もないと思うのだが。

「大丈夫です。さつき中庭の稽古見ていたんですけど汗を掻かれていたので、その、一緒にお風呂に入りませんか？」

なんだこの展開、レティーシアとは正反対にとっても色気のある展開になってる。まあ断る理由もない

「じゃあ俺からもお願いするよ」

レティーシアがあがった頃に浴室に向かい、先に入って待っていると

「ジン様、お邪魔します。」

タオル以外なにも身につけていないソフィアが入ってきた。髪を頭の上で団子にしているのが新鮮で可愛らしい。

「お背中お流しします。」

「ああ、頼むよ。」

ソフィアに背中を流してもらった後で

「次は俺が背中を流そう」

「えっいいですよ。そんな」

「いいからいいから」

「ジン様手つきがいやらしいです」

「気にするな」

「あっ」

しっかりソフィアの背中を流してさらにちょっとだけいたずらした。

体を洗ったら二人でお湯入る、もちろんタオルは外して入るので全裸だ。

やっと恥ずかしさが薄れてきたのかソフィアが

「ジン様見てください」

精霊術で作った見事な水の鳥を見せてくれた。

やっぱりソフィアの制御は、すばらしいな。この能力があったからこそ奴隷兵5万を押し流す決心が出来たのだ。

ソフィアは俺をすごいと言うがソフィアも少しは自身を持ってもいいと思うのだが。

「すごいなソフィアは、俺も何か作ってみようかな」

そこからは、二人で精霊術を使ったり精霊術の話をしたりして時間をすごした。

そろそろあがるうかと思ったときソフィアが型に頭を寄せてきた。

「私村にいた頃は、こんなことになるなんて思いもしませんでした。ずっとあの村で巫女をやりながら精霊術で農作業を手伝って暮らすものと思っていました。ジン様のおかげで世界を見られました。ありがとうございます……ま……す」

バシャ

言葉が尻すぼみになっていって最後には顔から湯船に顔を落としてしまった。

すぐに抱き起こすと真っ赤になっている。完全にのぼせている。

体を拭いて服を着せ自分の部屋で介抱していると

「うーん」

「起きたか？」

「あ、ジン様申し訳ありません」

状況も理解できているようだ。

「駄目じゃないか無理しちゃ」

「だって」

ソフィアが口の辺りまで毛布を上げて

「ジン様と二人っきりで話すの楽しかったんですもん」

可愛いなオイ

「ま、まあそれじゃあ仕方ないな、うん」

「ジン殿いますか？」

レティーシアだ

「どつぞ」

「失礼します。よかったソフィア殿は気づかれたのですね」

「ああ、ついさっきな」

「それですれねジン殿、その、夜は私とソフィア殿が閨を共にすることになっているのですが、よろしいでしょうか」

そんなことになっていたのか。明日もそうなるのだろうか。

「もちろん、歓迎するよ。もともとソフィアは、動かせなかったしね」

その夜は、俺を中心に川の字で寝ることになった。ソフィアとレティーシアは、二人とも疲れていたのだろう二人は、手を繋いできた程度で静かな夜をすごした。





## 29話 女達との休日 2日目

異世界39日目

・ティリエルの場合・

「あの、お兄様はお空のお散歩に行きませんか？」

朝にティリエルが訪ねてきた。

「うーん、今聖痕は使えないからな〜難しいな」

「いえ、私の背に乗ってくださればいいです。」

「いいのかい？前乗ったときはかなり疲れていただろう」

「わたしも成長していますし、そんなに早く飛ばなければ大丈夫です。」

「ティリエルがいいならいいけど」

「じゃあ行きましょう」

俺とティリエルは、朝のお散歩に空を飛んだ。

以前に乗せてもらった時は、とても速くて余裕がなかったからあまり楽しいとは思わなかったが、実際龍の背に乗って空を飛ぶのはけっこう楽しい。前の世界では夢想でしか出来なかったことがこの世界では出来る、こういう時異世界に来てよかったと思う。

ティリエルに乗って皇都を一週してから屋敷に戻る。

「あ、ティリエルそのままですか？」

「どうしたんですか、お兄様？」

「龍の姿のティリエルの世話をしてみたいですか？」

龍の姿のティリエルは、とても綺麗だ銀の鱗に覆われていてすべて本物の銀のような輝きを放っている。そしてその光が不快にならないのだ。そんなティリエルを世話したくなったのだ。

メイドさんに頼んで、タオルを持ってきてもらおう。持ってきてもらったタオルでティリエルの体を拭く。

「気分はどうだ？」

「気持ちいいです。もっと強くして下さいませんか？」

「そうか？」

ティリエルにどうして欲しいかを聞きながらお世話をさせてもらった。

ティリエルの世話が一通り終わりティリエルも人の姿に戻る。

今は膝の上で遅めの朝食を取っている。昨日フェリスが膝の上で食事しているのが羨ましかったようだ。

食事をしていると突然ティリアルが

「お兄様、どうして私は夜伽に呼んでくださらないんですか？」

「ゴホ、ゴホ」

むせてしまった

「どうした突然？」

「私だってもう十五ですよ、前の世界はよくわかりませんが、この世界では結婚だって出来ます。」

ティリエルの見た目は、少々幼いフェリスほどではないが、アルベルトと話してからと考えていた。答えに困っていると悲しそうな声  
音で

「やっぱり見た目ですか？」

「そうじゃあないけど」

「じゃあ私のことがお嫌いなのですか？」

「それはありえない。愛してる」

「なら」

「・・・わかったよ。そうだな16歳になったら、俺の方から呼ぶよ、俺の国では女性は16歳から結婚できるんだ。頼む俺はティリエルを大事にしたいんだ。」

「・・・わかりました。今はその言葉で我慢します。ただ一つお願いがあります。」

「なんだい？」

「キスをしてください」

「わかった」

そう言つて俺はティリエルにキスをする。

するとなんとティリエルが舌を入れてさらに舌を絡ませてきた。俺もそれにこたえる。

少し長めのキスが終わったとき

「ごちそうさまでした。」

うつとりした表情のティリエルがいた。

その言葉は、朝食の終わりともう一つの意味をもっていた。

・テツの場合・

ティリエルとの食事が終わり部屋でくつろいでいると

「主、私の番」

「どうして足音を殺してきたんだ。」

テツが音もなく現れた。

「主を驚かせようとした。けど、驚かなかつた足音聞こえた？」

「いいや聞こえなかつた。ただ精霊が教えてくれるんだよ、不自然

な行動を取ればわかるんだ。」

「主に奇襲は効かないの？」

「少なくとも俺個人には、奇襲は無意味だな。」

「さすが、さすが私の主です。」

「はは、ありがと。テツは、何をするか決まったのか？」

「決まらなかった。主何かない？」

「そうだな、・・・街に出ようか」

「街に？」

テツの頭を撫でながら

「何か楽しいことがあるかもしれないだろ」

「はい、行きましょう」

今は、テツと手を繋いであてもなく街を歩いている。テツは、歩いているだけなのに楽しそうにしてくれている。

だからといって何もしないわけにはいかないよなあ、装飾品店が見えてきた。テツは、女の子だし鉱石を吸収する、興味があるかもしれない。

「テツ、あそこに入ろう」

テツを連れて店に入る。

「わあ、主宝石がいっぱいです。」

よかったテツは、興味をしめしてくれた。テツと店内を見て回る。

「主ありがとうございます。」

テツが小走りで展示品を見て回る。テツのこんなにはしゃいだところは、はじめて見たな。

「この穴は、何でしょう?」

テツが見ている者は銀細工の首飾りで翼を模して作られているようだ。二つの翼が重なるように作られていて、翼に一つずつ穴がある。店主に聞くと

「その穴に宝石を埋め込むんです。プレゼントでよく使われていて受け取る側と渡す側で宝石を選ぶんです。」

その説明を聞きながらテツは、ずっとその首飾りを見ていた。気に入ったようだ。

「お値段は?」

「付ける宝石によりますが付ける石自体は小さいので、2000ギルから2500ギル程度になります。」

「テツは、何を付ける?」

「いいのですか？」

「いいよ、初めてのデートのプレゼントだよ」

「主ありがとうございます。」

テツはダイヤモンドを俺はブルートパーズを選んだ。俺は、確か前の世界で、トパーズの石言葉でいい感じだった気がしたから選んだ。テツにダイヤモンドについて聞くとダイヤモンドは、硬度がとても高いのでテツのような存在には特別であるらしい。

「どうですか主？」

「似合っているぞ」

「えへへ〜」

今日はテツがよく笑ってくれるのが嬉しい、テツはあまり表情をださないから笑っているということは本当に楽しんでくれているのだろう。

いつもは、落ち着いていていいるからか見た目より大人っぽく見えるが、笑うと雰囲気が見た目相応に幼く見える。笑顔のテツと腕を組んで俺は帰路についた。

テツの首には銀の首飾りが揺れていた。

これ以降テツが小太刀の姿になった時、柄の下の部分に銀の装飾と二つの宝石が輝いていた。

43000ギル - 2400ギル = 40600ギル

・フェリスの場合・

「テツさんが笑顔で部屋の方に歩いていったんですが、お兄ちゃんがいなくて笑うなんて結構珍しいですね。お兄ちゃん、テツさんと何してきたんですか？」

「テツとは、街でデートをしていたんだ。それより、フェリスは何をするか決まった？」

「デート羨ましいですね。私がしたい事はですね、わたしといえばやっぱり料理なのでお兄ちゃんの故郷の料理を再現したいです。」

「・・・ありがとう、フェリス」

思わずフェリスを抱きしめてしまう。フェリスは、顔を真っ赤にし  
ながら恥ずかしそうに

「それで、その、食材のお買い物と一緒に行きませんか？」

「いいよ、それじゃあお買い物という名のデートにいきますか？」

「い、いえデートとかそんなのじゃあ・・・デートなのかな？・・・  
デートかあ」

最初は狼狽していたが、最後の方は嬉しそうに頬を緩めていた。



出る前に料理を決めるのが意外と悩んだ。出来そうな物でこの世界で似ている物がなく、かつ俺が食べたい物となると意外と少ない、この世界の食べ物は、異世界人の俺が不自由しない程度には、前の世界と似通っていた。

結局作るものは、ハンバーグになった。この世界では、基本的に肉は焼くだけだったのだ。

「お兄ちゃんの話の聞くと混ぜるお肉と野菜が問題ですね、香辛料はなんとかかなりそう。」

「いくつか買って帰って試そうか？」

「そうしましょう。余ったお肉は、別のときに使えばいいですし」

「それじゃあ行くこうか」

まずは、肉屋だ。聞くとこの世界のお肉は、魔物の肉が多いらしい。一応牛や羊は、いるらしく放牧もしてはいるがそれは毛や乳を得るためだ。魔物の危険があつて大量に家畜を飼うのが難しいらしく、家畜を潰して食べることはまれらしい。ちなみに豚はいない魔物にずいぶん昔に絶滅させられたらしい。

「それじゃあ牛型の魔物のお肉を二種類と猪のお肉に猪型の魔物のお肉をお願いします。」

四種類のお肉で挑戦することになった。おじちゃんが話しかけてくる。

「嬢ちゃん、家の手伝いかい？えらいねえ、こちらはお兄さんかい？」

フェリスは、今メイド服を着ていないので家の手伝いと思われたらしい。

「いいえ違います。」

「あれ？でもお兄ちゃんって呼んでなかったっけ。じゃあ近所のお兄さんかい？」

「違います」

「じゃあ親戚」

「うう、ちがうもん」

フェリスの素が出てきて泣きそうになってしまった。理由がわからない理由がわからないので慰めることも出来ない。

おじちゃんもお客を泣かせたことになんか焦っている。

「あんだ、なにお客泣かせてんだい！」

「いや、俺もよくわかんなくてよお」

「まったく、この二人はデートの途中だったんだよ。それをあんたは、妹の枠に押し込めようとして」

「そ、そうなのかい嬢ちゃんそれは悪かった。この鳥肉もおまけするから許しておくれ」

おじちゃんが慌てて謝罪を口にする。

「いえご迷惑をおかけしました。大丈夫です、私のほうにも問題がありましたから」

居心地が悪くなったので店を出ることにする。

「お兄ちゃん、私たちってデートしてるようには見えないんだね」

「周りの目なんか気にするな実際はデートをしているし、俺はフェリスを大事に思っている。それでいいじゃないか、それにその内、気にならなくなるさ」

「どうしてですか？」

「俺は、精霊界で長く過ごしていたから体質が変化して少し自然そのものに近くなっているんだ。そのおかげで俺は長寿で歳を取るスピードも遅いんだ。水の精霊王の話では300年は生きられるらしい」

フェリスの頭を撫でながら

「三年後には、すっかり連れ合いに見えるさ」

「嬉しいですけど、それだと私のほうが先におばあちゃんになってしまいそうです。わたしも冒険者になろうかな」

「どうしてそこで冒険者になるんだ？」

「冒険者の人はある程度強くなると少し長寿になるらしいんです。能力ランクA以上必要らしいですが」

「へ〜それなら同じ時を過ごせるかもな。」

「はい、がんばります。」

フェリスがやる気になっている。まあいいか護身にもなるし

「それじゃあ残りの食材を買いに行こうか」

「はい」

後は、混ぜる玉ねぎとかの野菜だなこれは、もうフェリスにお任せだった。

家に帰り、フェリスと一緒に夕飯を作ることには手間のかかる挽肉は俺が担当した。

結果ハンバーグは牛型の魔物のお肉と猪型の魔物のお肉が一番おいしかった。

その夕食には食卓にハンバーグが並び、フェリスはいつも以上に幸せそうに俺の膝の上で食事を取っていた。

その夜

「『今日は私たちです。』」

やっぱり、寝室に三人娘がやって来た。ティリエルとテツとフェリスだ。

ティリエルの抱き付き癖に対抗するようにほかの二人も抱きついてきた。

一番小さいフェリスが体の上でティリエルが右、テツが左に抱きついたままの就寝となった。

三人ともやわらかかった。

30話 女達との休日 3日目

異世界40日目

・ミリアの場合・

「ご主人様失礼します。」

「どうしたんだ、ミリア急にご主人様なんて」

前までジン様だったのに

「ジン様は私の主になりましたので、わたしもイリヤさんを見習ってご主人様とお呼びしようと思ひまして。」

「いやまあ、俺はいいんだけどね。それよりミリアは、どうするか決まった？」

「それが決まらなくて」

「?・・・なんで」

「私は、使用人としての教育を受けていたので自分の主だと思つと何かを頼むのも気が引けるといいますか」

生真面目だなミリアはそこもいい所だが。

「それじゃあ、ミリアの仕事を見学させてもらおうかな。」

「見学ですか？それは楽しいのですか？」

「きつと楽しいさ」

そして今、俺とミリアは普段使わない部屋を掃除していた。これは、通常の仕事ではない、そもそも二人でやる仕事でもない。何故こうなったかというと

ミリアと話し、やることは決まったが、問題が発生した。仕事がないのだ。今日ミリアは、オフなので仕事を入れていなかったのだ。他の人の仕事をとるわけにもいかない。

そこでミリアが出した案が

「空き部屋をお掃除しましょう。」

ということになった。元々ミリアの仕事は掃除が多いらしい。食事をフェリスが、掃除をミリアが担当して周りのメイドはその手伝いをしているそうだ。

さすがに一人で片付けるのは大変なので俺も、手伝うことにしたのだ。

「ご主人様は、ご主人様なのですから、あまり他の人の仕事を取らないようにしてくださいよ。」

まあ、仕事を取ることが悪いのは何となくはわかる。仕事がない使用人は肩身が狭くなるようなのだ。

「わかったわかった。でも今日はミリアと共同作業がしたかったんだ。」

「ご主人様」

おお、照れてる照れてる。

「ほら、外に出たらあまりミリアに会えないかもだろ」

「あつ、そうですね。」

ミリアが少し落ち込んでしまった。落ち込んでくれるのなら提案ぐらいはしてみよう

「フェリスにも話したんだけどミリアも冒険者登録をして一緒に旅をしないか？少し危険だから断ってもいいんだが」

「いえ、行かせてください！。私てつきり置いていかれると思っていたので、誘ってくださいって嬉しいですよ。」

「そこまで、嬉しいものなのか？」

「だって誘ってくださるということは、わたしを側に置きたいと思っ  
て下さっているということ、それが嬉しくないはずがありません。」

「そ、そうか。それじゃあ明日にでもギルドに行くか」

そう言われると少し照れるな。ミリアは興奮した様子で



「はい、それでは、引き継ぎなどをしないといけないので、ちょっと行ってきました。」

行ってしまった。掃除の途中だったがまあいいか、まだ終わっていないが切りは良いのだ、後は本職に任せよう。

- リリスの場合 -

お昼を過ぎたところにリリスが部屋になって来た。

「リリスは決まった？」

「私も手合わせ・・・と言いたい所だけどそれじゃあ、つまらないから一緒にお出かけしよ」

「わかった。何処に行くんだ？」

「武具屋」

目的地に向かう道すがら何故武具屋なのか訪ねると

「実は、ノワールサイと戦った時ので、レイピアの損耗が激しくてさ新しい武器が欲しいから下見をしたくて」

「そんなに前からか、大丈夫なのか？」

「大丈夫だよ。すぐには折れないと思う」

「それならいいが」

そうこうしている内に皇国の武具屋の一つに着いた。

「前の武具屋では、武器を見るのに付き合えなかったんだよな。リリースは今回もスピード重視なのか？」

「そのつもりだからレイピアにしようと思っただけど」

悩みながらレイピアの棚を見るリリースに

「ちょっといいか？」

「なに？」

「リリースって基本刺突がメインだよな」

「そうだよ、なんで知ってるの？手合わせしたことないよね？」

「リリースのことは、よく見ているからな」

「あ、ありがとう」

顔をそらしながら礼を言っている、照れてるようだ

「それならエストックなんかどうだ、刺突を重視した武器だからリリースには合うと思うんだ」

エストックとは両手用の刺突重視の武器だ。エストックは、剣身の

断面は菱形で、先端になるにつれ狭まり先端は鋭く尖っている。レイピアと違い両手で突ける分威力が期待できる。

「リリースのスピードは申し分ないし少しはパワーを求めてみたらどうだ。ノワールサイのような固いやつに出会ったら大変だろ」

「エストックかあ、みてみよっか」

エストックは、刀同様数が少ないから奥に仕舞われているらしく表には並んでいない。

店主に奥から持ってきてもらいエストックをみてる。全てに目を通した結果一つのエストックを手にとった。

「これが一番いいかな」

そのエストックは、軽量化の魔法を始め、二重強度強化と雷を纏わせて貫く力をかなり高めた物だ。かなりの業物だ。

「これは、いくらですか？」

「それでしたら複数の魔法をかけられているので、15000ギルになります。」

「た、高いよジン」

「確かに高いな、まあ大丈夫だろう。それをくれ」

「ジン今日は下見のつもりだったんだけど」

「いいのいいの、なあ護符ってあるか？」

「ありますよ、いくつほど？」

「二つくれ」

40600 - 17000 = 23600ギル

残金 23600ギル

「ジンは刀見ないの？」

「テツがいるだろう」

「ふふぐん、レティーシアとの稽古を見ていた時に気付いたんだけどジンって本当は、二刀流だよね。」

「……気付かれたか。皆を驚かそうと思って黙っていたのになあ。」

「他には、誰も知らないの？」

「テツは、知ってるよ、なんせ俺の小太刀だからな。話さない訳にはいかないし、自分で気付いていたしな」

「少し妬けるなあ。」

「そういうなよ。そうだな、気付かれたんなら、ちょっと見てみるか」

店主に刀も見せてもらうが

「やっぱりテツに釣り合う刀はないか」

刀を戻し店を出る。リリスが腕を組んできた。リリスの感触を楽しんでいると

「ジン今度二刀流見せてよ。」

「機会があればな」

- イリヤの場合 -

最後の一人が、夕食と入浴の後に部屋にやって来た。

「ご主人様、私が最後になりました。」

「いらつしゃい、でも今から何をするの?」

以前この時間帯に来たソフィアは、お風呂を共にしたが、今日はそれも終わっている。

「ご主人様もお掃除とお買い物でお疲れでしょうからマッサージをさせていただきます。」

「俺には、願ったり叶ったりだが、イリヤはいいのか?」

「はい、ご褒美です。させていただきます」

「そこまで言うならお願いするよ」

そのまま座っていたベットに横になる。ベットに寝転がる俺にイリヤが跨りマッサージを始める。

イリヤはマッサージに治療魔術と一緒に使うようでかなり気持ちいい、蕩けそうだ。

「ご主人様、質問してもいいですか？」

「なんだい」

「ご主人様はどうしてこちらの世界に来たのですか？」

「言わなきゃ駄目？」

「駄目ではありません。ただご主人様の女の一人として知りたいのです。」

「わかった。話そう、そうだ理由は、いくつかあるんだが結局俺のためなんだよな」

「ちゃんと教えてください」

「そうだ簡単なのは、神が言うには、俺でなければいけなかったらしいんだよ。」

「ご主人様でない？」

「精霊との相性と人格らしい、次の理由は知ってしまったからだな」

「何を知ったのですか」

「俺が行かなければこの世界が減ぶことを知ってしまった。俺は他人の命を粗雑に扱える人間ではなかったんだよ。三つ目が……」

「三つ目は？」

「たぶん三つ目が、本音だろうな。俺は前の世界で物事に本気になれなかったんだよ。物事にあまり興味を持てなかつし、興味を持つたものでは優秀な成績を収め、すぐにやる気もなくなった。」

「……」

イリヤは、黙って聞いていた。

「生き甲斐がなかったんだよ。前の世界では、大事な人たちはいたけど毎日が退屈だった。だから退屈が嫌で異世界行きを決めたんだ。だから前の世界に未練はない。ちゃんと別れを伝えられたからな。ほらな、自分のためだろ」

「そのおかげで私たちは生きていられます。」

「そうだな俺は、この世界でお前達に出会った。俺は生き甲斐とこの世界大事な者を手に入れた。そして目標を持てた俺は今とても充実している。ありがとうイリヤ」

「ならどうして奴隷を解放するなどと」

「奴隷制度が気に入らないんだ。それに神は俺に好きにしろと言っ

てくれたからな。俺は、今の世界を壊し新しい世界を造ることしたんだ。」

「ご主人様はどのような世界を求めているのですか」

「それはだな、人と人が仲良くなつて奴隷制度がなくなりあらゆる種族が手を取り合えるそんな世界を造りたいと思っている」

「とても素晴らしいと私は思います。」

(ご主人様あなたは、やはり素晴らしい人です。この世界に来たきっかけは退屈しのぎだとしても、精霊界での修行も、私たちを救ってくれたことも、奴隷を解放しようとする 것도、この世界を導きまとめようとする 것도、あなただからこそなのですよご主人様です) ですからどこまでもお供しますご主人様)

イリヤはこの人と共に歩むことを改めて心に誓ったのだった。

その夜

「ジン」「ご主人様」

リリス、ミリア、イリヤの三人が部屋に現れた。まあここまでの二日の夜でわかっていたことだ。

ほかの二日と違うのはその夜がとても濃厚なものになったことだろう。

三人を同時に愛し合うことになったが、先に力尽きたのは三人の方だった。三人ともジンの性技によってイキまくり失神してしまったのだ。



三日目の夜は、疲れ果てていた三人をベットに押し込み裸の三人を抱えて一緒に寝ることにした。

### 31話 方針と新たな仲間

異世界41日目

朝起きると。

「ご主人様お客様が来ています。」

「誰？」

「アツシユ皇太子様です。」

「アツシユ？」

グーロム王国で、わかれてから一週間もたっていない。とても元王国領が安定したとは思えないのだが、何かあったのか？不安に思いながらアツシユの待つ部屋に向かう。

予想通り問題が発生していた。俺達は、王城で奴隷の解放を宣言したが、数日たって奴隷を隠し持っているやつらが目立ってきたのだ。しかし、安易に軍を動かせば、証拠隠滅のために奴隷が殺されてしまう。

そこで個人で、貴族や商人を潰せる俺に白羽の矢がたったのだ。

「わかった。俺の方で対処しよう。」

「ありがとうジン。できる限り手助けはするよ」

アツシユは、俺の返事を聞くとすぐに元王国領に戻っていった。朝食後アツシユの話の話を踏まえて、これからのことを決めるためにみんなに集まってもらおう。

そこで元王国領の状況を話す。

「そのようなことになっているのですか」

反応はそれぞれだったが、以外とフェリスの反応が一番大きかった。顔は青ざめて俯いている。

「大丈夫か？」

フェリスの肩を抱きながら話しかける。

「その、私、お城の奴隷の扱いを知ってて、とてもひどいことを顔は上げてくれたが、その目には涙があった。フェリスには城の生活そのものがトラウマなのだろう。」

「大丈夫だフェリス俺達はその奴隷を助けに行くんだからな、それにこの俺が行くんだけ絶対大丈夫」

「はい、・・・はい」

フェリスは、一番身近に奴隷がいたんだな。イリヤとリリスは一度奴隷になったが、奴隷を体験する前に俺が助けているから体験はし

ていない。

フェリスの、記憶から王城の生活を忘れさせるのは、まだ時間がかかるな。

フェリスが落ち着くのを待って話を続ける。

「俺の簡単な方針をこれから話す、

一つ目

元王国領の奴隷解放

二つ目

元王国領の残党の殲滅

三つ目

俺達自身の強化

四つ目

お金を稼ぐ

この四つがおおまかな方針だ。質問はあるか？」

「フェリスちゃんやミアさんも連れていくのですか？あとレティーシア様はどうするのですか？」

「ああ、二人共同行する。このあと冒険者登録をしにギルドに行く。レティーシアのことは、皇帝に聞かないとな」

「それなら大丈夫だ。アッシュが、同行していいと言っていた。」

アッシュのやつ俺より先にレティーシアに話していたということ  
は、俺が断らないこと前提だったなあ野郎。

三人の同行に反対などはなかった。

フェリスとミアに護符を渡す。ちなみに、ティリエルとレティー

シアは護符を元々持っていた。

レティーシアは、姫騎士と呼ばれているから不思議ではなかったし、テイリエルはアルベルトが持たせたようだ。テツは、気力と魔力を持たないから使えない。

「よし皆でギルドに行こう」

「み、皆ですか？」

確かに俺達は、9人と多人数だしな。

「今日だけだよ。ギルドカードの更新もしたいし依頼も受けるから。」

一応は納得してくれたので、俺達はギルドに行くことにした。

「へえ、ここが皇国の冒険者ギルドか、大きいな。グーロム王国のギルドって本当に小さかったんだな」

俺たちがギルドに入ると騒がしかったのが一瞬静かになったが、すぐにまた騒がしくなった。しかし、中には元の場所に戻らず俺達に正確には俺の女達に近づいてきた。こっちでもあるんだな通過儀礼なのか？

顔立ちは整っているが、どうも軽い感じがする金髪のにいちゃんだった。

「ねえちゃん達俺と遊ばない。依頼が終わってばかりで今結構お金あるんだよね。」

男がミリアに触れようとしたので間に入る

「彼女達は、俺の連れだ。手をだすな」

「オイオイそれを決めるのは彼女達だろう」

「それでしたら話しかけないでください」

「喋るな」「雑魚」

「私達はジン様のものです」

「死ね」「消えろ」

穏やかなものもあるが、暴言のほつが多い。

「な、なんで、そこまで言われなといけないんだ。」

まあもつともだな。

「悪いな。皆も挑発するな。だがこいつらは俺の女だ。もう一度言う手をだすな」

「・・・ちっ」

舌打ちして男は去っていった。

「皆ここはグーロムじゃないんだから、もえすこし穏やかに断ろうな」

「」「ハイ」「」

「ジン！久し振り」

大きな声で呼ばれた。周りにも聞こえたのだろう。さっきの男もギ

ヨツと顔を強張らせた後、胸を撫で下ろしていた。手を出さなくてよかった、とても思っているのだろう。

「あいつが『英雄ジン』なのか、じゃあ、あの水色の髪の女が『水災の魔女』なのか？」

「『水災の魔女』ってなんですか!？」

ソフィアが悲鳴をあげている。その引きがねになった男が側に来た。

「久し振りだなジーク」

「もうギルドは君の噂で持ちきりだよ。やっぱりジンは、すごいな」

「それでもないよ。それよりはソフィア達を送ってくれて助かった。ありがとう」

「いって。そうだカイル、ちょっと来てくれ」

ジークは、相方を呼びよせ

「お久しぶりです、ジンさん」

あれ、カイルの口調が変わっているような。

俺の疑問が解決する前に、さらに意外な申し出があった。ジークが真剣な顔で

「ジン、俺たちをジンのチームに入れてくれないか？」

何故俺のチームなんだ、普通は女ばかりで入りづらいと思うんだが

「ジーク達は俺達の目的を知らないだろ。なのに何故チームに入りたいんだ？」

これに答えたのは、意外にもカイルだった。

「私達は、昔騎士だったのです。ですが私達は、戦争で主君を失いました。そして新しい主君を探していたのです。そして私達はあなた様に出会いました。仕えさせていただけないでしょうか？」

やっぱりカイルの言葉使いが変わっている。それだけ本気なのだろうか。チームに仕えることになるのか？。だがチームの増強も必要だそれに彼らは信用できる。俺が数少ない知り合いの冒険者だ。

「わかった。チームに迎えよう、ただ俺は男には厳しいぞ」

「ありがとうございます」

新たに二人の仲間が増えた。その後二人はジン達の目的を聞いて。「やはりあなたを選んでよかった」と感慨深げに呟いていたとか。

手早く冒険者登録を済ませ

新しい仲間とギルドカードを見たことがない人達のカードをみることにした。

まず新しい登録組の

名前 フェリス 女 12歳 人間

ギルドランク G

能力ランク 総合E 気力F 魔力C



チーム 『世界を結ぶ者達』  
称号 ジンの料理人 ジンの義妹

名前 ミリア 女 20歳 人間  
ギルドランク F  
能力ランク 総合D 気力E 魔力C  
チーム 『世界を結ぶ者達』  
称号 ジンのメイド

フェリスとミリアは、完璧に魔術師タイプだな。これでは、後衛に偏ってしまうな。  
新しい男どもは

名前 ジーク 男 21歳 人間  
ギルドランク B  
能力ランク 総合B 気力B 魔力B  
チーム 『世界を結ぶ者達』  
称号 一級騎士

名前 カイル 男 20歳 人間  
ギルドランク C  
能力ランク 総合C 気力B 魔力C  
チーム 『世界を結ぶ者達』  
称号 二級騎士

名前 レティーシア 女 17歳 人間  
ギルドランク D  
能力ランク 総合C 気力A 魔力D

チーム 『世界を結ぶ者達』  
称号 ジンの女 皇女

ありがたいことに、三人とも前衛タイプだった（ジークも前衛だった）。これなら、チームのバランスがよくなるな。  
それにしてもジンの女つてずいぶん直接的なつたな神の野郎。  
残りのメンバーもカードを出す。

名前 ソフィア 女 18歳 人間

ギルドランク E

能力ランク 総合C 気力D 魔力B

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 水の巫女 精霊術師 水災の魔女 ジンの女

「ジン様〜私『水災の魔女』じゃないですよ〜」

ソフィアの称号が増えていた。水災の魔女については、かなり不満そうだ。ソフィアは、あの時危ない人を助けていただけだからな。

名前 イリヤ 女 17歳 エルフ

ギルドランク E

能力ランク 総合C 気力D 魔力B

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 ジンのメイド 治癒術師

名前 リリス 女 17歳 人間

ギルドランク B

能力ランク 総合B 気力A 魔力C

チーム 『世界を結ぶ者達』  
称号 ジンの護衛 熟練者

名前 ティリエル 女 15歳 龍族

ギルドランク E

能力ランク 総合C 気力B 魔力C

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 ジンの義妹 幼い銀龍

三人のカードには、変化はなかったが、ティリエルのカードを見たときに新しい男二人は、かなり驚いたようでティリエルを長い間凝視していたので

「ティリエルを見すぎだアホども」

目潰しをしてやった。

二人は、悲鳴をあげながら地面を転がった。

「ここまでするか普通？」

「言ったる、男には優しくないって」

「厳しいって言ってたよ！」

「細かいことは気にするな。最後は俺だな。」

名前 ジン 男 18歳 人間

ギルドランク B

能力ランク 総合B 気力A 魔力C

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 聖痕使い 精霊王の友人 救世主 英雄 8人の女に愛される男 奴隷の解放者 精霊術師

『英雄』が増えている。後前からあった称号が変化している。まあ主ではないしな。

さっきまで騒いでいた二人は絶句している。そんな二人は放っておいて次は依頼だな

依頼を見に行くとまた、顔見知りがあった。クレアさんだ。

「クレアさん久し振りってほどでもないか」

「そうですね」

「家は決まりましたか？」

「それがなかなか決まらなくて、今はギルドの空き部屋を使わせてもらっているんです。」

この時、しばらく留守にする屋敷と暇になるであろう使用人達を思いました。それならと

「クレアさんいい物件がありますよ」

俺は、屋敷を使うように勧めた。最初は、遠慮していたが、屋敷の主要人物が全員出るので信頼のおける人に任せたいことと使用人が暇になることを話してやっとクレアさんは頷いた

「それなら、ご厄介させてもらいますね。ありがとうございます。  
ジンさん」

後ろの女達からは冷たい視線が送られてくるが気にしない。

細かいことを話したあとクレアさんと別れる。

今度こそ依頼を受けに行くぞ。

### 32話 新しい依頼と第一皇女

「それじゃあ依頼を受けるわけだが」

「だが？」

何人かに？マークが浮かんでいる。

「この人数で一つの依頼を受けても時間がもつたないからいくつかのチームに分ける」

テツと男二人以外の仲間の顔に影がさしたので慌てて付け足す

「分けるといってもそのチームが中心になって受けた依頼をやるっただけで、基本皆一緒に行動するからあんまり気にするなよ」

テツ以外皆安堵していた。まあテツは、小太刀だから俺と一緒に行くって決まっているからな。

結局皆と相談した（各々の思惑も混じって）結果こうなった。

Aチーム 俺とテツ

Bチーム ジークとカイル

Cチーム レティーシアとミリア

Dチーム リリスとソフィア

Eチーム イリヤとフェリスとティリエル

というチーム分けになった

受けた依頼は、

Aチーム ランクA 岩窟竜一頭の討伐 5万ギル 無期限 モル

ド伯爵領

Bチーム ランクC 牛鬼五体の討伐 1万ギル 一月以内 元王国領南部

Cチーム ランクD ゴブリンの群れの討伐 4000ギル 二週間以内 元王国領の西街道付近

Dチーム ランクD 生熱の種の採取 30個 5000ギル 半年以内 元王国領北部に生息

Eチーム ランクF 魔物五十匹討伐 2000ギル 一月以内  
ニビルの森

このほかにチームとして特別クエストとして元王国領内の魔物の討伐依頼を受けた。

この依頼は、元王国領を立て直すためにクイント皇国が出した依頼で制限がない代わりに報酬は少ない、一応受けておくという依頼だ。これのおかげで冒険者が魔物討伐に積極的になるらしい。

この依頼は、ギルドカードのチームの下に

A・0000 B・0000 C・0000 D・0000 E・0000  
F・0000

と表示されていてチーム内で混同されているらしい。

「それじゃあ、今度は武具屋だな」

フェリスとミリアの魔法を使うための媒体を買いに行った。二人ともソフィアやイリヤのしている指輪をジングがプレゼントした物だと知っていて

「わたしも指輪がいいです」

ということになり二人に別々に媒体としての指輪をプレゼントした。

フェリスの指輪は、黒い魔石の付いた指輪で魔力増幅に重点を置いた指輪だ。フェリスの指輪はシンプルなデザインだ。黒い魔石は黒真珠に似ている。

ミアの指輪は、緑と黄色の魔石を付けたもので風と雷の魔法が使いやすいくなる指輪だ。ミアの指輪は、魔石が二つな分少し凝っているが派手さはない上品な指輪だ。

あとティリエルの武器だが、ティリエルは、ダガーを2本選んでいい。二重強度強化がかけられた物だ。

指輪が4500と5500で1万ギル、ダガーは一本2000ギルだった。

23600 - 14000 = 9600ギル

武器の次は魔具を取り扱う店に行くことにした。

以前の討伐依頼の時にリリスを失いそうになったことがあった。森のランクに相応しくないランクAのノワールサイが現れたからだ。それらの不測の事態に対処するためにいくつか考えていたのだ。そのひとつが魔具に頼ることだった。リリスに話は聞いたがそれだけではわからない、俺が欲しい物があればいいのだが。

入ったのは、レティーシアがお忍びでよく使っている魔具屋だ。

魔具屋といっても魔具といってもいろいろで、魔術を込めた装飾品、使い捨ての魔符（魔術を込めた符）などあらゆる物を扱っている。魔具以外にも魔物の一部や魔石などの素材などもある。

俺が探しているのかは装飾品だ、武具屋にもあったが、武具屋のも



のは、ほとんどが戦闘用だった。

この世界の字が俺は読めないので、店主に話して探してもらったことにした。

目当ての物は、見つかった。

『絆の腕輪』といって登録した相手の居場所がわかり、自分の危機を伝えることができる。

チームがバラバラに動くときにつけたり、お金に余裕のある家庭が子供につけたりもする。

腕輪に少し細工をしてチームの証にすることもある。

これを、人数分買う。細工はいつかしたいと思う。

11×500＝5500ギル

9600－5500＝4100ギル

店を出たあと、旅の準備をジーク達に任せ先に宿に戻る。準備のお金は、ジーク達が払うことになった。もうチームの一員だし腕輪のお礼も兼ねてらしい。お金もずいぶん少なくなったのでありがたい。皆を先に帰らせて俺は、城に向かう。馬車を借りるためだ。今の馬車では、六人ぐらいしか乗れないからだ、金もないから依頼主に借りることにしたのだ。

顔パスでお城に入る。

しかし、皇帝は今忙しいらしく待つことにした。  
庭で暇をもて余していると、城の方から女が二人歩いてきた。  
驚いたことに、第一皇女とレティーシアの影武者だった人だ。

「どうしたんだ、アリシャちゃん」

「むっ、私の方が年上」

「いいじゃないか、こんなに可愛いんだから、えっとそっちは？」

「レイシアと申します。」

「名前交換してたんだ」

「はい、レティーシア様の希望でなんと自分の名前に反応しそうになっただけ」

笑顔でレティーシアの愚痴を言っている。日常だったのだろうな。

「ハハ、レティーシアらしい、話は戻るけど、こんなところでどうしたんだ？」

「あなたがいるから会いに来た。」

「俺？」

「興味がある。あなたのこと教えて」

「条件がある」

「なに？」

最初は馬車を頼もつかと思ったが、自分の話を馬車と同じにするのは気が引けた、だから

「君のことも教えて」

「えっ」

「俺のことを教えるから君の事を教えて」

「わ、わかった」

その後、二人で会話を交わした。俺の世界のことアリシヤの思い出などあらゆることを聞き話した。

「じゃあアリシヤは、ハーフエルフのハーフなのか」

「そう私は、エルフのクォーターこの容姿は、そのせいだと思う」

自分の平らな胸と身長を指しながらアリシヤは言った、そのアリシヤは今では、俺の膝の上で会話をしている。  
レイシヤさんは、少し後ろで微笑んでいる。  
そんな楽しい時間に水を指すやつが来た。

「アリシヤ 姫そんなところで何をしていらっしやる」

高圧的な喋りかたで騎士風の男が近づいてきた。明らかにこちらを見下す表情で

「そのようなどこの馬の骨ともわからない男と話しては、姫様が汚れますぞ」

「お前と話す方が穢れる」

「アリシャこいつは誰だ？」

アリシャは苦々しそうな表情で

「第六師団長で私の元許嫁」

師団長ということは、ゲオルグよりは下だな。師団長は、所詮將軍の指揮下にある。

「おい平民、元ではない。父達が勝手に解消しただけだ。」

こいつはアホなのか、許嫁は親が決めるものなんだから親が解消してもおかしくないだろうに

「アリシャなんで解消になったんだ？」

「こいつの素行不良、いくつか罪も犯してる」

よくそんなやつに師団長を任せているな。ゲオルグに相談しようかな。

「そんなゴミみたいなやつに、可愛いアリシャを任せるわけにはいかないな」

二人の反応は、似ているが正反対だった。

アリシヤは、無表情ながら頬を染めて恥ずかしがり。  
ゴミは、顔を真っ赤にして怒り狂っている。

「貴様俺を侮辱してただで帰れると思うなよ。」

「なんだ、土産でもくれるのか？」

「殺されたいらしいな」

「やれるならやってみろ」

「言ったな、貴様に決闘を申し込む」

「ジン止めた方がいい、これはランクA。あなたの精霊術はすごいけど決闘には不向き」

ゴミは、何気にアリシヤが物扱いしたことに気付かずに

「姫様は、よくわかっている。謝るなら今のうちだぞ平民」

「アリシヤ大丈夫だよ。俺は剣術もやるからな、こんな三下すぐに倒せる」

「ならば、受けるのだな」

「ああ受けてやる、ありがたく思え、師団長」

### 33話 決闘 英雄VS師団長

「ただ決闘するのもつまらないな、そうだな賭けをしよう」

「賭けだと？」

「そう賭けだ。俺の方からは、そうだな・・・俺が勝ったら今後一切アリシヤに近づかないで貰おうか」

「ふん、いいだろう。その代わりに俺が勝ったら、お前を奴隷にして売り払ってやる」

奴隷だと、皇国で禁止されていることを当たり前のように、適当な時に潰しておくか、その方がこの国のためになりそうだ。

「これよりジン殿とラウル殿の決闘を始める。攻撃防御は、持った武器のみ魔術や精霊術などの使用は禁止とする。急所への攻撃も禁止、急所に当てた場合当てたほうの負けとします。それでは・・・  
・始め」

合図をしてくれたのは、訓練場で訓練をしていた他の師団長だ。審判をお願いした。

こいつラウルって名前なんだ。そういえばこいつの名前聞いてなかったな、まあ興味もないしどうせすぐ忘れるいいか。

俺が使う武器は短い木刀、ラウルが使うのは長めの木剣だ。

驚きの速さでラウルが間合いを詰め、左から木剣を横に振るう。ジンはこれを木刀で受け止める。ラウルは、すぐに木剣を引きなんと

も突きを放ってくるがこれらをジンはすべて弾いてみせる。次にラウルは上段から木剣を振り下ろすが、これは後ろに飛び避ける。

「どうした、攻撃してこないのか、それとも手も足も出ないか」

「以外だったよ、もう少し雑魚っぽいと思ってた。」

実際すべて防いでいるが、ラウルの攻撃は一連の流れになっており切り込む隙がない。今までこの世界でまともに打ち合ったことがあるのはラシードとレティーシアだが、少なくともレティーシアよりも強いだろう。

だから、まずラウルを一度蹴り飛ばして距離をとる。

「ぐっ、だがこれくらいで」

「ちょっと確認したいんだけど、いい？」

「なんだ命乞いか？」

「いいや、ただあなたに本気でやっていいか聞こうと思ってな」

「貴様ふざけるなよ、これは決闘だぞ本気でやれ」

「いいぜ、レイシアさんその木刀投げてください」

「ふえっ、・・・こ、これですか？」

突然呼ばれて驚いたレイシアさんが近くの壁に立てかけてあった通常の長さの木刀を持ち上げる

「そうそれです。投げてください」

投げてもらおう

「ありがとうございます」

「なんだ武器の長さの問題だともいうのか」

ラウルが嘲るような表情を浮かべる

「ああ違う違う」

投げ入れてもらった木刀を右手に、下からあつた木刀を左手に持つ

「俺は、二刀流だ。」

「なんだと、は、はったりだ」

「なんだ評価は、下方修正だな。俺まだ左腕しか使っていないんだ  
ぜ」

「なっ」

「俺が刀神から習った、神双流は左の小太刀で攻撃を防ぎ、右の大  
太刀で攻めるのが基本、見せてやるよ俺の本気」

本気で相手に踏み込む。左の木刀で迎撃のための木剣を受け流し右  
の木刀を首に添える様にギリギリ止める。

二つの動作を同時に行うことであつた一度の攻撃で決着をつけた。

二つの武器を持ったことで動きが遅くなるどころか、重心が安定し



て動きの速さも上がっていた。

「ま、まいった」

「もうアリシャに近づくなよ。師団長殿」

ラウルがその場に倒れてしりもちを付く。

ジンが、ラウルに背を向けアリシャたちの下に歩きだすと、後ろのラウルがブツブツ呟いて

「・・・の・・・ほの・・・やせ・・・焼き尽くせえー」『フレイム・バレット』」

無数の小型の火球がジンに向かって放たれる。ラウルが、逆上し魔術で攻撃してきたのだ。審判役の師団長が止めようとするが、間に合わない。それに、このコースはアリシャたちの巻き込まれるコースだ。

しかし、俺の近くにきた炎の玉は、すべて俺の手前でしばむように消滅した。

「な、ぜ」

「精霊術で壁を作っただけだ」

風の精霊術で真空の壁を作ったのだ。炎では、これをこえることは出来ない。

「今の攻撃、アリシャたちにも当たるコースだったな、少しお仕置が必要だな」

ラウルに精霊術の雨を降らせる。  
火で髪の毛を炙り  
水で息できなくし  
風を圧縮してぶつけ  
土で下から土の槍で突き  
雷で感電させたりした。

服は燃え、鎧は砕け、髪の毛はちぢれ、体中を痛打される。見るも無残な姿になっていくラウルに、審判をした師団長だけではなくアリシャやレイシアまで同情の眼差しを向けていた。  
ラウルがボロボロになり気絶したのを見てお仕置きをやめる。同情の眼差しをラウルに向ける師団長に

「師団長ちよつといいか」

「は、はい、な、なんでございましょう」

すっごい慌てようだな、そんなに怖かったかな？

「さっきの賭けの話、広めておいてくれるか。これがアリシャに今後近づかないように」

ゴミのようになったラウルを指しながらお願いする。

「はい、わかりました。」

「頼んだよ、アリシャ庭に戻ろうか」

「わかった」

庭に戻って、もう一度アリシヤを膝の上に乗せる。

「ジンって、結構怖い？」

「敵でさらに男なら、どこまでも残酷になれるな。だけど女には基本優しくすることになっている。」

「よかった。それにしてもジンは強い」

「ありがとう」

「わたしもあなたに・・・」

「俺に？」

「な、なんでもない、そ、それよりジンは、お城には何をしに？」

急な話題変換だなまあいいか、何しに来たかだったな・・・

「ああー、すっかり忘れてた。馬車を借りに来たんだった」

「馬車？何故？」

「近いうちに旅に出るんだよ、アッシュの頼みで」

「兄上余計なことを」

少し機嫌が悪くなったような気がする。

「どうかした？」

「なんでもない」

しばらくアリシヤがなにやら考え込んでいた。

「馬車だったら私の頼みを聞いてくれたら用意する」

「頼みによるなあ」

「大した事じゃないこの指輪をつけてほしい」

アリシヤの指についている物と同じ指輪を差し出してきた

「指輪？いいけどなんで？」

「あなたの、腕輪と同じような物、この指輪は特注品、相手と会話  
が出来る。」

「つまり、たまに話そうってこと？」

コクコク

アリシヤがすごい勢いで頷く

「姫様その指輪は」

「レイシヤ黙る」

「は、はい」

アリシヤがレイシアを黙らせている。何かありそうだが危険はないだろう。

それに会話をしたいと思ってくれることは少し嬉しい、だから受けとることにした。

アリシヤの手で指輪をつけてもらう

「対呪、や気力、魔力の増強などいくつか効果がついている」

「そんな便利な物をいいのか？」

「いい、ただ」

「ただ？」

「その指輪は、私以外には外せない」

「えっ何故？」

後で試したが、俺の契約破棄の力でも外せなかった。契約とは違つようだ。

「その内わかる。馬車はレイシアに頼む。馬車が来るまでお茶にする。私の部屋に来て」

アリシヤに連続で喋られ言葉を返す暇もなく、部屋に連れられて行くことになった。

アリシヤの部屋には本がいっぱいあった。本棚で左側の壁が埋まっ

ているし机にも本の塔ができています。

「本好きなのか？」

「好き、人は面倒だから」

「たしかに、皇女となると面倒だろうな」

とてもドロドロした人間関係になりそうだ。

「でもあなたは、どこにも所属していないし対等に話しても問題ないからとても落ち着く」

アッシュも同じことを言っていたな。

部屋に入ったからだろうか、やわらかい表情を見せてくれた。普段無表情な分よけいに可愛い。

その後も二人でお茶をしながら他愛もないことを話してすごした。日が傾いてきたので帰ろうとすると

「使いを出す、問題ない、それより一緒にご飯を食べる」

「わ、わかった」

またアリシャの勢いにのまれてしまい、そのまま食事を共にするようになった。

「大丈夫」

その後も何度か屋敷について話すと大丈夫が返ってきて。途中から屋敷ことを話すと大丈夫が返ってくるようになっていた。

暗くなり、さすがに帰らないと、と説得するよ。

「私と一緒にイヤ？」

「イヤじゃないけど、いろいろ急で」

「だって、ジン旅に出るから」

そういえばそうだな。そういうことなら今日ぐらいはアリシヤに付き合っことにするか。

翌日アリシヤと朝食を食べ終わった後、城を出ることに

「あの馬車は？」

レイシヤさんに尋ねると

「もう昨日には屋敷についていますよ」

不思議そうな顔のレイシヤさん。

騙された。

まあいいかこういう可愛いウソは許せる。

屋敷に帰ると指輪について聞かれたが、とある人からプレゼントされたただけ説明した。

皆気になるようだが、俺が答えないので諦めた。ミリアは、なにか

感じているようだったが追求はなかった



### 34話 岩窟竜

異世界44日目

「魔の火よ、眼前の敵を燃き尽くせ、『ファイア・ボール』」

指輪で増強された魔力でフェリスが、直径1メートルぐらいの火球がハイウルフに命中する。

「できた。できたよ、お兄ちゃん。褒めて褒めて」

「すごいぞ、フェリス」

誉めながらフェリスの頭を撫でてやる。

ジン達は、今別れて行動している。Bチーム、Cチーム、Dチームでゴブリンの群れ討伐に出ている。

そして余った、Aチーム、Eチームは実戦経験のないフェリスの魔術の練習をすることになったのだ。

今は、Fランクの魔物しかでない森にいる。

ミアは、元レティーシアの付きのメイドだったからか、今のギルドランクの依頼ぐらいなら問題ないそうだ。

ここには、俺と小太刀のテツ、ダガーの練習をしているティリエルと教師役のイリヤと生徒役のフェリスがいる。

俺も将来的には魔術も使うつもりだから、イリヤの説明をフェリス

と一緒にしっかり聞く。

「体内にある魔力の源は、基本無色とされていますが、これを魔力に変換する時に、色が付く人がいます。」

「色ってなんですか？」

「この場合の色は、視覚的な意味での色ではなくて、魔力の質のことで赤だと火の、緑だと風の魔術に使えます。」

「へえ」

「変換するさ時に色が付く人は、その色の魔術に関しては、詠唱短縮、威力増加などいくつかの利点がありますが、その代わり他の魔術を扱いづらいです。」

「イリヤなんだか楽しそうだな。教えるのがすきなのだろうか？」

「ちなみに、私は薄い白で治癒術が得意です。ちなみに赤の色を持つ人を炎術師、緑の色を持つ人を風術師、私の治癒術師等と呼ぶこともあります。ミリアさんは、変わっていて緑と黄色の二つを持っています。」

「それで、ミリアさんの指輪は、二つ魔石が付いていたんですね。」

「そうですよ。フェリスさんは無色のようでしたので増幅の指輪にしましたね。」

「じゃあ、私は得意な魔術ないんだ。」

フェリスが落ち込んでしまった。イリヤが慌ててフォローする。

「大丈夫ですよ。得意なものなくても不得意なものもありませんから。」

「器用貧乏?」

「はう!?!」

見事なカウンターが入った。

「フェリスあまりイリヤで遊ぶな」

「えへへ〜ごめんなさい、イリヤさん天然で面白いんだもん」

「それは認めよう」

「ご主人様」

イリヤが、可愛いらしい非難の目を向けてくる  
うん、可愛いだけだな

こんな感じで緩くフェリスの練習または修行を続けた。

ゴブリンの群れは問題なく討伐できたらしいです。

次の依頼

モルド伯爵領の、依頼主であるモルド伯爵に岩窟竜討伐の補足事項について聞きにきたのだが

「貴様らは、岩窟竜をさっさと倒せばいいのだ」

こればかりだ。

「ですから、討伐で5万その場から移動させるだけで3万と依頼にあるのでその確認をですね」

補足事項とは、街道から移動させれば必ずしも討伐する必要はない、というものだった。

「知らん知らん、さっさとあの邪魔者を討伐してこい」

「では、この依頼は、破棄されるのですね？」

「そんなこといっておらん、ええい、貴様らは黙って言うこときけ」

「話になりませんね。私たちはあなたの部下ではありません。そういうことでしたら、ギルドのほうに再申請してください。」

こちらが、席を立つと

「ま、待て、わかった。その依頼の通りでいい」

「わかりました。」

胸くそ悪い屋敷を後にする。

今は、Bチームが牛鬼討伐に出ているので、周りは女ばかりだ。

「ご主人様、何故あのような者に会いに行かれたのですか？」

「岩窟竜を説得ができるなら戦う必要がないだろ」

「り、竜を説得ですか」

「テイリエルがいるから可能性はある。それにアッシュの情報で、あいつは奴隷を持っている可能性があるんだ。」

「でしたら、その、何故捕まえないのですか？」

「目撃情報はあるんだが、奴隷そのものが見つからないんだ。今も精霊術を使って探していたんだが見つからなかった。」

「ガセってこと？」

「まだわからん、もう一度屋敷に入るためには、依頼を終わらせないと」

テイリエルだけを連れて、岩窟竜に会いに行くことに。

岩窟竜は、モルド伯爵領が使う大きな街道を塞いでいた。確かに邪魔だな。

討伐されないのは、基本無害だからか？

岩窟竜から攻撃はしてこないそうだし。村の人間は、山賊がいなく

なつたと喜んですらいた。

岩窟竜は、巨大な岩のような竜だった。その体は、ノワールサイよりさらに硬く柔軟らしい。竜ならプレスも扱うだろうから本来ならSランクの依頼だ。それがAランクなのは岩窟竜が本当におとなしいのだろう。

岩窟竜の頭部と思われる場所に移動する。(わかりづらい)

「ティリエル話せそう?。」

「はい、といたしますか、たぶん」

ティリエルが、何故か反応に困っている。

「ワシと話がしたいのか?。」

「うお、びっくりした。喋れたのか」

それでティリエルが困っていたのか。

「ワシは、これでも長く生きておる。人の言葉くらいは扱える。それにしても珍しい組み合わせじゃな、銀龍の嬢ちゃんと、うん・・・人間か?。」

「一応人間だ。話ができるなら、手っ取り早い。単刀直入に聞く、じいさんはなんでここにいるんだ?。」

「お、お兄様。古龍と言ってもいい方に、じいさんはちよつと」

「じいさんかそれも悪くないが、ワシの名前はストルと言う。」

「そうか、ならストルさんと呼ぼう。俺はジン、救世主をやっている。」

「わ、私は、ティリエルと申します。」

「救世主？まあよかろう、よろしくの。さてワシがここにいる理由じゃったな。」

あっさり流されてしまった。まったく動じないな。

「ワシは、とある村で縁あって小人族を守っておったのだが、一ヶ月ほど前に村の小人族が三人ほど人間に連れ去られての。特殊な方法で追いかけて、あの屋敷にいることがわかったのだが、攻撃して事を大きくしては、小人が殺されかねん。それで、ここに陣取ってジungkんみたいなのか、屋敷の誰かが交渉に来るのを待っておったのだ。」

「小人族・・・そういうことがあのゲス野郎！、連れ去られた小人族が心配だ。ストルさんこちらの要件を話させてもらおう。」

小人と聞いて、何故見つからなかったのか、わかった。

要件を話し終え、ストルさんは、しばらく黙考して

「ジungkんの申し出を受けよう。これは、友好の証だ受け取ってくれ。」

ストルさんがくれたのは、きれいな丸い石だった。蒼くて透明で宝石のようだった。それを三つくれた。それがなにか知っているのだろうか。ティリエルが

「よろしいのですか？これほどの物を三つも」

「それだけの価値が君たちにはあるとワシは判断した。」

「ティリエルこれは、なんなんだ？」

「『竜宝珠』、地に属する竜にだけつくることのできる宝珠でつくるのに長い時間を必要とします。地の竜にとって家宝のようなもので、人にとっても売値で最低でも50万ギルはします。それにこの竜宝珠はとても純度が高いです。」

ティリエルが、興奮している。

「ストルさん一つテツに与えていいか？」

「その不思議な小太刀のことが構わんよ」

気付いていたか、小太刀の姿なのによくわかるな。アルベルトとどっちが強いんだろう？

それにしても、ありがたい

テツを抜き宝珠と重なる、今までの吸収で一番強い光を放った。

「主、これすごい。力が溢れてきます。」



テツは、突然人型になった。顔を見ると頬を上気させている。瞳が蒼っぽく変化している。落ち着くのを待って

「テツ、小太刀になってみてくれるか」

テツに小太刀になってもらい持つてみると、その存在感がまるで違った。見た目は小太刀なのに大剣以上の存在感だ。斬らなくてもその鋭さが格段にあがっているのがわかった。刀身にあった白い龍の紋様が変化して、青い龍と白い龍が絡み合った紋様になっている。

「【主私を両手で持つてみてください。】」

「どうか」

テツが光だした、光が収まったとき二振りの小太刀が握られていた。左の小太刀に白の龍が、右の小太刀に青の龍の紋様が浮かんでいる。

「【隠し機能その二です。】」

「はは、すごいな」

「【長さもその内変えられるかもしれないです。ただ力は半々になつてしまいます。】」

「それでもすごいよ。やっぱりお前は最高だテツ。」

「【ありがとうございます。・・・そして私はもう餓えた『鉄餓刀』ではありません。主のおかげで『黒龍刀・鉄』へと成長しました。これで私は、主のための主だけの刀になれました。】」

「俺だけの」

嬉しさを噛み締める。

一通り感動したあと。

「ストルさん一度ここを離れてくれないか、そうしたら屋敷にすんなり入れるんだ。」

「わかった。ジンくんティリエルちゃんそれにテツちゃん後は頼んだよ」

「任せてくれ」

「はい！」

### 35話 小人救出

異世界45日目

「依頼通り岩窟竜を街道から退かした。討伐ではないので3万ギルもらおうか。」

今回は、俺とテツの二人だけで屋敷に出向いた。武器の携帯は認められていないが、テツは当たり前のように同伴している。少々危ないかもしれないから他の仲間は置いてきた。

「知らんな、証拠を見せてみる。岩窟竜のお主達が退けた証拠を」

「実際に、岩窟竜は移動している。」

「そんなもの証拠にはならんだろう。ククク、素直に討伐しておれば証拠になったであろうにな、ハハハハハ」

ムカつくのでさっさと本題に入る。

「正直報酬の件は、別にどうでもいい。」

「なんだもう諦めたのか、ククク」

笑いが止まらないようだ。その耳ざわりな笑いを止めてやる。

「一階東側の倉庫のような部屋の小さな三つの金庫の中身」

ピクッ

「・・・何故、それを」

「企業秘密だ」

モルド伯爵の護衛二人が武器を構え、伯爵は側の呼び鈴で外の私兵を呼び寄せる。

扉から多数の私兵が入ってきて、ジンとテツを囲む。十六人が、その兵に向かって聞いてみる。

「お前達に聞く、この屋敷の奴隷については、知っているのか？」

「だったらどうするんだ、お前はここで死ぬんだから関係ねえだろ」

「そっちのチビは、俺たちで犯してや・・・る」

ドサ

テツに向かって気持ち悪い視線を向けていた男の首より上がセリフの途中で後ろに落ちた。無音の『風刃』で頭を切り落したのだ。

「大体わかった。お前は死んでおけ、テツ」

「はい」

テツが小太刀の姿になると同時に

「『炎蛇・四首』」

炎の蛇を四匹だし私兵にけしかける。

「人が刀に」

「なんだ、精霊術なのか」

動揺している兵を次々に喰らう。七人ほど喰ったところで

「『ウォーター・ウォール』」

水の壁で炎蛇を相殺される。さすがに山賊のようにはいかないか、と考えながら炎蛇に気を取られていた後ろの二人の胸を斬る。二人とも鉄でできた鎧を着ていたが、今のテツに鉄の鎧など何の障害にもならない。バターを切るよりも楽だ。

これで十人、あと六人。一先ずそのまま後ろに下がり距離を取る。

「野郎よくもやってくれたな。」

三人が同時に攻撃してきた。狭い空間で三人が同時に攻撃してこちらの動きが制限されるが、それは相手もおなじで動きが読み易い。

「テツ、二刀に」

テツを二刀に分け、回避が出来ないからすべての攻撃を弾く。

「増えただと」

「なんだこいつあたらねえ」

「全部弾きやがった」

防いだ時間で精霊を操り地面を揺らす。

「なっ」

「くっ」

体制が崩れたところで二人を切り殺す。一人になった敵を蹴り倒し喉を踏み潰す。

残り三人の内、すれ違いざまに二人切る。最後の一人も少し打ち合いの後、つばぜり合いの最中に炎蛇で焼いた。

残ったモルド伯爵に

「一緒に来てもらおう」

顔面蒼白の伯爵の首を掴んで、監禁されているだろう場所に伯爵を引きずって向かう。

途中出てきた兵は、『風刃』ですべて音もなく殺した。金庫を見つけるが鍵がかかっている。

「外せ」

「こ、ここにはない」

ベキッ

「ギャー」

左腕を折る。

「嘘をつくなわざわざ別の場所に置く理由がない。さっさと鍵を外

せ

「わかった、言うとおりにする。」

入り口付近にあった机から鍵を取り出して鍵を外す。

「これでいいのか？」

「ああ、ご苦労」

刀を振るい両足の腱を切る。

「ギツア……な、なぜ？」

「殺しはせん、ただ逃げられても困るのでな『流雷』」

そう言つて意識を刈り取る。

金庫の中は狭く真つ暗で、身動きも取れない。小人族は、そこに押し込まれていた。それはもう監禁ではなく拷問の域だ。

三人の内一人は、すでに事切れていた。小人族は、初めて見るから年齢がわかりづらいが、見た目は普通の幼い子供だとても痛ましい。他の子も小さいから性的な虐待はないが所々怪我をしている。金庫に押し込まれていて衰弱もしている。いそいで運ばなければ命にかかわる。

まず、首輪を外し窓から光の精霊術で信号弾を打ち上げる。すると、すぐにティリエルが、空から降りてきた。

「急いで運ぼう」

近くの村の宿に運びベットに寝かせイリヤに治癒術をかけてもらう。小人族を皆に預けて岩窟竜を呼びに行く。

「ストルさん二人は、助けることはできた。だけど一人はすでに・・・すまない」

「・・・そうか、いや君のせいではない。ワシもまたなにもできなかった。」

「他の二人もかなりやばい小人族の村つて南の奥だよな？」

「そうだ」

人間と亜人は中央と南部で住み分けている。

数千年前、人間と亜人对魔人の戦争があったそうだ。戦争は人間側が勝ち魔人は北に追いやられた。勝った人間と亜人は、最初はうまくいっていたが、大昔で他種族に対して無知なこともあり、すれ違いや争いが起き長い年月をかけて人間は中央に亜人は南に住むようになっただけだった。亜人達は、さらに細かく分かれていった。人間によって、亜人が多数いる国もあるが、それは中央より南に近い国々だ。

そして小人族の村は、そのな中でもかなり南の奥にある。おそらく国いくつかをまたぐことになるだろう。

「小人族の二人は、今帰ることに耐えられないだろう、だから一度俺の知っているところで療養させたいんだが」

「それは、ありがたいが、そこまで迷惑をかけるわけには」



「別に迷惑じゃないさ、それにストルさんは、俺に竜宝珠をくれただろ。それにあの提案も受けてくれたし、恩を返したい」

「ありがとう、それでどこで療養させるのだ？」

「元グーロム王国のお城だ、ここから一番近くて安全だ。ストルさんはどうする？」

「生き残った二人の顔を見たら一度村に戻ろう」

「わかった。落ち着いたら、俺の屋敷に移すつもりだから皇都のほうに来てくれ、皇国には話しておく」

「それでかまわない、本当にありがとうジンくん」

「それでだな、その、小人族の遺体はどうする、屋敷には置けなかったから宿の近くにもってきているが、俺のほうで葬ろうか、それとも連れて帰るか？」

「連れて帰らせてもらえるか、あれは親がいてな親元に帰してやりたい」

「わかった。」

## 異世界47日目

遺体をストルに渡し、小人族を城に運び、モルド伯爵の捕縛を命じる等、面倒なことがすべてが終わると。

俺の気分は沈み込んでしまった。今はベットで不貞寝している。

気付くと周りに女達が集まっていた。

ティリエルが

「どうしたのですか、お兄様？」

「ひとり助けられなかった。」

テツが

「それでも主は、二人を助けました。主だから出来たことです。」

「ふたりともボロボロだ。」

イリヤが

「ならば私が治します。」

「後遺症が残るかもしれない」

ソフィアが

「それでも命は助かりました。」

「心には傷が残る」

ミリアが

「ご主人様が癒せばいいのです。私たちも手伝います。」

「死んだ子には親がいた。」

レティーシアが

「今度こそ、助けないといけないな」

「でも他にも、まだ奴隷はたくさんいる。他国にもたくさんいる」

フェリスが

「お兄ちゃんなら、きっと奴隷をなくせるよ。お兄ちゃんにしかできなと思うんだ。」

「・・・そうだな、俺がやらないとな。そのためにもっと強く」

リリスが

「私たちも、強くなる、ジンを支えて、一緒に守るよ」

「ありがとう。これからは元王国領の大掃除だ。手伝ってくれ」

皆が

「はい」「はい」

### 36話 依頼の報酬

異世界58日目

「帰ってきたー」

リリースが叫んでいる。

ジンたちは、依頼を終わらせ久しぶりに皇都に戻ってきていた。まずは、ギルドに報酬を貰いに行くことにした。

受けた依頼は、

Aチーム	ランクA	岩窟竜一頭の討伐	5万ギル	無期限	モル
ド伯爵領					
Bチーム	ランクC	牛鬼五体の討伐	1万ギル	一月以内	元
王国領南部					
Cチーム	ランクD	ゴブリンの群れの討伐	4000ギル	二週	
間以内	元王国領の西街道付近				
Dチーム	ランクD	生熱の種の採取	30個	5000ギル	半
年以内	元王国領北部に生息				
Eチーム	ランクF	魔物五十匹討伐	2000ギル	一月以内	
ニビルの森					

ちなみに、期間については、期間がすぎるとギルドカードにカウントされなくなるので誤魔化しは出来ない。一応ギルドの支部から結果報告をする決まりだが、これは達成できなかったときにすぐに依頼を再張り出しするためだ。

岩窟竜の討伐依頼は、依頼人を征伐したので報酬は受け損ねた。

なので  
 ランクC 牛鬼五体の討伐 1万ギル  
 ランクD ゴブリンの群れの討伐 4000ギル  
 ランクD 生熱の種の採取 5000ギル  
 ランクF 魔物五十匹討伐 2000ギル  
 合計21000ギルになった。

特別依頼は

A・004 B・033 C・112 D・232 E・211  
 F・126

という結果だった

特別依頼の報酬は

Aランク⇨半金貨3枚  
 Bランク⇨銀貨1枚  
 Cランク⇨半銀貨3枚  
 Dランク⇨半銀貨1枚  
 Eランク⇨銅貨3枚  
 Fランク⇨銅貨1枚  
 なので

半金貨	12枚	12000ギル
銀貨	33枚	3300ギル
半銀貨	568枚	5680ギル
銅貨	759枚	759ギル
合計	21739ギル	

最後に素材の売り払いで

オオクロコダイル Aランク  
 オオクロコダイルの牙 200ギル 40個 8000ギル  
 オオクロコダイルの肝 600ギル 4個 2400ギル  
 ブルー・コブラ Bランク  
 ブルー・コブラの鱗 60ギル 120枚 7200ギル  
 ブルー・コブラの毒液 140ギル 瓶6個分 840ギル

合計18440ギル

総計 4100 + 21000 + 21739 + 18440 = 65279

持ち金 65279ギル

やっぱりAランクの依頼が潰れたのは痛いな。十一人の仕事としては、それほど額ではない。

次は、ギルドカードの更新だな。まずフェリスだがクレアさんのおかげでギルドランクが一つあがった。フェリス自身順調に成長している。

名前 フェリス 女 12歳 人間  
 ギルドランク F  
 能力ランク 総合D 気力E 魔力B  
 チーム 『世界を結ぶ者達』  
 称号 ジンの料理人 ジンの義妹

他の仲間も

名前 ミリア 女 20歳 人間

ギルドランク F

能力ランク 総合D 気力D 魔力C

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 ジンのメイド

名前 ジーク 男 21歳 人間

ギルドランク B

能力ランク 総合B 気力A 魔力B

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 一級騎士

名前 カイル 男 20歳 人間

ギルドランク C

能力ランク 総合B 気力B 魔力B

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 二級騎士

名前 レティーシア 女 17歳 人間

ギルドランク D

能力ランク 総合B 気力A 魔力C

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 ジンの女 皇女

名前 ソフィア 女 18歳 人間

ギルドランク E

能力ランク 総合C 気力C 魔力B  
チーム 『世界を結ぶ者達』  
称号 水の巫女 精霊術師 水災の魔女 ジンの女

名前 イリヤ 女 17歳 エルフ

ギルドランク E

能力ランク 総合C 気力D 魔力A

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 ジンのメイド 治癒術師

名前 リリス 女 17歳 人間

ギルドランク B

能力ランク 総合B 気力A 魔力B

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 ジンの護衛 熟練者

名前 ティリエル 女 15歳 龍族

ギルドランク E

能力ランク 総合B 気力B 魔力B

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 ジンの義妹 幼い銀龍

皆順調に力を付けている。

俺自身は

名前 ジン 男 18歳 人間

ギルドランク B

能力ランク 総合A 気力S 魔力B



チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 聖痕使い 精霊王の友人 救世主 英雄 8人の女に愛される男 奴隷の解放者 精霊術師

Aランクの魔物をはじめ多数の魔物を狩り力をつけた。今の能力ランクは、ラシード將軍とほぼ同じになっている。

「皆順調に力をつけているな、このままがんばろう」

「……はい……」

いい返事が返ってきた。実際皆、これから自分をどうやって鍛えるかどのスタイルを目指すか、この旅で大体の未来像が出来たようだった。

「皆お疲れ、今日は屋敷でゆっくり休もう」

「……はい……」

こっちの方がいい返事な気がする

屋敷に戻ると出迎えがあった。屋敷の使用人と小人の少女二人はわかるのだが、何故か以前ラウルの後始末をお願いした、師団長も来ていた。

まずは、小人の少女の二人が

「助けていただいてありがとうございます。わたし、キリといいま  
す。こっちは妹のユリです」

「ありがとうございます。」

可愛らしいお辞儀をしてきた。二人とも15歳らしいが見た目は10歳くらいに見える。二人とも健康そのものだ。

「よかった、元気よさそうだね。不自由はない？」

「大丈夫です。クレアさんもメイドさん達もよくしてくれます。」

「それならよかった。」

「あの、私たちは村に戻れるのでしょうか？」

「こら、失礼でしょ。」

不安そうなユリをキリが叱る。

「すぐには、無理だけど必ず村に戻れるようにする。ただ一つだけお願いがあるんだ。」

「なんででしょう?。」

「村に戻ったらすべての人間が君達を傷つけたようなやつらじゃないことを村に伝えて欲しいんだ。お願いできるかな?。」

「わかった伝える。それに、ここの人たちは、優しかったし。」

「ユリもう少し、言葉使いに気をつけなさい」

「でも、この人怒ってないし」

「それでもよ」

「別にいいよ。キリもそんなにかたくならなくてもいいよ」

「そういうわけには」

「まあ、無理強いはしないけどな。しばらくはこの屋敷でゆっくりするといいよ」

「はい」

次は師団長だった。そういえば名前知らないなどうしよう。

後ろのミリアがこっそり

「第八師団長のタッド師団長です」

「タッド師団長殿今日は、どういった用件で」

「アッシュ皇子からこれをあなたに渡すようにと」

差し出してきた袋には、金貨が数枚入っていた。

「これは？」

「モルド伯爵征伐の報酬と岩窟竜の退去の報酬　金貨十三枚です。  
お納めください。」

「こんなにいいのか？退去は3万だから征伐が10万ということになるが」

「お気になさらず、モルド伯爵の資産没収でかなり稼いだようですから」

「俺が働いただけこの国が潤うということか」

「ハハハ、そういうことになりますね。それでは私はこれにて失礼します。ああ、私のことは、タッドで構いませんよ。皇国にとってあなたは英雄なのですから」

「わかったよ。タッド」

師団長は、城の方に帰っていった。

「ようし皆、数日休憩したら、また旅に出るからな準備しておけよ」

「はい」

これからジン達『世界を結ぶ者達』は数ヶ月間、他国が集まるまで奴隷の解放に力を注ぐことになる。

65279 + 130000 = 195279ギル

持ち金 195279ギル



## 設定資料 (36話まで)

異世界58日目の段階で

### 【主人公の成果】

チーム 『世界を結ぶ者達』を結成。人数10人+テツ

ハーレム 八人

ソフィア・イリヤ・リリス・テツ・ティリエル・ミア・レティー  
シア・フェリス

グーロム王国を潰して、クイント皇国に大きくする。  
報酬として屋敷を皇帝から貰う。

お金 195279ギル

### 【人物設定】

主人公 ジン

前の世界ではやりたいたいことがなかった。そのため、異世界に来ること  
にあまり迷いはなかった。そして異世界に来ること生き甲斐を  
見つける。力は精霊界で精霊王に修行してもらった。(あと刀神に  
も)

能力

全精霊王との契約 ・すべての精霊を操れる

火・風・水・土・雷・光・闇がある

聖痕の発動 ・属性ごとにある 光と闇はできない

火Ⅱ炎王 風Ⅱ嵐帝 水Ⅱ水龍 土Ⅱ岩皇 雷Ⅱ雷神

神双流 刀神直伝の二刀流の剣術

契約破棄 大抵の契約は強引に破棄できる

## ハーレムヒロイン

ソフィア 精霊の巫女

精霊に使えているため聖痕を持つ主人公を信用した。村を救われたことと救われた時の精霊術を見て主人公に惚れる。精霊使いでもあり水の精霊魔法が得意。 落ち着いた少女で髪の色は水色。

装備 水の指輪

イリヤ エルフの治癒術師

高級奴隷として売られそうところをリリスと一緒にジンに助けられる。

ジンのご主人様と慕う。 マッサージが得意。 エルフならではの美貌を持つ 金髪で天然。

装備 ヒーリング・リング

リリス 生粋の冒険者 スピード型

戦闘奴隷として売られそうところをイリヤと一緒にジンに助けられる。

魔物との戦闘で危ないところをジンに助けられてジンに惚れる。

活発な少女 炎髪

装備 エストック（両手突き剣）

ティリエル 銀龍

牛鬼に襲われているところをジンに助けられる。 ジンをお兄様と慕

っている。

銀龍としては、幼く将来が楽しみ 年齢より幼く見える。 銀髪  
装備 ダガーを2本

フェリス 亡国の姫

一度すべてを失ったが、ジンの元で新しい人生を歩む。  
ジンとおにいちゃんと言って慕っている。 髪は緑色。

装備 ブースト・リング

ミリア できるメイドさん

元皇族付きのメイドだったが、ジンに恩返しをするためにジンのメ  
イドになる。

呼び方は、ご主人様。

装備 雷風の指輪

レティーシア 第二皇女

ジンの強さを気に入る。 姫というより騎士に近く付いた通り名が『  
姫騎士』

長い金髪で少しキリツとした、美人。 ジンをジン殿と呼ぶ。

装備 ロングソード

テツ 小太刀の少女

『鉄餓刀』から『黒龍刀・鉄』になる。 持ち主の邪魔になるため気  
力、魔力を持たない。

最近二刀に分かれることができるようになった。 黒髪でジンの前以  
外は基本無表情。 ジンに貰った銀の首飾りは宝物。 ジンのことを主  
と呼ぶ。

ハーレム 予備軍



クレア ギルド職員

ジンに興味を持っている。ジンに誘われて屋敷に住むようになる。  
短い黒髪と眼鏡で秘書っぽい女性。

アリシヤ 第一皇女 エルフのクォーター

小さいことを気にしている。ジンに、通話の出来る指輪を渡すなど積極的。レティーシアと違いしっかり皇女をやっている。

キリとユリ 小人

金庫に閉じ込められているところをジンに助けられる。キリが姉でユリが妹。キリは気が強く。ユリは気が弱い。二人とも奴隷時代の後遺症で軽い暗所恐怖症と閉所恐怖症。

小雪 精霊

ジンの子供？。ジンをパパと呼んで慕っている。

その他のキャラ

クルト

クルト・クイント クイント皇国の皇帝。レイシアの父

アッシュ

クイントの王子 今は元グーロム王国領の管理を任されている。

アイリス

アイリス・クイント クイントの皇妃

ゲオルグ

クイント皇国の將軍

ジーク

騎士でジンに仕えることを選ぶ

カイル

ジークの友人で同じく騎士ジンに仕える

アルベルト

銀竜。ティリエルの父親 戦って友になる。SSクラスの力を持つ。

ラシード將軍

グーロム王国の將軍だった。ジンの誘いに乗る。今はクイント皇国の將軍をやっている。Aランクの実力者。聖痕なしのジンと引き分けている。

ラウル

クイント皇国の第六師団長。ジンにボコボコにされる。

タッド

クイント皇国の第八師団長。

ガルダ

元ギルドマスター、今はギルド支部長

ミーシャ

皇国のメイド、変な方向に天然

レオン

皇国の騎士

レクト

ミリアの弟 元戦闘奴隷

オルム

村長兼ソフィアの保護者

コートル将軍

グーロム王国の将軍。死亡

### 【ギルドカード】

名前 ジン 男 18歳 人間

ギルドランク B

能力ランク 総合A 気力S 魔力B

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 聖痕使い 精霊王の友人 救世主 英雄 8人の女に愛される男 奴隷の解放者 精霊術師

名前 ミリア 女 20歳 人間

ギルドランク F

能力ランク 総合D 気力D 魔力C

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 ジンのメイド

名前 レティーシア 女 17歳 人間

ギルドランク D

能力ランク 総合B 気力A 魔力C  
チーム 『世界を結ぶ者達』  
称号 ジンの女 皇女

名前 ソフィア 女 18歳 人間  
ギルドランク E  
能力ランク 総合C 気力C 魔力B  
チーム 『世界を結ぶ者達』  
称号 水の巫女 精霊術師 水災の魔女 ジンの女

名前 イリヤ 女 17歳 エルフ  
ギルドランク E  
能力ランク 総合C 気力D 魔力A  
チーム 『世界を結ぶ者達』  
称号 ジンのメイド 治癒術師

名前 リリス 女 17歳 人間  
ギルドランク B  
能力ランク 総合B 気力A 魔力B  
チーム 『世界を結ぶ者達』  
称号 ジンの護衛 熟練者

名前 ティリエル 女 15歳 龍族  
ギルドランク E  
能力ランク 総合B 気力B 魔力B  
チーム 『世界を結ぶ者達』  
称号 ジンの義妹 幼い銀龍

名前 フェリス 女 12歳 人間  
ギルドランク F  
能力ランク 総合D 気力E 魔力B  
チーム 『世界を結ぶ者達』  
称号 ジンの料理人 ジンの義妹

名前 ジーク 男 21歳 人間  
ギルドランク B  
能力ランク 総合B 気力A 魔力B  
チーム 『世界を結ぶ者達』  
称号 一級騎士

名前 カイル 男 20歳 人間  
ギルドランク C  
能力ランク 総合B 気力B 魔力B  
チーム 『世界を結ぶ者達』  
称号 二級騎士

名前 クレア 女 20歳 人間  
ギルドランク C  
能力ランク 総合C 気力B 魔力C  
チーム なし  
称号 ギルド職員

【世界観】

数千年前、人間と亜人对魔人の戦争があった。戦争は人間側が勝ち魔人は北に追いやられた。勝った人間と亜人は、最初はうまくいつていたが、大昔で他種族に対して無知なこともあり、すれ違いやいざこざが起き長い年月をかけて人間は中央に亜人は南に住むようになっていった。亜人はさらに細かく分かれていき国や集落ができた。人間の国によつては、亜人が多数いる国もあるが、それは中央より南に近い国々だ。

通貨は

金貨一枚〓 10000ギル

半金貨一枚〓 10000ギル

銀貨一枚〓 1000ギル

半銀貨一枚〓 10ギル

銅貨一枚〓 1ギル

1ギル〓 約10円くらい

### 【登場した力】

闘気

気力によつて変動する。 身体能力の強化。 武器の強化。

魔術

魔力によつて変動する。 あらゆる現象を引き起こせる。

属性 風

『トルネード』 無数の風の刃で切り裂く

属性 火

『ファイア・ボール』 火球を飛ばす

『フレイム・バレット』 無数の小さな火球を飛ばす

精霊術

気力、魔力は必要ないが、習得が難しく、才能に左右される。

火・水・風・土・雷・光・闇の七種類がある。

火の精霊術 『炎蛇』 火の蛇を作り出して攻撃、『陽炎竜砲』 ドラゴンのプレスをイメージした熱線。もともと威力が高い、『炎爆』 爆音と衝撃で攪乱する

風の精霊術 『風刃』 鋭いカマイタチを作り出す、『風見鳥』 偵察用の鳥型の精霊獣を作る、『削嵐』 無数の風の刃で敵を削る

水の精霊術 『水翼』 大量の水を使うための前準備、『陸津波』 陸で津波を起こして押し流す、『水撃』 圧縮した水をぶつける、『斬水』 高圧縮した水を細く使って相手を切る

土の精霊術 『土壁』 土の壁を作り出す、『岩壁』 岩の壁を作り出す、『土鉄岩金壁』 土壁、鉄壁、岩壁、金剛壁を作り出す。『落とし牢』 落とし穴

雷の精霊術 『落雷』 カミナリを落とす、『流雷』 相手を気絶させる、『タケミカツチ』 槍状のカミナリに回転を混ぜすべてを貫く。

【魔物】

ランクA

ノワールサイ

黒い鉱石を纏ったサイ型の魔物。突進力と防御力はSクラス。

オオクロコダイル

ワニ型の上位の魔物。かなりの巨体で、傷つけることはできても止めをさすのが難しい。  
噛み付きは必殺。

ランクB

ブルー・コブラ

個体の戦闘能力より、その隠密能力が特徴。見つけることができれば、Dランクの冒険者でも倒せる

牛鬼

群れと連携が脅威。武器を扱える。個体はそれほど強くない。

Dランク

ゴブリン

圧倒的な数と繁殖力が特徴。個体は弱い。

Eランク



グリーングリズリー  
熊型の魔物。緑色の毛を持つ。普通の熊より大型で凶暴。あまり熊と変わらない。

バインドスネーク  
蛇型の魔物。獲物を縛って絞め殺す。

Fランク

ラビットドン

ウサギ型

ウサギが大きくなり凶暴化した。

ハイウルフ

狼を少し強化したような魔物。

魔物以外

岩窟竜

Sクラスの力を持つ。ストルは、長く生きていて古龍に近い力を持っている。

銀龍

SSクラスの龍の上位種。

### 37話 会合の前

異世界200日目

「た、助けてくれ」

さつきまで、奴隷の売買をしていた男が、今日の前で命乞いをして  
いる。

「金もやる、奴隷も解放するだから」

ザシユ

「うっ、あっ」

目の前の男は、首から血を流して事切れた。

「主殿」

ジークとカイルだ。二人は俺を「主殿」と呼ぶようになっていた。

「残りの奴隷商人は？」

「集まっていた奴隷商人の主要人物は、すべて殺しました。他の物は拘束しています。」

「苦勞さん。」

「これで元王国領のゴミは、大体片付きましたね。これからどうするのですか？」

「俺たちの、働きで元王国領が早く片付いて。他国の代表が少しずつ集まっているらしい、だからここにいる奴隷を解放したら、一度皇国に戻る。」

「了解しました。」

この二人もずいぶん力をつけたな、ここには護衛を入れたら100人近いゴミがいたのにそのうち半分を片付けてしまった。他の仲間も、ここ数ヶ月で力をつけた。魔物の大侵攻まであと160日しかない気合をいれていかないとな。

異世界205日目

皇都への帰り道、足にフェリスとテツを乗せて馬車に揺られているとレティーシアが

「ジン殿、前方に牛鬼の群れだ。馬車が襲われているどうする？」

「・・・助けよう」

特別クエストは、三週間ほど前に終わったので牛鬼を倒しても金にはならないが、見捨てるわけにもいかない。

件の襲われている馬車の護衛は手練のようだがたったの6人だった。牛鬼の数が多く馬車を守るのに精一杯のようで、効果的な攻撃がでないようだ。あのままでは、いずれ牛鬼側に流れが傾くだろう。魔物のほうが体力もある。

「先に行くぞ」

体に闘気を纏って飛び出す。すぐにスピードに定評のあるリリスが後ろに続く。牛鬼の数は、ざっと22体ぐらいだ。この世界にも少しは詳しくなった、だからわかるがこの数は異常だ。その異常性は一先ず置いておいて牛鬼を倒すことに集中する。

まず馬車から離れている牛鬼に向かって『風刃』を放ち四体始末する。残り18体

「テツ、二刀に」

テツを左右に持って、群れに突っ込む。そのまま馬車まで突き抜ける。抜ける間に三体の腹を掻っ捌く。残り15体

「あ、あんたは？」

馬車から女の子が話しかけてきた。

「通りすがりの冒険者だ。馬車の中に戻れ、もうじき俺の仲間が来る。」

そう言いながら目の前の牛鬼の首を刎ねる。護衛の人間も救援に勢いづき二体ほど倒す。残り12体

俺の仲間も到着し数が同等になる。そうなると後は問題なく討伐できた。一対一で後れを取る者はここにはいなかった。安全を確認しているとさっきの女の子が

「助けてくれてありがとう。わたしは、シャルル。あなたは？」

「俺はジン。冒険者だ。」

「そう、あなた達も皇都に行くのでしょ、一緒に行かないかしら。というよりうちの護衛に怪我人が出たから、ご一緒されてもらいたい、というのが本音だけど」

開けっぴろげな子だな。ただ発言に作為を感じるな、断りづらい状況をつくられている気がする。まあなにか問題があるわけでもないし別にいいか。

「いいよ、同行しよう」

「ありがとう」

まあ同行と言ってもつかず離れずに皇都を目指し野営のときに少し世間話をした程度だったが。

## 異世界207日目

皇都にたどりついて、すぐにシャルとわかれた後、仲間ともわかれ一人で城に向かう。

城に着き皇帝に会うために回廊を進んでいるとアリシャが駆け寄ってきた。

「久しぶり、アリシャ」

アリシャは挨拶を無視して、なんとタツクルしてきた。そのままジ

ンの体に抱き付き。

「ホントに久しぶり」

「指輪で話していたじゃないか」

「偶にだった」

「えっと、今から君の父親に会いに行くんだけど」

「わたしも一緒に行く」

「えっとね」

「行く」

「わかった」

アリシャは、見た目に反して押しが強い。可愛いのでつい許してしまふ。こういうのを甘え上手と言っのたろうか。

「クルト、邪魔するぞ」

「久しぶりだね、ジンくん。おや、アリシャも一緒なのかい」

「ああそこで一緒になった。」

「いつの間に仲良くなったんだい。アリシャは人見知りか激しいのだが」

「俺は、この世界で組織と繋がりが無いから話しやすいらしい」

「・・・あれ？君ってたくさん女いるよね？（ジンくん意外と鈍感なのかな？）」

「うん？まあ、この世界ではいるな。でも前の世界では、一人身だっただぜ」

「（そのせいかな？）えっとね。アリシヤはだねへブ」

クルトが何か言おうとするのを、アリシヤが手に持っていた本を投げつけて黙らせる。

「ジン、速く本題を話す」

「まあ、そうだな」

聞かないほうがよさそうだな。

「今度の他国の代表者との会合の方はどうなっている？」

「集まりは、順調だよ。ただどうやって魔物の侵攻を信じさせるかが問題だよ。みんな頭固いから」

「それついてなんだが、大侵攻が始まる場所を、見てきたんだが、大きな真つ黒い半球ができていた。」

「『無得と魔物の大地』か」

魔物の大侵攻のある場所は、大陸の中心にある半径数十キロに及ぶ

クレーターがある場所だ。

ここでは、作物は育たず、水もない。そして、魔物をいくら倒しても強くなれない不思議な場所。なので魔物以外の人間をはじめとする、すべて生き物はその場所を求めない。ゆえに、そこは誰の領土ではなく多数の魔物が生息する場所。そこが『無得と魔物の大地』だ。

「それを、見せられれば。兵を出す思うんだが。」

「どうぞやって連れて行くかだね。」

「いざとなれば力ずくで連れて行くさ」

「ジンくんそれは、ちょっと」

「そうならないように、祈っていてくれ」

「まあ、それについては、任せるよ。呼んだのは私だが、会合の進行はジンくんに頼みたいんだが」

「面倒だが仕方ないか、俺なら一応中立ってことにできるしな」

「そういうこと。あ、これこの前の奴隷商人を潰した報酬ね。結構貯まったんじゃない。」

渡された袋には、金貨が五枚入っていた。

「この報酬合わせて、たしか100万ギルくらいだな。」

「稼いだねえ」



「まあな」

小人族の子供を助けられなかった後から、俺は精力的に元グーロム王国領のゴミ掃除に励んだ。そのおかげで、かなりのお金が貯まったのだ。

その後、細かい打ち合わせをした後、皇帝の部屋をあとにする。

「ジン、がんばってるね」

「そうでもないさ、俺はやりたいようにやっているだけだからな。」

「あら、ジンこんなところで会うなんて奇遇ね」

つい最近どこかで聞いた覚えのある声が聞こえた。後ろを向くとシヤールが歩いてきた。

「ジンこいつ誰？」

「なに、この失礼な子供」

二人の機嫌が悪くなったような。

「黙れガキ」

「ほんつとつに口が悪いわね。あんたのほづがガキでしょ。」

なぜか二人は、お互いを睨み合っている。

「二人とも落ち着け、何故そこまで初対面でいがみ合えるんだ？」

「なんとなく気に入らない」

「仲いいな」

「よくない」

ハモったやっぱり仲いいな。

「えーと、こっちはアリシャ、それでこっちはシャルな」

とりあえずお互いの名前を教えてみる。

「シャル？」

「アリシャ？・・・そういうこと、ならここは私が引きましょう」

名前を言っただけで、争いは収まってしまった。分けがわからん。

「ジンあれには、気をつけてあれは商人、油断すると金を筆り取られる」

「まあそんな気はしていたがな。」

シャルは、会話がというより交渉が得意そうだったからな。俺たちにタダで護衛させていたしな。

屋敷に久しぶりに戻ってみると

キリとユリが、メイド姿で迎えてくれた。

「お帰りなさいませ。」

「二人とも別に働かなくてもいいんだぞ」

「いえ、働かざる者食うべからずですから」

「そうか、なにかご褒美をあげないとな」

「あのそれでしたら、その、お願いが」

「なにかな？」

「えっと、その〜」

「もう、ユリ。私が言うよ、えっとね、ユリが夜一人が怖いから一緒に寝て欲しいんだって、いつもは私が一緒に寝てるんだけどね」

「う〜、キリだって暗くて狭いところ苦手なくせに」

「うっ」

そうか二人とも奴隷のころのことがトラウマになっているんだな。

「いいよ。それじゃあ今日は一緒に寝よう。それに今二人の部屋は別々だったね。今度一緒にしてもらおうか？」

「いいんですか、お願いします。」

キリの良い返事が返ってきた。

ユリがそれを聞いて微笑んでいる。

「・・・あ」

キリが恥ずかしそうにしているので

「可愛いよ、キリ」

「あう」

ますます、赤くなった。

「キリずるい」

「ず、ずるくない」

「ハハ、じゃあ夜にね。」

夜になって寝室にいくとベッドの大きさが三倍くらいになっていた。ベッドを三つほどくっつけているのだろうか。

「な、なんだこれ」

近くのメイドさんに訊いてみると

「お嬢様方の希望でベッドと急遽大きくしました。」

「なんで？、大変だったろ」

「理由はこれからも女が増えるだろうから一度に一緒に寝られる人数を増やすため、と聞いています。大変でしたけど、その、頑張ればご主人様に添い寝させていただけると言われまして」

頬を染めながらそう言ってくれる。それ自体は嬉しいのだが。

俺はまったく聞いてねえぞ。

「まあ、俺としては、嬉しいけど今日は」

「はい、今日はキリ様とユリ様が添い寝されると伺っています。それにこれからは屋敷にいることも多くなるそうですし、わたしはその時にでも。」

「そう言ってくれて嬉しいよ、ありがとう」

「いえ、そんな」

「ああ、ご主人様となにしてるの」

「見つかってしまいました。それでは、ご主人様失礼します。」

そう言って同僚のもとに走っていく。

その夜、枕を持ったキリとユリが部屋を訪ねてきて、一緒に寝た。二人とも怖いのか俺の腕をずっと掴んだまま離さなかった。それが

少し心苦しかった。

ジンは二人を抱きしめて眠ることにいた。そのためささやかな胸が  
夜通し当たっていた。

### 38話 人間の王達

異世界208日目

人が治める国の代表達が集まる日がやってきた。

今ジンとクルト皇帝は、会合を行う部屋で各国の代表が来るまで、これからのことを話していた。

「大進行は丸一日、24時間、朝昼晩戦闘が続く。そんな戦い誰も経験はないし、前例もない。ジンくん正直私は不安だよ」

「それでも、やらないといけない。」

「問題は、長い時間と夜の暗闇だね。こんな長時間の戦いも暗闇の中の戦いも人間はしないからね。」

「時間は、部隊いくつにも分けて何度も入れ替えるしかないし、夜は何かで光を確保して防御重視しかないな。」

「そうなるだろうね。夜に頑張って攻撃して同士討ちなんてごめんだからね。」

コンコン

「ウルティア国の代表がお越しです。」

「ちょっと早いな」

「ウルティア国ならかまわないよ。通して」

入ってきたのは、美しい美女だった。

「失礼します。久し振りです、ねクイント王。お願いがあつて早めに来たのですが、そちらの方は？」

「彼は、冒険者のジン。我が国の英雄だ」

彼女の反応は、かなり意外なものだった。女性は、入り口から走りだしジンの隣まで来て。喜色に溢れた表情で

「あなたが英雄ジンなのですか。お会いできて光栄です。私は、ウルティア国代表カルディアと申します。よろしくのお願いしますね。」

とても一冒険者に対する態度だとは、思えない。

「よ、よろしくジンだ。（おいクルトどういうことだ）」

「（私にもわからん）カルディア殿、それをお願いとは？」

「実は、彼に会ってみたかったです。水の聖痕を、持つ彼に」

「ああそういうことね」

なんだ聖痕が珍しいだけか

「それだけではありません。先の戦争で水の精霊術で5万の奴隷を殺さずに無力化した、そのお手並み、その発想、その精神は、我が



国ではすでに伝説です。」

ここまで言われるとさすがに恥ずかしいな。

「何故そこまで？」

「我が国ウルティアは、湖と川の国、水というのは我が国では特別なんです。首都も湖の上にあるんですよ」

「湖上の都市か、見てみたいな」

「是非来てください。大歓迎します。」

「ありがとうございます。落ち着いたら行かせてもらいます。それで突然なのですが、カルディア様少し質問してもよろしいですか？」

「質問は構いませんが。様付けはお止めください。国の者に怒られてしまいます。」

カルディアが面白そうに笑って言う。

「では、カルディアさんのお国は今回の呼びかけをどう思っていますか？」

「我が国は、ジンさんに会えるので、嬉々として私を送り出しましたよ。土産話に期待するそうです。」

だめだ、参考にならない。

「え〜と、では他国の反応を、どう予測しますか？」

「そうですね。書状には世界の危機とありましたが、信じていないと思います。呼び掛けに応じたのは、クイント皇国が大きくなったからと旅費の八割を皇国が負担すると書状にあったからでしょうね。」

「つまり他国は、大いに不満であると」

「そうかと」

カルディアが少し気まずそうに同意する。

「まあ、それくらいは想定内の範囲だし何とかなるだろう」

「ふふ、楽しみにしていますね。」

しばらく会話を楽しんでいると、会合の時間が近くなり次々と代表者が集まってきた。

参加者についてクルトから、事前に説明を受けた。

まず最初に現れたのは、

ヴァーテリオン帝国、帝王のラインツ王だった。

「失礼する」

ラインツ王の最初の印象は、王の中の王、まるで霸王のような男だった。従者を一人連れてクルトの正面に座った。

ヴァーテリオン帝国は、クイント皇国がグーロム王国を吸収するまで皇国と同等の国力だった、今でも人の国では、二番目の国力を持

つている大国だ。そして数は少ないが竜騎兵<sup>ドラグーン</sup>を有する国でもある。この大陸で少数の部隊戦では、最強を誇っている。

次はリニヨン教国のカリウス教皇と聖女ウリアのツートップが入ってきた。

「失礼」

「失礼します。」

二人は、円卓の皇国よりの位置に座った。教皇は白を基本とした神官服を、聖女は同じく白を基本にした巫女服だ以前ソフィアが着ていたものに似ているが質はかなり違うのだろう。布が多くて正直動きずらそうだがこれでも軽装だったらしい。リニヨン教国は、この世界の宗教を司る国だ。人が治める国に対しては、すべての他国へ少なからず影響力を持っている。聖職者は、魔人を毛嫌いする者が多いらしい。今後の課題になりそうだ。

次はファールランド王国、国王のヘンリー王だ。

「お邪魔します。」

ヘンリー王は、これといって特徴はないのだが、彼は王だ、と思わせる不思議な男だった。ファールランド王国は、なんと魔人を受け入れている国だ。そのせいでリニヨン教国と仲が悪いらしい。入って来たときもカリウス教皇とヘンリー王が睨み合っていた。そしてそのまま教皇の対面から少しずれたところに座った。

次はカルモンド王国、国王のグスター王と王大使のエクス王子が入ってきた。

「・・・」

「失礼します」

グスター王は、無言で適当な席につき、エクス王子は入室の言葉を言っただけで席につく。正直カルモンド王国にはあまり良い印象を持っていない。グーロム王国との戦争の時に明らかにグーロム王国を援護する動きをとっていたからだ。国にいる奴隷の数も多い。それでも無視ができないのは、国内に二つの有数の鉱山を持っていて、そのおかげで経済力も軍の装備もかなりのものなのだ。しかしそれも今の国王になってから国力は下がっていつているようだ。

次はテンプル騎士国の、騎士王ジャックとその娘、『剣姫<sup>けんき</sup>』の異名を取るクリス王女が入室した。  
入り口でクリスが一礼して入室する。

騎士王と格好は普通の王と変わらなかったが、クリス王女はドレスと甲冑を合わせたような格好だった。

テンプル騎士国は、集団での戦闘能力が高い、軍人はすべて騎士道精神を持つ事が求められる国だ。礼節は、しっかりしているが、騎士が貴族階級なためか差別的な考えを持っていて、平民層を守られる対象として平民を下に見る傾向がある。それもジャック王になってからはその傾向は減ってきているようだ。

お次は、ヤマト国の国王キリガネとその娘、『舞姫』の異名を取るトウカ姫の二人だ。

「邪魔するぜ」

キリガネは不遜な態度で、トウカは一礼して入室する。キリガネは服装は着物を崩した着方をしているトウカは、着物を動きやすく改造した物を着ている。

ヤマト国は、武士の国で個人の戦闘能力が高い者が多い。Sランクの実力者が複数いる。この世界の武士は主君に仕える者と傭兵として世界をまわる者の二種類がいる。

そしてテンプル騎士国の騎士と傭兵は仲が悪い。騎士は傭兵を意思なき者達と毛嫌いし、傭兵は騎士を群れないと戦えないと嘲っている。

ヤマト国が座った場所はテンプル騎士国の対面だった。キリガネ王とジャック王は、視線を交わしていたがそこに悪感情は感じなかった。例えるならライバルに向けるような挑戦的な視線だった。二人の姫もお互いを見て微笑んでいる。どうやらトップ同士は敵対してはいないようだ。

次はクラフト商国のトランド王とその娘が入って来た。その娘が

「あれ、ジン？なんでここにいるの？・・・あんだそんなにえらかったの！？」

シャルルだった。

「娘よ、皇国でジンといえば、『英雄ジン』のことだとおもつのだが」

「うえ、そ、そういえばそうね。だからアリシャがあんなになついていたのね」

「よろしく、シャルル」

「え、ええよろしく」

「よろしくなくていい。ジンが汚れる」

アリシャとアッシュもやってきた。

「なんですって!?!」

「シャルル後にしなさい。ここは、各国の代表がきているんですから」

「・・・はい」

アリシャとにらみ合った後、しづしづシャルル達は、少し離れたところ座った。

クラフト商国は、商人の国だ。経済力が高くあらゆる国と商売をしている。交通の要所があり人が治める国だけではなく亜人の国に対してもそれなりの影響力を持っている。そして獣人の狸族りせくが多数暮らしている国でもある。

「なにが、あつたんだ？」

アッシュがさっきのことを聞いてきた。

「面倒だから秘密」

「ひ、ひどい。僕皇子なのに」

セリフとは裏腹になぜか嬉しそうだ。こいつ実はマゾなのか。

「あれ？ジンその指輪確かアリシヤのこんやへブツ」

確信を言う前にアリシヤに黙らされた。それにしても『こんや』か・・・指輪・・・まさか婚約指輪じゃないだろうな。考えても答えは出ないので考えるのをあきらめる。

これらの国にクイント王国をいれた9カ国が主だった国だ。発言は主にこれらの国がすることになるだろう。

その後は、小国が次々と入室し席を埋めていった。

すべての席が埋まった。その数21ヶ国の代表が集まった。この世界でこれほどの、国の代表が一同に会するのは、はじめてのことだ。

「すべての代表者が揃ったようですね」

すべての視線がジンに集まる。その中で、ジンは丁寧始める

「それでは、この世界を守るための会議を『世界防衛会議』を始めたいと思います。」



### 39話 世界防衛会議：一回目

「それでは、この世界を守るための会議を『世界防衛会議』を始めたいと思います。」

親しい国同士で会話をしていた代表たちも話すことを止めジンを注視する。

一瞬の静寂の後、ラインツ王が問いかけてくる。

「君が進行役をするのかね？」

「はい、そうです。」

カルモンド王国のグスター王が

「どこの馬の骨とも知れないものに任せて良いのですかな。」

「わたしは異世界から来ました。この場でもっとも中立だと自負しています。」

「異世界？君はふざけているのか？」

グスター王は呆れ半分、怒り半分といった感じだ。

「そんなつもりはありません」

「クルト皇なぜ彼を進行役にしたのだ？」

ジンが相手にしないでいると、今度はクイント皇国の責任を追及し

てきた。

それに対して面白そうにクルトが

「それはもちろん、この集まりは、彼が作ったものだからですよ」

「どういう意味だ？」

「つまりこの集まりは、ジんくんの主催なんですよ。」

「なんだと、クイント皇、我々を騙したのか!？」

「そんなつもりはない。わたしは呼びかけたただけだし、あなた方の旅費は、彼が稼いだお金で払うのですよ。」

「・・・帰らせてもらっ」

突然グスター王が席を立ち、出入り口へ向かう

「ち、父上お待ちください」

エクス王子が止めるが、グスター王はそのまま扉に向かう。しかし出入り口には、ジークとカイルが陣取っていた。カイルは抜剣すらしている。

剣の柄に手を置くジークが、

「主の話はまだ始まっておりません。席にお戻りください。」

「き、貴様らなにをしているのか、わかっているのか」

ジークはそれを無視して繰り返す。

「お戻り下さい」

「じ、この」

グスター王が怒りを爆発させようとしたところに、ファールランド国のヘンリー王が

「そう短気を起こさず、ひとまず席に戻って話だけでも聞いたらどうですか？」

「・・・ふん」

グスター王が不満そうに席に戻る。そこでトランド商王が商人の質問をする。

「クルト皇、先程ここに集まる者の旅費の八割をそちらの英雄殿が払うと言ったが、旅費といってもこれだけの数だ、かなりの額なはずだ。どうやって工面したのかな？」

「それはだね。私はグーロム王国の富裕層の九割の財産を没収したんだが、その成果のほとんどは彼の功績なんですよ。その報酬で旅費程度どうとでもなりますよ。」

これは実際に受け取った報酬とは、また別口だ。

「ほう、素晴らしいですな。しかし、私にはできそうにないですな」

たしかに、資産をあれだけ没収できたのは、グーロム王国が害国だったからだろう。

ラインツ王が、

「そろそろ本題を話してはどうだね。」

「そうですね。そうさせてもらいましょう。」

いよいよか、と皆がジンに今まで以上の意識を向ける。ジンが真面目な顔を作って告げる。

「皆さん『無得と魔物の大地』はご存知ですね。そこに、真っ黒い半球状の空間ができていることはご存知ですか？」

「いや知らないな」

ラインツ王が答え、他の代表達も口々に知らないと答える。

「きょうから152日後の正午に、その黒い空間から大量の魔物が現れます。世界を滅ぼすほどの規模の魔物の侵攻です。」

少しの間静寂が流れる。

その中、グスター王が

「何故そんなことがわかる」

「神にこの世界に送られる際に教えられました。」

「今度は神か」

グスター王が、吐き捨てるように言う。

神と言う言葉に黙ってられない国がある。  
宗教を司るリニヨン教国だ。カリウス教皇が

「軽々しく神を口にしてもらいたくないですな」

その声には明らかに怒気が含まれている。

「そう怒らないください。私が言った神は、私の世界の神です。  
あなた方のこの世界の神とは、なんの関係もありません。」

こう言われては、教皇も反応に困ってしまう。

そこに、ファールランド王国のヘンリー王が

「何故君が送られたのですか？」

「この世界を救うために」

「では何故別の世界の神が送ったのですか？この世界の神ではなく」

「神の事情までは知りません」

「この世界の神は何もしないのですか？」

「ファールランド王、何が言いたい？」

教皇が先程より明確な怒気を纏って質問する。

「いえ、やはり神は使えないな、と思っただけですよ。」

今まで黙っていた、聖女ウリアが辛らつな言葉を吐く。

「黙りなさい。王でありながら魔人などと仲良くするなど、万死にあたいします。この売国奴」

ファーランド王もこれに、怒りをにじませ

「魔人を恐れることしかできないあなた方になにがわかる」

「魔人は敵です。魔人の中には食人を好む種族もいます。人の身でありながらどうして仲良くできるのか理解できません。」

「それは、一部の種族に過ぎないし、長い年月をかけて彼らは自分を制御できるようになった。食人は、もう彼らに必要なものではない何故それを認めない」

聖女ウリアとファーランド王が舌戦を始めようとした瞬間

「  
」

二人から音が消失していた。

「  
」

驚いているようだが、やはり声は聞こえない。驚きが少しおさまった頃にジンが声を抑えて注意する。

「ここは、あなた方のための問答の場ではありません。お静かにお願いします。」

コクコク

二人は、なんども頷く。すると二人の空間に音が戻った。ジンは全く動いていない。

呆然とした聖女が

「今のはいったい」

「音を伝えるのは、空気です。私はその空気の動きを止めただけです。」

「その止めるだけが難しいと思うのですが。」

「お気になさらず。それでは、本題ですが……あなた方には『無得と魔物の大地』に軍を派遣していただきたい。」

「ふ、ふざけるな！、何故わたしが、貴様に従わなければならん」

まあ、軍を動かせといっただけはわかりましたとは、いえないだろうな。

「何も私に従え、と言っているわけではありません。王の責務を果たせ、と言っているのです。」

「クイント王国は兵を出そう」

「ウルティア国も兵を出します」

「しよ、正気が貴様ら」

うるたえるグスター王を見かねたラインツ王が

「ジン殿何か君の言葉を証明できる物はないのかね」

「確固たるものはないですね。」

「何かはあるんだね」

「ええ、まあ」

「それで構わない。教えてくれ」

「それでは、まずギルドカードですね。」

カードを取り出し、ラインツ王にのみ見せる。

「称号を見てください。あ、能力ランクはバラさないでくださいね。」

「・・・救世主だと（それにこの能力ランクは）」

円卓がどよめく。ラインツ王と周りの代表も驚いているようだ。

「はい、神様が私を救世主としてこの世界に送った証拠になるかと」

「たしかに、しかしこれだけでは、漠然としている。」

「そうですね。状況証拠としては、最近の魔物の異常な出現が上げ



られます。ノワールサイや牛鬼はもともと『無得と魔物の大地』近辺に多く生息していました。それが最近低ランクの狩場に現れ冒険者に被害がでています。」

この件に関わりのある、シャルルが援護する。

「私も皇都の近くで20をこえる牛鬼に襲われました。」

冷や汗たらたらのトランド王。

「娘よ、私は聞いていないのだが。」

「あはは、気にしない気にしない。」

「あまらずうちに、顔をそらすシャルル。護衛が少なかったのは、ケチっていたのだろう。」

「やつらが住処を離れたのは、黒い半球が関係していると思われる。状況証拠としては充分でしょう。」

「しかし、それではまだ弱い」

「ええですから、あなた方には、『無得と魔物の大地』と一緒に引っってもらい黒い半球を物的証拠として見てもらいたいです。お願いできませんか」

「・・・わかった。ヴァーテリオン帝国は同行しよう。すべての国で行くのか？」

「いいえ、主要国の、ヴァーテリオン帝国、リニヨン教国、ファー

ランド王国、カルモンド王国、テンブル騎士国、ヤマト国、クラフト商国、ウルティア国そしてクイント皇国の9ヶ国で行きます。皆様よろしいでしょうか？」

「クイント皇国は、問題ない」

「ウルティア国も問題ありません」

「世界の危機なのです。我らリニヨン教国は同行します。」

「クラフト商国も旅費を出してくれるなら問題ない」

「……つち……エクス見てきなさい。カルモンド王国からはエクス王子を出す」

「ファールランド王国も同行しましょう。」

次々に了承が得られる。思っていたより順調だ。しかし今までこれといって発現のなかった残りの二国が

「テンブル騎士国は断る」

「いやだね、ヤマト国は拒否するぜ」

「……何故ですか？」

「そちらは、こちらを騙し出入口を塞いでいる。あまりに不敬ではないか。」

「ここまで好き勝手されて、はいわかりました。なんて言えるかよ。」

「

どうやら武闘派の二国は、納得がいかないようだ。今まで黙っていたくせに、この言い様は、王として大丈夫なのか？

「必要なことでした。嫌だと申されても連れて行きます。世界の命運が懸かっています。力づくでも連れて行きます。」

「いいだろう。力づくでもというのなら。そうだなジン殿、我と手合わせをして我に勝てば我が国も同行しよう」

「それがいい。うちもそうするぜ。『英雄ジン』の力、見せてもらおうじゃねえか」

「……はあ、わかりました。お相手しましょう」

思わぬ形で二人の王との手合わせが決まってしまった。

## 40話 英雄VS二人の王

勝負は、闘技場を使うことにした。この場に來たのはクイント皇国とヤマト国とテンプル騎士国とカルディアとシャルルだけだ。残り  
は各々の部屋で待機している。

先にやるのは、騎士王だ。白と赤の全身甲冑フルアーマーに、両手剣だ。両手剣には、これといった装飾はない無骨な剣だが騎士王が持つのだナマクラではないだろう。ジンはテツを一刀モードで構える。

「本当に、精霊術も使っているのか？」

「ああ、構わない。というよりその言葉遣いが素かい？」

「そうだ。あれは、会議進行用だ。」

「まあいいや、そんなことは。さっさと始めよう。」

「殺し以外何でもありの単純ルールだな。クリスさん、トウカさん  
審判をお願いします。」

「はい」

「わかりました。」

「（テツこの戦いに切れ味は、必要ないから。初撃を受けたらすぐに二刀になって。）」

小声でテツに話しかける。

「【はい】」

「それでは、両者よろしいですか。それでは……始め！」

ジャック騎士王との試合が始まった。

一瞬で間合いを詰めた騎士王が剣を降り下ろしそれをジンが受ける。受けたところでテツが二刀に分かれる。余った一振りで騎士王に斬りつける。奇襲のこの攻撃を騎士王は難なく回避する。

「ふっふっふ、君が黒刀を二刀つかうことは、『陸津波』」知ってうえぶ」

お喋りしている騎士王に、大量の水をぶつける。一応威力は押さえである。

「喋っている時は、聞くものじゃないかね。」

「ならもういいか？」

「うん？ああ来たまえ」

ジンは、水浸しの地面に手をおいて

「『流雷』」

ビリビリビリ……バタン

トウカがジャッジをくだす。

「……ジンの勝利。」

「……お父様、……はあ」

溜め息をつくクレス。

「次は、父上ですね。無様はさらさないでくださいね。(ニコッ)」

トウカさん恐っ

「お、おう」

次はヤマト国のキリガネ王との試合だな。

キリガネは侍スタイルで武器はもちろん刀だった。

「始めてください。」

キリガネがとった戦法は、高速移動と連続攻撃だった。キリガネは、高ランクの気闘と独特の歩法でジンの周囲を縦横無尽に移動して攻撃を仕掛ける。ジンは、その攻撃を二刀と風による空間把握で最小の動きですべて防ぐ。

高速ゆえに短い時間の間に多数の攻撃をすべて防がれたキリガネの動きに隙ができる。この時キリガネが攻撃を誘っていたのかはわからない、何故ならジンは攻撃をせずにキリガネの足を思いつきり踏んづけた。そのままその足を精霊術で地中に埋め動きを封じる。

「んな」

焦るキリガネから距離をとりキリガネの周りに五つの火球を作り出す。

「一、殺しは無しだぜ。だ、だからまだ負けじゃねえ」

悪足掻きをするキリガネに、聞こえないように風を操作して、他の者に耳を塞ぐように伝える。

気絶している騎士王以外が耳を塞いだのを確認して。

「『炎爆陣』」

キリガネは全方位から衝撃と爆音を浴びて昏倒した。

クレスがジンの勝利宣言を行う。

「ジンの勝利。」

「捕まったところで素直に負けを認めていけば、みられた試合だったのに、まったく父上は」

爆音で飛び起きた騎士王が起きて早々

「あれでは、納得できんもう一度やろう」

ふざけたことを言っている。『流雷』の後でこれだけ動けるといふことは、あの鎧に何かあるのだろうか。

「お父様、何を言っているのですか？ど突きますよ。」

「まあ、いいですよ。」

「話が早い。いくぞ」

ジンは、テツを一つに纏め気を流し本気で、振るってきた両手剣に斬りつける。

カラン

両手剣がポツキリ折れ刀身が地面に落ちる。一度受けた時に不思議に思っていたが、やはりこの両手剣、ナマクラだったようだ。しかしこのナマクラで最初の攻撃のときにテツで受けた時に折れなかったことが凄い、よほど気をつまく流さないと一撃目のときに両手剣の方が折れていただろう。

「うっ、まいった。」

この言葉でこの騒動は一応の、決着がついた。  
そのあと

「いやあ、噂道りの腕前だね。あれで聖痕無しか、凄まじいね。」

「まったくだ。俺の攻撃をすべて完璧に防ぐたあ大したもんだ。」

口々に褒める二人に

「よく言う。二人とも本気では、なかっただろうに」

「あれ、バレてる。」

「そりゃあジャック殿の剣なんか、ナマクラもいいところだし、キリガネ殿も剣技だけでしたし」



「あの〜」

二人の王の娘が、不思議なものを見るような顔で

「何故父上たちは、仲良くお話ししているのですか？」

「お父様も会議が不満で勝負を始めたと記憶していますが」

「ああ、あれかあれは嘘だ」

「その通り、つまりやらせだ。」

娘二人の周り温度が急に下がった気がする。

「・・・何故そのようなことを？」

「あそこでごねたらジンと戦えると思ってな。」

「右に同じ」

「父上」「お父様」

「「ちょっとお話が」」

二人の王は物陰に連れていかれ。

「娘よ、どうしたのだ？」

「トウカどうした？」

「娘よその腕はそつちには曲がらなあああああ」

「トウカその手に持っているのは、なんぎゃーーーーー」

二人の制裁はしばらく続いた。

「ああ、テンブル騎士国は、『無得と魔物の大地』に同行する。」

「ヤマト国も同行する。」

「ジン殿申し訳ありませんでした。」

「ジン様すみません。父上がとんだ粗相を。」

「いや、気にするな。俺もそんなことだろうと思っていたから。」

「???どうしてそんなことが、わかったのですか?」

「俺の名前が出てからこの二人ずっと無言だったし、お互いを見て無言で相談していたみたいだからね」

「それだけですか?」

「ああ、だから確信があったわけじゃないよ。それはともかく今日出発するには中途半端な時間だな。出立は明日にしよう。」

「クルト他の王にも伝えておいてくれ。」

「わかった」

「それじゃあ、俺は屋敷に戻って仲間と打ち合わせをする。護衛の方は、クルトの方で頼む俺のチームは別のやつを守るからな」

「別？まあ君のことだ、きっと考えがあるのだろう。護衛の方は任せとくれ」

「じゃあクレスさん、トウカさん失礼します。」

屋敷に戻ると、ミリアが迎えてくれた。

「ご主人様、会合の方はどうなりましたか？」

「明日『無得と魔物の大地』に行くことになった。」

「それには、私たちも行つてよいのですか？」

「ああ皆で行く。あと亜人の子達も連れて行くからお前達はその護衛を頼む。」

「亜人の人たちもですか？何故ですか？『無得と魔物の大地』は決して安全なところではないですよ」

「一度目の侵攻は、人間の国だけで何とかなるが、二度目の侵攻は人間の国だけでは難しいんだ。だから亜人にも協力してもらおう。そのために現実を知る亜人が必要なんだ。もちろん無理強いするつもりはない、これから頼みに行く。」

「そういうことですか。でも、ふふ、ご主人様の頼みを断るとは思えませんがねえ」

意味深なことを言うミリアをおいてキリとユリのところに向かう。

コンコン

「キリ、ユリいるか？」

「ご、ご主人様!?!」

「ちょ、ちよつと待って」

中からドタバタ聞こえる。しばらくして、ピシッとメイド服を着たキリとユリが出てきた。

「どうされたんですか？」

「ちよつと話があるんだ。入っていいかな？」

「どうぞお入りくださいご主人様」

「どうしたの、ご主人様？」

二人に『無得と魔物の大地』に同行してほしいと理由と一緒に説明する。

「確かにちよつと危険なんだけどそこは俺たちが」

「いいよ」

「いいですよ」

「・・・そんなあつさりいいのかい？」

「ご主人様のお役に立てるなら。かまいません」

「私たちご主人様のこと大好きだし、その方が一緒にいられそうだし、問題なし」

「二人ともありがとう」

二人を抱きしめ頭を撫でる。

「ご主人様」

二人の甘えた声が耳元で聞こえ、頬をスリスリしてくる。小人の体は人の子供と変わらないのでお肌はすべすべでやわらかくて気持ちいい。三人でしばらく戯れた。

「もう行くのですか？」

「ほかの亜人達にも話しに行かないといけないんだ」

「我慢なさいユリ」

「キリ、ご主人様の服を放してから言おうよ」

「あう」

二人の頭をもう一度撫で

「それじゃあ行くね」

「はい」

ここ数ヶ月の仕事でたくさん奴隷が屋敷に集まっていた。屋敷にいる亜人のほとんどは、ジンが奴隷から開放した者がほとんどで皆ジンに恩を感じている者ばかりだったからだろう。他の亜人たちも快く同行を了承してくれた。

その夜ちよつとした事件が起きた。

「……ご主人様添い寝させてください」「」

夕食を済ませてジンが自室に戻ると屋敷で働いているメイドたちがあられもない姿で待ち構えていた。下着姿の者もいればネグリジェ姿の者もいるさすがに全裸の者はいないが、この状況はいつたいうことなんだろう?。

「ご主人様がまた、皇都を出ると聞きましたので」

「添い寝をさせていただく約束聞いていませんか?」

「添い寝をする格好ではないと思うのだが」

「ふふ、ご主人様がお望みならばここにいる12名ご主人様にこの身をささげます。」

「ご主人様、こんな格好で来ているのです。お察してください」

「わかった。みんなベットにいこうか」

その夜12種類の喘ぎ声が、ジンの寝室から聞こえてきた。

## 41話 二つの馬車の中

異世界209日目

「何故こうなった」

今ジンが乗っている馬車には、アリシャ、シャルル、カルディア、クリス、トウカ、ウリアと会議に参加した女性が勢ぞろいしていた。ジンは最初、自分のチームと一緒に行動するつもりだったのだが、クルト皇が

「君の発案なんだから君はこっちでしょ」

とこっち側に連れてこられたのだ、そしていざ出発して馬車の中を見渡すと・・・女しかない。

右隣にはアリシャが、左隣にはカルディア、正面にはシャルルが座っている。シャルルの両隣にクリスとトウカが座りウリアはトウカの隣だ。

「同乗を希望した。」

「私は、ジンさんと親睦を深めたくて希望しました。」

アリシャとカルディアは嬉しいことを言ってくれる。

「君たちは？」



他の女性に視線を向けると

「お父様にジンさんは婿候補だから会ってこい、と言われまして。」

「私も、父上に似たようなことを言われました。」

「あたしは、ジンがどれほどの器なのか見てこいって父が、まあ私は一度ジンに助けられているからそこんところはあんまり気にしていないけどね。」

黙っている聖女に視線が集まる。

聖女が顔を赤らめて否定する。

「な、なんですか。私は違いますよ。ただカリウスが他国の動きを見て。じゃあうちも一応、と押し込まれただけです。」

それは、他の娘とどこが違うのだろうか？

「そんなことよりアリシャさん、カルディアさん、ちょっとくつきすぎではないですか。」

「そんなことない。これでも控えめ」

「そうですね。隣に座っているだけですよ。」

「それで控えめって普段は、どうなってるんですか？」

もっともな発言だった。実際にジンと二人の間に隙間はなく肩には頭を乗せるという、かなりの密着度だ。他の姫も少し赤くなっ

る。

「見せましょうか？」

「いいです。遠慮します。」

トウカが話題を変える。

「そ、そういえばジンさんは、刀を使うのですよね？」

「ああ、一応な。」

「今度手合わせしませんか？」

「私も頼みたい。」

『剣姫』と『舞姫』から手合わせの申し出だ。

「いいよ。機会があればその時にでも」

「ねえねえ、ジンあの一角ってジンの仲間よね。あの一角って何を護衛しているの各国の代表じゃないよね？」

二度目の魔物の侵攻の時は、亜人にも手伝ってもらうことを話す。

「大侵攻ね〜いまだに信じられないのよね」

「私は信じますよ。」

そこで意外な発言をしたのは聖女ウリアだった。

「何故ですか？」

「主神オシリスから、世界に危機が迫っていることは、聞いていましたから」

この世界の神様が、

「・・・なんで公表しないのよ。」

「内容がわからなかったので公表できなかったのです。内容も解決策もないにただ危機が迫っています。などと言えません。」

「じゃあなんであの場で言わないのよ」

「あの時は判断に迷っていたのです。各国が一定の理解を示したので今お話したのです。」

「まあいいけど。でもこれでジンの言葉が裏付けがとれたね」

「この世界では神の存在が認められているんだな。俺の世界の神は、ほぼ人間に無干渉だったから神はいないことになっているのに。」

「そうなのですか？まあこの世界でも神の声が聞こえるのは、世界に一人だけで代々声を聞いた者が聖女をしています。」

「そういえば、リニヨン教国は教皇と聖女の二君主制だったね。よく成り立つね」

「教国は、内側を教皇が、外側を聖女が司っているんです。内政と

外交ですね。教皇は国民に支持されておりますが、聖女は神に選ばれます。だから我が国には両方とも大事なんです。」

「つまり教皇の方が実権を持っているけど、それも神の後ろ盾のある聖女あってこそその物つてことか？」

「よくわかりますね。たしかにそんな感じですね。」

感心したようにウリアが頷く。

その後もジンは各国の姫たちと交友を深めていった。

その頃、ジンの仲間達が乗る馬車では、

「まったくクルト皇帝は、余計なことをしてくれますね」

「「ご主人様と一緒にいられると思ったのにな」」

「お兄ちゃんと一緒によかったな」

ソフィアが悪態を付き。キリとユリとフェリスは落ち込んでいる。

「申し訳ありません。父上が」

「レティーシアはいいのよ。」

「そうですね。レティーシア様も本来ならあちらに乗ってもよかったですし。」

レティーシアが謝り、リリスとミアリアが擁護する。

「今頃お兄様は姫様方のお相手をしているのでしょね。」

「ご主人様を盗られた」

「私は主の物なのに」

ティリエルが馬車の中を思い浮かべ、イリヤとフェリスが不満そうに頬をふくらませている。

「また、増えるのでしょうか？」

「そうだろうねえ」

「しかたないですよ、わかっていたことです。」

「この話はやめましょう。あまり良い結果には、ならないでしょうし」

「そうですね。」

リリスがここぞと話題を変える。

「それじゃあ、最近あった良いことを報告して気分を盛り上げよう  
くはいますは、ソフィアさん」

「え〜！。え、えっと実はジン様とこの前川で水泳を教えてください  
ました。」

「どんなのを教えてもらったの？」

「くろーるといふ泳法で、これがとても速く泳げるんです。いつか海水浴に行く約束をしました。」

「「「いいな。」」」

「そしてナイスよ、ソフィア」

「はい次、フェリス」

「この前チーズケーキをお兄ちゃんと二人っきりで食べました。」

「チーズケーキ！食べてないよ」

「お兄ちゃんとの二人だけだもん」

「くううう次、テツちゃん」

「この前体の隅々まで綺麗にしてもらいました。」

「な、なんですって」

「小太刀の姿のときに」

「「「な〜んだ」」」

皆安堵していた。特にキリ、ユリ、ティリエル、フェリスの年少組はあからさまにホッとしていた。

「次、ティリエル」

「実は今お兄様と聖痕無しで空を飛ぶ練習をしているんです。それがやっと形になってきてるんですよ。」

「……ご主人様は、どこまで行かれるのでしょうか？」

「そりゃあ、この世界をまるまる守れるくらいでしょ」

「ねえねえ、どうやって飛ぶの？」

「薄い木の板を使うんです。足を板に固定して板と背中風を受け取ります。」

「ジン殿は、すごいな。一度乗せてもらおうかな」

「お兄様でも当分は難しいと思いますよ。」

「……そっか」「」

ジンの女達は、ジンのことで一喜一憂しながら『無得と魔物の大地』への道程を過ごした。

## 42話 黒い半球

異世界215日目

「『炎蛇・四首』」

四体の牛鬼を炎の蛇で燃やす。

「魔物の数が増えてきたな。」

「そうだね。どうするジン？」

リリスが隣から聞いてくる。

「俺が外で警戒する。『無得と魔物の大地』はもうすぐそこだし大丈夫だろ。」

ガサガサ

藪からブルー・コブラが出てきた。牙をかわしながらその首切り落とす。他に魔物がないのを確認してから採取をするためブルー・コブラに近づくブルー・コブラの死骸が黒い粒子になって消滅した。

「ジンこれって」

呆然とするリリスに

「たぶん、黒い半球と関係があるんだろう。リリスしばらくこれは内緒にしておいて。意識は統一しておきたいから『無得と魔物の大



地』で実際に見せたほうがいいだろう」

「わかった。仲間にも秘密？」

「説明が難しいから、黙つとく」

「わかった。」

## 異世界216日目

「ここが『無得と魔物の大地』か、本当に何も無いんだな」

そこには、草一本も生えていない荒地が広がっていた。荒地は中心に向かってゆるやかな下り坂になっていて、その中心には以前見たときより大きな黒い半球がある。皇都のお城が丸々入るくらいの大きさだ。

「なんだあれは」

王の誰かが呟いた。『世界を結ぶ者達』のチームメンバー以外は皆黒い半球に驚きを隠せないようだ。ジンを信じていた、クルトやカルディアですら驚いている。

「あれが、魔物の大侵攻を証明している。」

ジンは言いながら、光球を作り出し半球に近づけるが中を照らすことはできない完全な暗闇だった。

「確かに、あれは異常だ。近くまで行っても大丈夫なのか？」

「いや危険です。おそらくすでに魔物が少数出てきている可能性があります。」

「なんだと、それは本当か？」

「それを今から確かめに行く。王の方たちは、私の後を付いて来て下さい。」

「わかった。」

ラインツ王が代表して答える

先頭をジンが少し後方にジークとカイルが続き、そのさらに後ろに護衛と各国の代表それにジンが連れてきた亜人たちが続く。

ジンが100メートルくらいまで黒い半球に近づいたときに、異変は起こった。半球の一部が、ブクブクをふくれ大きな泡のような物がいくつかできる。

「なにが始まるんだ」

「ジーク、カイル少し下がって後ろのやつらを守れ」

「了解」

ジークとカイルが後ろに下がり臨戦態勢をとった頃に

パンッ

とすべての泡が破裂して中から100近い魔物が現れる。

ハイウルフと燃狼ねんろうとコールドオオカミと狼型の魔物ばかりだ。燃狼は、体が燃えている狼型の魔物だ。コールドオオカミは、冷気を纏った狼型の魔物だ。

後ろでは、驚きの声が出るが、ブルー・コブラの件である程度予想をしていたジンは、冷静に対処する。

まずは『風刃』で魔物を切り裂く、だがあまり減った気がしない。ここには、重要人物が多いリスクは極力省くべきだろう。

「土の聖痕を発動『岩皇』」

ジンは土精霊を纏い、魔物の群れを見る。

「『刺石槍』」

ガガガガガッ

魔物の群れがいる地面から石の槍が無数に突き出し魔物を串刺しにする。

石槍を逃れた魔物は、ジンが斬り殺す。漏れた魔物はジークとカイルが始末した。目算で100近い魔物が一分ほどで片付いた。

「すごいこれが聖痕持ちの力なんですか」

「父上との戦いなんて大したことなかったんですね」

「娘よ、なにもそこまで言わなくても」

「なんだあれは」

ファーランド王が指を指した先では、先程殺した魔物が黒い粒子になって消滅していつているところだった。消滅が終わった場所に魔物の痕跡は何もなく。ただ石の槍が突き出ているだけの大地が広がっていた。

ジンは各国の王の場所に行き。

「急いでこの場を離れます。あなた方も状況の理解はできたでしょう」

「ああ確かに、嫌というほどな」

『無得と魔物の大地』から出たところで、野営をすることにする。そこで今後どうするかを話すことになった。

「ヴァーテリオン帝国はジン殿の発案に同意する。兵も出そう」

他の国もそれぞれ同意する。問題はカルモンド王国だが、そこはエクス王子が約束してくれた。

「絶対に父を説得してみせます。」

「よろしくお願いします。」

「急ぎ皇都に戻り他の王達にも話を通そう。」

「時間がないな、軍の配置が難しい小競り合いをしている国が多い戦争をしている国もある」

「まずは、どの国にも武力衝突はやめさせる方針でよいですかな」

「同意する」

各国の王達は王らしく今後の話をまとめていく。

「ジン殿確認したいのだが後何日あるのかな？」

「144日間です。」

「すぐに動けるのは、皇国くらいだろうあまり時間はないな」

「そこら辺は、あなた方のほうが専門でしょう。」

「確かにそうだな。ジン殿は何かないかな？」

王がジンに意見を求めたのだ、ジンは確かな手ごたえを感じた。

「一つ提案なんですけど『無得と魔物の大地』の近くに拠点が必要だと思っんです。それを四つ作って攻略の要にしたい。」

「確かに物資のことや長時間の戦いを考えると拠点は必要だ。今までは、この辺りに拠点を作るとは、まったく意味がなかったがこれからは違う。改めてお願いするジン殿力を貸してほしい。」

「もちろんそのつもりだ。拠点は皇国に作ってもらいたい、いいか

「クルト皇？」

「かまわないよ。皇国はすでに準備を始めている。それぐらいの余裕はあるさ」

「頼もしいな。たださつきは144日間といたが。実際はもつと速く『無得と魔物の大地』に入って迎撃準備と魔物狩りをしたいから時間は本当にならない。だから今回の拠点は一つだけでいい」

「わかった。皇都に戻ったら正式に同盟を組もう」

「リニヨン教国とフェアランド王国もそれでよろしいかな？」

そう、問題はこの二つの国なのだ。この二つの国は、国境に兵が集まっており小競り合いが絶えないのだ。小国同士の戦争は、黙らせることができるが、この二つの国はそうはいかない。どうしても両国の了承が必要だ。

「仕方ないでしょう。あれを見せられては。我が国は、リニヨン教国は世界を守ることを第一に考える。フェアランド王国との一切の武力衝突は避けよう。」

「フェアランド王国も、兵を国内に引かせましょう。それが世界のためです。」

「ありがとうございます。」

なんとか両国の了承は取れた。だが和解したわけでもないのが問題。は以前残っている。そこでラインツ王がジンに質問した。

「ジン殿もし両国が拒否したどうするつもりだったのだ？」

「答えなければいけませんか？」

「私は、君の覚悟が知りたい。異世界から来た君がどれほどの覚悟があるのか」

「では、ラインツ王ならどうしましたか？」

「質問を返すのは感心しないな」

「これは失敬、そうですね。武力衝突はできないですから・・・  
トップを入れ変えます。」

当人のカリウス教皇とヘンリー王がギョツとする。

「あれを見てまだそんなことを言う愚物なら殺します。秘密裏に」

「・・・覚悟はわかったが、あまりそういうことは言わない方が  
良い。信用されなくなる」

「そうですね。それに排除は最後の最後です。それまで説得など手  
は尽くすつもりですよ。」

「ジンくんあまり無理しないようにね。聞いているよ君は戦争の時、  
人を殺して悲しんでいたんだろう」

「・・・この場で言うかクルト」

「僕はね君が心配なんだよ。いつか君が潰れてしまっんじゃないか

と」

「大丈夫だ、一人でやるわけじゃない。侵攻は三度あるんだまだまだ先はある。無理をするつもりはない。」

「わかった。その言葉を信じよう」

「帰ってから忙しくなる。俺は仲間のところまで休ませて貰うよ。」

そう言ってジンは話し合いの場を去った。



## 43話 ジンとギルド

異世界222日目

皇都に戻ってきて、最初にしたことはこれからについての会議だった。

結局皇都での会議で決まった連合軍内の分担は

クイント王国が、まとめ役と拠点設営を、

ヴァーテリオン帝国、テンプル騎士国、ヤマト国が軍部を、

クラフト商国、カルモンド王国、ファールランド王国が財務を、

ウルティア国、リニヨン教国がそれ以外を、

ジンは、冒険者ギルドを動かすように頼まれた。

これは、国ごとにそれぞれ準備をやってしまうと9カ国で帳尻合わせが必要になる。それでは、侵攻に間に合わないので仕方なく分担当したのだ。

ジンが冒険者ギルドを担当するのは、国がギルドに介入するのが難しいからだ。

冒険者は自由を重んじるため、国が介入するのを嫌うのだ。そこで立場が微妙なジンが担当することになった。

そのあと各国の代表達は、一度国に戻った。自国の状況の確認と軍の編成と人材を集めるためだ。これから設営する拠点に各国の武官、文官が集まるそれを指揮するのは、クイント王国の役割になる。

中立の意見を聞くためにジンが呼ばれることはあったが、基本的にジンは自分のことに専念することになる。

ジンは、自分の屋敷に戻ってまず、クレアさんに会いギルドについて学ぶことにする。

「ギルドマスターさえ押さえればいいのかな？」

「大抵のことは、ギルドマスター1人でいいですが、大規模に動かすなら支部長や有力チームにも話をしたほうがいいでしょうね。」

「チームにも、ですか？」

「はい、チームランクがAランク以上に限りませんが。」

「チームランク？」

「ギルドがつけるチームのランクです。ギルドカードの機能とは、関係ないのでギルド内ではしか通用しませんが」

「俺のチームは？」

「チームランクは、Aですね。一年たらずで、これは異例の早さですね。」

「皇国で有力なチームは、どこですか？」

「有力チームは、二チーム。ランクAの『ランスロウ騎士団』と『双獣の双炎』ですね。」

「その二チームと話せますか？」

「可能でしょう。ジンさんは気にしていないようですが、あなたのチームも有力チームなんですからね」

クレアは面白そうに笑って

「本当に名声に興味がないのですね」

「色々面倒だからな、名声は必要な分だけでいい」

「そうですね」

「クレアさん、頼みがあるんだが。できるだけ早くそいつらと話がしたい、なんとか出来ないか？」

「確約は出来ませんが、やってみます。」

「お願いします。」

「私も、ジンさんにはお世話になっていきますから。それでは、今からギルドに行ってきますね」

「今からですか？」

「早い方がいいですから」

もう少しで日が暮れる時間だ。

しかしできるだけ早く、と言ったのはこちらだ。ここは甘えよう。

「ありがとう、クレアさん」

クレアさんのおかげでギルドマスターと二つのチームのリーダーと会えることになった。

今ジンは、彼らが待つ部屋へ向かっているところだ。クレアさんにこれから会う連中のことに聞いてみる。

「そうですね。ギルドマスターは、元冒険者で自由を大事にするお方ですね。国を嫌っているわけではないですが、口を出されるのを嫌います。チーム『ランスロウ騎士団』は騎士道を重んじる方々です。冒険者と騎士を混ぜたような方たちです。『双獣の双炎』のリーダーは、獣人の姉弟でチーム名のとおり火を扱い得意だそうです。」

「お会いしたことがあるんですか？」

「いいえ。あつたことはありません。聞いたことがあるだけです。チームランクAって言うのは、本当に有名なんですよ。」

「ってことはうちも？」

「はい。超期待のチームです。つきました。どうぞぐゅっくりお話ください」

話している間に部屋についていた。

部屋で待っていたのは、どこかの王かと思間違えそうなほどの威厳を備えたギルドマスターと騎士風の男が三人と獣人の男女だ。獣人の二人はどうやら狗族くそく、犬の獣人のようだ。ギルドマスターが出迎える

「ようこそ『英雄ジン』」

「どうも」

「面倒なことは省こう黒い半球のことだね」

知っているのか！各国の代表すら知らなかったのだぞ

「……………」

「私はこれでもギルドマスターだ。そしてギルドはもっとも情報が集まりやすい場所だ。これくらいは簡単だよ。ちなみにこの場にいるチームのリーダー格の者は、実物も見ている」

この世界に来てからここまで先を行かれたのは初めてだな。

だが、お話は始まったばかりだからこれから本番だ、と思っていたら

「我々ギルドは協力しない」

「なっ、なんだと!?!」

「こちらの二つのチームリーダーも同意してくれた。」

「……………何故だ?」

「ギルドは国がすることに介入しない、そして国も必要以上にギルドに介入しないこれは昔から決まっていることだ」

獣人の姉が

「わたしたちは、国という組織を信用していない。クイント皇国以外はまだ奴隷をつかっている。そのような国に助力するつもりはない」

騎士風の男の一人が

「冒険者とは自由なのだ、国の駒になるわけがないだろう」

「そのとおりだ、我々冒険者ギルドは冒険者の自由を守るため。国に対して助力はしないこれが我々の総意だ」

ブチッ

この瞬間ジンの中で何かが切れた。

「言いたい放題言ってくれるな、おっさんちょっと耳が早い程度で天狗かこの野郎」

ジンのあんまりな口調にこの場にいるすべての人間がギョツとする。

「自由ってのは、責任を果たした者だけが与えられるものだ。お前の言う自由はただのわがままだ」

「わ、わがままだと」

「だいたい、自由も何も世界がなくなればそんなの関係ないんだよアホが」

この時のジンは、この世界に来てから200日以上この世界のために動いていた。前の世界の快適な暮らしを捨ててだ。ジンは、奴隷の解放、元王国領のゴミ掃除とずっと働いていた。そして積もり積もったストレスが冒険者どもの妄想を聞いて一気に爆発したのだ。

「それに奴隷だあ、こっちが頑張ってグーロム潰して奴隷解放に勤しんでいたっていうのに自由だなんだと、ほざいているやつが、奴隷をつかっているから信用できないだあ？。ならてめえが奴隷解放しろってんだよ。」

獣人の女は少し気まずそうに顔をそらす。

「国の駒になるわけにはいかないだあ。しっかりとした意思があれば駒なんてならないんだよ。駒になることを気にしている時点であんたらは、駒以下だ。」

騎士風の男は、口をポカンとあけている。

「ああ〜なんか馬鹿らしくなった。世界見捨てちゃおうかな〜」

「ジ、ジンさん正気に戻ってください。あなたにもこの世界で守りたいものがあるでしょう」

「別に俺の仲間だけなら世界ごと守る必要ねえもん」

「・・・こ、こんなジンさん初めて見ました。ってそれどころではありません。ジンさんお願いですこの世界を守ってください」

「でもさあクレアこいつら世界が滅んでも関係ないって言ったんだぜ。」

ここでジンは核心を言った。ジンからすれば呆然としている彼らの言葉は、世界が滅ぼうが知ったことではない国が勝手にやるだろ、と言っているようなものだ。ジンは、すべてを守るうとしているつまり彼らのことも守る対象だった。その彼らが別に滅んでもいいとあったのだ。ジンの怒りはもっともなものだった。

「それでもお願いします。ジンさん私を助けてください」

クレアの真摯な言葉にジンが正気に戻る。

「クレアさん・・・わかったよ。まあすでに国は巻き込んでしまっているんだし仕方ないか」

正気には戻ったが、ジンは今も蔑んだ目でギルドマスターとチームリーダーを見ている。普段向けられなれない侮蔑の視線に耐えられずに獣人の弟のほうか

「そ、それでも、人間の王たちが奴隷を容認している事実が変わりません」

「なら奴隷制度をなくしてやろう。それで問題ないな。じゃあ今からお前こつち側な」

「うえ、な、なくす、？奴隷制度を？」

「そうだ、俺がなくす奴隷制度なんてムカつくもん絶対なくしてや



る」

「君は国の使いではないのか？」

これが彼ら冒険者側の一番の失敗だ。

彼らはジンを国の使いとして見ていた。しかし、ジンはただ頼まれたから来たただけだ。この部屋の中で正しくジンを見ていたのはクレアだけだった。

「当たり前だボケ。ああ、真面目に話す気が失せたから、今から言うことに黙って領けよ。あんたらには大侵攻に参加してもらう。いいな？」

「な、それは……」

彼らがすぐに領けないでいると。ジンはこの部屋の空気すべてを支配して音を消した。

そして、この部屋にいるクレア以外の人間は、今まで感じたこともない目の前に壁があるかのようなプレッシャーを部屋の入り口にいるジンから感じていた。ギルドマスターとAランクチームリーダーたちは、殺気は含まれていないそのプレッシャーに死の覚悟し、圧倒的な実力差を実感していた。

「わかったか？」

「……わかった。ギルドは協力する」

「それでいい。それじゃあほかの国のギルドにも話を通しておいてくれ、おっさんならできるだろう。もしふざけたことをしたら消すからな」

そう言ってジンは部屋をでた。これをギルドマスターチームのリーダーたちも本気だと理解できた。

こうして、ギルドとの関係は、最悪の状態から始ることになった。

「よかったですか？ジンさん」

「あゝ～実はあんまり良くないけど。アッシュに丸投げすることにした。ムカついたから仲間と侵攻までのんびりすることにするよ。」

「それがいいと思います。ジンさんにも休日は必要です。」

「意外だな。幻滅するかと思ってた」

「前からお体が心配になるほど頑張っておいででしたから」

「そうだったかな？」

「はい、ギルドの方は、任せてください。」

「それでは、お言葉に甘えます」

クレアはもう一度、部屋の中へ。ジンは屋敷へと戻った。

## 44話 婚約と和解

異世界229日目

アツシユに、ギルドとの連携を頼んだ（押し付けた）後、城内を歩いていると、アリシヤに見つかった。前から思っているのだが、もしかして待ち伏せされてるのだろうか。

「ジン、一緒にお昼食べよ。」

「いいよ」

挨拶などをすつとばしたアリシヤの申し出をジンも快く承諾する。

アリシヤの部屋で食べることになり、アリシヤの部屋に向かう。

その途中で見覚えのない禿頭の男とすれ違った。その禿頭の男に何故か憎しみと殺意のこもった視線を向けられた。

部屋に着いてからアリシヤに聞くと

「ジン、それはちょっとひどい。あれはラウル」

「ラウル？ああ、あの身の程知らずか、髪切ったんだな。」

「・・・ジンが髪の毛を燃やしたんだよ」

さすがにアリシヤもラウルを哀れに思うが、よく考えたらあんなの

どうでもいいので、これからやることに気持ちを切り替える。

「ジン指輪は、つけてる？」

「もちろん」

「ありがとう。実は今日は私の誕生日」

「えっ、ごめん知らなかった。」

「気にしない。ただお願いがある。」

「なんだい、今なら大抵のお願いは聞くよ。」

「椅子に座って、私の手を握って目を閉じて欲しい。」

「わかった。」

アリシャに対する申し訳なさのため、ジンは奇妙なお願いをあっさり聞いた。

椅子に座り目を閉じた。

そのまま十秒ほど待つと指輪が熱くなってきたと思ったら膝にアリシャの掌を感じた。

チュッ

驚いて目を開くとアリシャの唇がジンの口に触れていた。

普段無表情のアリシャが嬉しそうに笑顔を見せる頬は少し赤い。

「契約完了」

「契約？」

「うん、婚約」

「こ、婚約？・・・何故こんなやり方を？」

「私は公務でジンの傍にいられないから。ジンは、契約の破棄ができるんだよね。もし嫌なら破棄して、嫌じゃなければ・・・キスして」

チュツ

アリシャを抱きしめてこちらからキスをする。

「嬉しい」

アリシャは、静かに喜びを言葉にする。

「ジン、一つやりたいことがある。」

「なんだ？」

「ギルドに連れてって」

今のジンには何気にハードルが高い。しかし今日はアリシャの誕生日という事なので。連れていくことにする。

「わかった。一度屋敷に寄るけどいい？」

「一応テツを連れていくためだ。」

「かまわない」

「それじゃあ、行こうか」

屋敷に戻ると

「お帰りジン」

「お帰りなさい、ジンさん」

キリとユリが出迎えてくれる。

「そちらの方は？」

「彼女はアリシャ、この国の第一皇女だよ。」

「こ、皇女様、は、はじめまして」

「第一皇女？にしては小さいね」

「キリ失礼だよ」

「わたしエルフのクォーター、何故か成長が遅い」

「なんだか私たちがみたいです。私は小人族なんですよ。」

「おかげでジンに子ども扱いされがちなんだよねえ」

「親近感がわく」

「私たちいい友達になれそうですね。」

三人娘はすぐに仲良しになってしまった。

それにしても知らず知らずの内に子供扱いしていたのか、これからは気を付けよう。

「ジンお願いがあるの、私たちギルド登録がしたいの」

「したいんです。」

「・・・なぜだ？俺はストルに無事に村に帰すと約束している。あまり気が進まないんだが」

「その、ただジンさんと一緒にいたくて」

「ダメ？」

「うん」

「別にいいと思う。屋敷に閉じ込めるのはどうかと思う」

アリシャがキリとユリを擁護した。

確かにアリシャが言うことも、もっともだ。ここは二人の意思を尊重しよう。

「わかった。ただ当分は外に出るときはランクA以上の人と一緒な」

「はい」

その後テツを探してからギルドに向かう。

ジンがギルドに入るとそこに静寂が生まれた。

酒を飲んでいたり男たちが近づいてきた。一目で酔っているのがわかるほど顔が赤い。

「てめえか、俺たちの自由を奪おうとしている英雄様ってのは」

「さあな」

男の一人がジンの肩を掴む

「しらばっくれんじゃねえぞ、調べはついてんだよ」

「なら最初から聞くな、面倒なやつだな。俺は今ギルドのことで機嫌が悪い文句があるやつは全員かかって来い。」

「上等だ。全員で袋叩きにしてやる。」

ギルド内の人間のほとんどがその場に立ち上がった。

ジンは冒険者たちを見渡し

「ギルドマスターに言った言葉をそのまま送ってやる。自由ってのは、責任を果たした者だけが与えられるものだ。お前の言う自由はただのわがままなんだよ」

男たちが一斉に飛び掛ってくる。



「『竜巻』」

ジンとキリ達を囲むように竜巻が発生した。近くの者は宙に巻き上げられ、離れている者は吹き飛ばされて壁に叩きつけられる。竜巻が消えると巻き上げられていた、男達は平衡感覚がなく受身も取れずに地面に叩きつけられた。

ジンは悶えている男を踏みながら受付に進み

「登録がしたいんだけど」

「ひっ……えと、その」

すごい怯えようだな。少し傷つく

「あー、女の子には手荒なことはしないから」

「は、はい、すみません。どうぞこちらに」

三人の登録は滞りなく終わった。

名前 アリシャ 女 19才 人間

ギルドランク E

能力ランク 総合C 気力D 魔力B

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 皇女 エルフのクォーター ジンの婚約者

アリシャは、何故か満足気だ。

名前 キリ 女 16才 小人族

ギルドランク G

能力ランク 総合E 気力C 魔力F

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 ジンの娘

名前 ユリ 女 16才 小人族

ギルドランク G

能力ランク 総合E 気力C 魔力F

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 ジンの娘

「私達ジンの子供じゃないよ!？」

キリとユリが叫んでいる。それにしても本当に子ども扱いしていたんだな。

「ジン殿」

キリとユリを見て和んでいるところに不愉快な声が聞こえた。

「・・・なんだ？」

無視しようかと思ったが、アリシャ達の前だから返事だけはした。

「この前は申し訳なかった。」

顔を向けるとそこには頭を下げる『ランスロウ騎士団』のリーダー格の三人がいた。

「でっ」

我ながら扱いが酷い。

「私のチームは元グーロム王国の騎士だった者達ばかりです。」

突然の身の上話だ、これには面食らう

「我々は、国のやり方についていけず国を捨てました。自分たちは正しい道を選んだと昨日まで思っていました。」

チームリーダーは、決意を込めた顔をこちらに向け

「しかし、それは間違いでした。我々は、国民を見捨ててただ逃げただけだと、ジン殿の言葉で気づきました。ですから、我々は国民を救ってくれたジン殿の力になりたいのです。お願いします。我々に世界を守るための戦場をお与えください。」

大人三人が頭を下げてきた。彼ら騎士にとって頭を下げることはそう軽いことではない。ジンは彼ら認めることにした。

「・・・わかったよ。この前のことは、水に流す。ただ今の責任者はアッシュ皇子だ。まあ、口利きぐらいはしよう」

「ありがとうございます。」

また頭を下げるチームリーダー

「それは止める。あんたの方が年上なんだからな」

「そうだな、わかった。ところでジン殿、友好の証にギルドカードを見せあわないか」

「まあいいが」

「それでは、我々から」

名前 カロルド 男 33才 人間

ギルドランク S

能力ランク 総合S 気力S 魔力S

チーム 『ランスロウ騎士団』

称号 特一級騎士 剛槍 超越者 到達者

名前 アイマイン 男 30才 人間

ギルドランク A

能力ランク 総合A 気力S 魔力B

チーム 『ランスロウ騎士団』

称号 一級騎士 到達者

名前 ヤッシュ 男 27才 人間

ギルドランク A

能力ランク 総合A 気力A 魔力A

チーム 『ランスロウ騎士団』

称号 一級騎士

「剛槍？」

「あれ知らないかい。Sランクになったら、ユニークな称号がつき易いんだよ。」

「そうだったのか、それじゃあ俺のだな」

名前 ジン 男 18歳 人間

ギルドランク A

能力ランク 総合S 気力SS 魔力A

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 聖痕使い 精霊王の友人 救世主 英雄 11人の女に愛される男 奴隷の解放者 精霊術師 準貴族 超越者

「き、気力、がダブルSだって。君もSランクじゃないか。」

まあ驚くわな。

「そんなに驚くなよ。」

「ユニークな称号が多いですね。」

「これに、さらに精霊術があるとは」

ヤッシュとアーメインも驚いているようだ。

「なあアリシャ、『準貴族』ってもしかして」

「皇族との婚約の副産物だと思う」

「もしかして結婚したら皇族？」

「もちろん」

王侯貴族か、なんだかドロドロしたイメージしかないぞ。

「まあいいか、じゃあな『剛槍のカロルド』俺は屋敷に戻るよ。三日後ぐらいに城に行ってくれ、話は通しておくから」

「わかったよ『英雄ジン』」

## 45話 からあげ

異世界242日目

「お兄ちゃん、何か食べたいものはないですか？」

フェリスが、膝の上から尋ねてきた。

「そうだな、からあげってわかる？」

フェリスは首を左右に振って

「わかりません。どんなのですか？」

「えっと確か鶏肉に下味をつけて小麦粉を薄くまぶして油で揚げたものかな？」

「お兄ちゃん一緒に作りましょう」

「いいよ。でも急にどうしたんだ？」

「その、甘えるなら今かな」と

お料理が甘えることになるところがフェリスらしいな。

「それじゃあ、お買い物に行こうか」

「はい」

元気のいい返事が返ってきた。

今ジンとフェリスは、以前ハンバーグを作ったときに来た肉屋に来ている。

「いらっしやい、この前はすみません」

「別にいいよ、なあフェリス」

「はい。あの後いっぱいお兄ちゃんに優しくしてもらいました。」

「今日は鳥肉を買いに来たんだが、何か良いのはあるか？」

久しぶりの前の世界の料理の再現だ、良い物で作りたいと思ったのだが

「鳥肉かい、融通してやりたいんだが、本当に今は良いのがなくてなあ。すまん」

「何かあったのか？」

「いやね、お国がどうも買い占めているらしくてなあ。ただでさえ鳥肉の類は、他の肉に比べて供給が少ないんだよ。獲物が空を飛ぶからな。」

「そうか、ちなみにここら辺で一番いい鳥型の魔物はどこにいるか知っているか？」



「それならノーバル山のフリールバードだな。」

ノーバル山には、一度行った事がある。ティリエルの父が住んでいる山だ。アルベルトにも会いたかったからちよつどいい。

「よし、フェリス、ノーバル山に行こう。」

#### 異世界244日目

「お兄ちゃん、すごい行動力です。」

「いいじゃないか、どうせ暇だったし。」

ジン達は、ノーバル山にやって来ていた。メンバーは、ジンとフェリスとティリエルとテツのだけだ。これは、移動に空を飛ぶためティリエルに乗れる定員がフェリス一人だけだったからだ。

「お兄様、お父様に会っていくのですか？」

「帰りにな、これからの事とか色々話したいからな」

「主、そろそろフリールバードの生息地だから、刀になつとくね」

頭上から声が聞こえてきた肩車をしてやっていたのだ。

「ああ頼む」

そついうと小太刀が前に落ちてきた。それをつかみ腰に挿す。それ

と同時に、風による探知を拡げる。

「見つけた」

「何処ですか？」

「あっち」

指を指して方向を教える。

「やってみる？」

「やります！」

返事と共にティリエルが銀龍に姿を変え宙を舞う。

以前乗せてもらった頃に比べ姿を変える時間が短くなった。それに空を飛ぶ姿は軽やかで優雅だ。

ティリエルは、ここ数ヶ月の特訓で、自分にしかない飛行能力に磨きをかけた。

速度、体力共にかなりの上達だ。

現にティリエルは、素早くフリールバードを捕捉してすでに戦闘に入っている。

フリールバードは、風を操る怪鳥だ。大きさは今のティリエルとあまり変わらない。

ティリエルは、フリールバードのカマイタチや嘴を回避して背後を取る翼を掴む。そのまま降下してフリールバードを地面に叩き付ける。そこを、フェリスが

「魔の風よ、鋭利な刃となりて、我が敵を切断せよ。ウインド・カッター。」

風の刃で首だけ綺麗に切り落とす。フェリスは精度と威力そして多様性を目指した。

得意分野とはいえ、Bクラスの魔物に危なげなく勝利した。ジンは年少組の成長に、胸が熱くなった。

しかし、感動に浸るのはここまでだった。こっちに、フリールバードの群れが接近していた。

ジンは背中ボードを地面に下ろす。

ボードは、テツに合わせて黒を基本としたカラーリングだ。これには、『浮遊』と『障壁』の魔法がかかっている。魔力を通すことで宙に浮くことができる。さらに風の精霊術を合わせて空を飛ぶのだ。

「ティリエル、フェリス数が多いから後は俺がやる。」

「はい。」

この飛び方は、浮遊に精霊術を使用しないので空にいる時も精霊術が使えるのが利点だ。

そこからは、ジンの高空戦の訓練の時間になった。空を舞いながら炎を雷を放ってフリールバードを打ち落とす。戦闘が終わる頃ジンの高空戦はある程度形になっていた。

地に落ちたフリールバードはフェリスとティリエルが『採取』で鳥肉を手に入れていた。

ちなみにこのボード、ただの木の板に魔法を刻むことがほとんど無いため、特注になってしまい、五万ギルもした。

百万　―　五万〃九十五万ギル

「お兄ちゃん大漁ですね。これだけあればいろいろ試せますね。」

「そうだな。数ができたらアッシュに持って行ってやるか、ギルドのこと押し付けてしまったからな」

その後、アルベルトに会ってから皇都に戻った。

このとき、アルベルトと一悶着あって少々地形が変わったがそれは余談だ。

異世界247日目

フェリスの唐揚げは絶品でした。

今は城のアッシュに、お裾分けに来ていた。

フェリスとアリシャ（城門で待ち構えていた）を連れてアッシュの部屋に向かう。

「アリシャよく来るのがわかったな」

「婚約指輪の力。居場所がわかる」

そんな隠し機能が

「どつやるんだ？」

頬を染めて

「ひ、秘密」

すげえ気になる。

アツシユの部屋に着いた。

「アツシユ差し入れだ。唐揚げっていう俺の世界の食べ物なんだが」

「ジン久しぶり、ありがたく頂くよ。」

アツシユの部屋には、書類の山ができていた。

「大変そうだな？」

「・・・いや、ジンがギルドの件、丸投げして僕の仕事増やしたんじゃないか」

呆れ顔のアツシユと面白そうに笑うジン。二人の間には確かな絆が見えた。

「そうだけどさあ、俺があいつらと打ち合わせしたらその内、殺しちゃうかもしれないぜ」

「何があったか知らないけど、それは困る」

「だろ、それじゃあ邪魔しちゃ悪いしお暇するは。差し入れここに置いていくな」

「ああ、また来てくれ」

部屋を出るとカルモンド王国の王と王子がこちらに歩いて来た。

「やあ、グスター王にエクス王子お久しぶりです。」

「会議で決まった役割を放棄したようだな。」

「いろいろあつたんだよ」

忌々しそうにこちらを見ているグスター王がフェリスを見て

「うん？その娘は？」

「フェリスのことか？」

「フェリス？・・・いやなんでもない」

「そうか、じゃあな」

ようもないのでその場を後にする。

「あの娘、グーロム王国の」

「父上どうしましたか？」

「いいや少し面白いものを見つけたのだ」

グスター王の視線は、元グーロム王国王女のフェリスを見ていた。

「気づかれたな。」

「何が？」

「フェリスの正体に」

「えっ、もしかしてさっきの王様にですか」

「ああ」

フェリスが顔面蒼白で目に涙を浮かべている。

「わたし、どうしたら。お兄ちゃんに迷惑が」

「大丈夫だよ。俺が何とかするから。それに実はそんなに問題でもないしね」

「ぐす、そうなんですか？」

「ああ、だから泣かないで」

「はい、お兄ちゃんを信じます。」

「よし、それじゃあ屋敷の戻ろう。」

早めに解決してやらないとな、と思いながら帰路につく。





## 46話 世界防衛会議：二回目

異世界260日目

魔物の大侵攻までちょうど100日間になった日に、各国が集まったの『世界防衛会議』の二回目が開かれることになった。

今回の主催はまとめ役に決まったクイント皇国だ。もちろん以前の主催者のジンも参加することになった。

ジンはこの会議に、レティーシアとフェリスを同行させている。

今回の会議では、確認が主なものになった

「軍は東西南北に分けました。」

今回の進行役は、連合のまとめ役になったクイント皇国のアッシュ皇子がやっている。

「これが内訳になります。ここでは小国の兵を連合兵とさせて頂きます。」

東方軍は、クイント皇国10万とウルティア国3万、連合兵2万の15万

西方軍は、ヴァーテリオン帝国8万とクラフト商国5万、連合兵2万の15万

南方軍は、リニヨン教国6万とテンブル騎士国6万、連合兵3万の15万

北方軍は、ファーランド王国5万とヤマト国5万とかカルモンド王国5万の15万

「この合計60万の兵が、主力になります。さらに遊撃部隊として冒険者と連合兵の混合で5万を用意しています。さらに独立部隊として1万を用意しています。」

全部で66万の軍隊か、やっとこれだけの力を集めることができた。

「軍の責任者は、東方軍をクイント皇国が、西方軍をヴァーテリオン帝国が、南方軍をテンプル騎士国が、北方軍をヤマト国が、担当します。そして遊撃部隊をラシード將軍にお願いします。独立部隊は、ジン殿にお願いします。」

「ちょっと待った。」

このタイミングでグスター王が待ったをかけた。

「ジン殿に独立部隊を任せるのは反対です。」

「何故ですか？グスター王もジン殿の実績はご存知でしょう」

他の王たちも怪訝な顔をグスター王に向ける。グスター王はそれらの視線を無視して。

「ジン殿は、一度会議で決まった役割を放棄している。そんな者に1万の部隊を任せていいとは思えん。」

周りの王からも

「確かに少々無責任な気がしますな」

「それにジン殿はあくまで平民ですし」

「何か役職についているわけでもないしのう」

等と、次々にジンに対する不満の声が出てきた。今不満を口にして  
いるのは小国の王達だ。彼らは小国とはいえ一国の王たちだ、冒険  
者にあれこれ言われるのに、抵抗があつたのだらう。今までは、大  
国がこれといってジンに対して何も言わなかつたので黙っていたが、  
カルモンド王国がジンを非難したことで小国の不満が表に出てきた  
のだ。

「それに実績といつても皇国内のことで、我々にとって利益ある行  
動を取つたわけではありません。」

「確かにそうすな」

「今のところジン殿には兵を出せと言われたただけだな」

「ジン殿は何を考えているかわからないところがありますね」

「しかし、ジン殿はグーロム王国の蛮行を阻止した実績がある。こ  
れはあなた方々にとつても意味のあることだつたはずです。」

アッシュがジンを擁護する。

グーロム王国の奴隷推奨の犠牲になつていたのは、そのほとんどが  
小国だつた。グーロム王国は小国をいくつも食らつて大国になつた  
のだ。小国の王達は、グーロム王国に怯えていたのは確かで、ジン  
がグーロム王国を潰した時には感謝していたのだ。

「それは確かにそうですが。」

「グーロム王国を、潰したことは感謝しているが」

小国の勢いは治まつたが、グスター王はこれを待っていたと言わん

ばかりに

「確かにジン殿はグーロムを滅ぼした実績がある。」

グスター王はそこで終わらず。

「だが、ジン殿はグーロム王国の王族、ミリー王女を匿っているようですね」

「ほ、本当ですか？ジン殿」

これにはカルディアをはじめとした大国の代表も驚いている。

「・・・」

ジンが黙っているとグスター王が続ける

「異世界から来たジン殿は知らないかもしれないが、国が滅んだときその国の王族は全員が斬首なのだよ。つまりミリー王女は本来なら生きてはいけけないのだよ。それに、グーロム王国に酷い目に合わされた人は多い、王女の生存を彼らは認めないだろう。それを君は匿っているこれは重大な裏切りだ」

「それは本当ですか？ジン殿」

「それは、あんまりではないですか」

ジンにとってそれらは理解ができない感覚だ。何故親がやった責任を子どもが取らされるのか理解できない。それがこの世界の王族の責任の一つだとしても、それは歪んでいると思う。

「そして、そこにいるのが、グーロム王国の王族の一人ミリー王女だ」

グスター王がジンの隣にいるフェリス指差して宣言する。フェリスの顔色が悪くなっていく。

周りの王たち、これには言葉を無くした。それもそつだこんな場所に本人を連れてきているとは誰も思わない。

「……………」

「何か言ったらどうなんだ？ジン殿」

「ああ、終わりましたか」

「貴様ふざけるのも大概にしるよ」

おお、ジン殿から貴様に戻ったよ。これだけで余裕がなくなるのか、やっぱり小物だな。大体俺をここから排除してこれからどうするつもりなんだか。そこは一度忘れて相手をすることにする。

「私としては、どうして親がやったことを子どもが責任を問われるのかわからないんですよねえ」

「それが王族というものだ、自らの命で物事を終わりに導くのも王族の務めだ」

「年端もいかない。何か罪を犯したわけでもない者を殺すことが正しいと？」

「そういうものだ。」

「この場に、フェリスのことを知っていた人はいるのですか？」

誰からも返事はない。ようするに知らなかったのだろう。

「それなら問題ないでしょう。そのまま知らないものとしてすごせばいい」

「そんなことが認められるわけがないだろう」

「別に認めてもらう必要は感じませんね。」

「ふん貴様ならそう言うだろうな。だから、私は貴様ではなく別の者に独立部隊を任せるべきだ、と言っているのだよ。」

これに多数の賛成あった。そこでジンが

「ああ、盛り上がっているところ悪いんだが、あなた方は勘違いしている」

「・・・何をだね」

「フェリスはグーロム王国とは無関係だ」

「な、なにを言っている。どついう意味だ？」

「フェリスは王女ではないということだ」

「ふざけるな！私はグーロム王自身から娘だと紹介されたのだぞ、それを」

「騙されたんじゃないか。この子はただの村娘だよ。村を焼かれ城に監禁されていたのを助けたんだ」

「な、何のためにそんなことで嘘を」

「さあ？、エクス王子と結婚させるためとか、王族の肩書きはいろいろ使えるんだろ」

「何を証拠にそんなことを」

「じゃあ聞くがあなたは何か証拠を持っているのか？」

「だから私は直に聞いたと」

「それは証拠には、ならないでしょう。（馬鹿かこいつは）なににより何故他の王の方々はフェリスの存在を知らないのですか？」

「そ、それは」

「その時点でフェリスが王女である可能性は限りなく低いお思うのですが。フェリスは、ただの料理好きの村娘ですよ。今度振る舞いましょうか？」

「確かに私もグーロム王に子どもがいるなど聞いたことがありませんな」

「クルト皇帝の言葉を皮切りに」

「確かに王女というのは不自然ですな」

「決め付けるのは早計でしょう」

「料理が得意な王女とは聞いたことがありませんな」

「お兄ちゃん」

フェリスがジンの首に抱きつく。

そのフェリスを見てクルト皇帝が、

「そんなに小さな女の子を答えが出ない話で不安させることもないでしょう。独立部隊は、ジン殿に任せるということで」

「し、しかし」

グスター王が食い下がるが

「元々この1万は、グーロム王国の戦闘奴隷を中心とした者たちで、皆ジンの元で戦うことを望んでいる者たちだ。ジン殿の下で戦わせるべきでしょう。」

「・・・わかった。好きにしろ」

もう無理だと理解したのだろう、グスター王は自分の席に座った。

この会議では、グスター王に恥をかかせる事になってしまったが、別にいいだろう。正直グスター王は、何かと突っかかってくるから邪魔なのだ。適当な時にイクス王子と入れ替えたほうがよさそうだな。

その後は、細かい指揮系統を決めた。正直知らん名前ばかりなので省く。



これ以降は、何事もなく二回目の『世界防衛会議』は終わった。

## 47話 ティリエルの誕生日

異世界288日目

今日はティリエルの誕生日だ。

「ティリエル、入っていいか？」

「どうぞ」

ジンはティリエルの部屋に来ていた。

「お兄様、お待ちしていました。」

部屋には、しっかりめかし込んだティリエルが待っていた。今日はティリエルとデートの約束をしているのだ。部屋に入るとティリエルが近づいてきて、抱きついてくる

「今日はお兄様を独り占めしていいんですね。」

「ああ、そうですぞ」

「えへへ〜」

早くもティリエルの頬が緩んでいる。

「行こうか、俺たちにだけできるデートに」

背中にあるボード改め『シュバルツ黒飛板』に目を向ける。

屋敷の庭から空に飛び立つ

「ティリエル競争するか？」

「はい、負けませんよ」

ティリエルと競争したり、のんびり漂ったり、空中戦について話したりと時間を過ごす。競争の結果は、速度は引き分け、機動力はジンが勝ち、持久力はティリエルが勝った。

青空をティリエルと満喫してから皇都に戻る。

「楽しかったです。次はどうしますか？」

「行きたいところがあるんだ、付き合ってくれないか？」

「どこにですか？」

「装飾品店」

「これはこれはジンさん。ようこそお越しくださいました。ご注文の品はできていますよ。」

店主がジンを出迎える。

ここは、以前テツの首飾りを買ったところだ。その後も屋敷のメイ

ド達にプレゼントを買ったりとすっかり常連になった。誕生日を聞いてから、プレゼントを特注で作ってもらっていたのだ。

「見せてくれ」

店主が持ってきたのは、銀で作られた腕輪が二つあった。その腕輪には、複雑な文様が描かれており一箇所だけ窪みがある。ジンは、そこに竜宝珠を取り付ける。

「お、お兄様、竜宝珠を、使ってもよいのですか？」

慌てるティリエルに

「こちらの品は、魔具を取り扱う方にも協力してもらって作った物です。竜宝珠をつけることで完成するものでして。身につけた者の魔力、気力の底上げ。腕輪同士の通話。常時展開の障壁などの機能が付いております。」

「名前は何？」

「『白銀の龍輪』しろがねのりゅうりんと言います。」

「これを私に？」

「ああ、俺とお揃いだ。」

自分の腕につける、そして銀の腕輪を見せながらティリエルの頭をなでる。

「こういうときは、キスとかの方が良いです。」

嬉しそうに頬を緩めながらそんなことを言うティリエル。

「それは家に帰ってからな。」

『白銀の龍輪』をティリエルの腕につけてあげる。右腕には、『絆の腕輪』。左腕には、『白銀の龍輪』が輝いていた。

「ありがとうございます。お兄様、一生大事にします。」

日が落ちてきたので屋敷に戻ってティリエルと二人で夕食を取ることにする。

夕食が終わり夜が近づくにつれティリエルが挙動不審になっていた。

どうやら、夜のことを考えて緊張しているようだ。

「ティリエル」

「ひゃい」

重症だな。変な声で返事をしてしまい恥ずかしそうにしているティリエルに

「怖い？」

「えっ」

「これからやることが」

「怖くはないです。ただ、私はやっぱり他の方より子どもっぽいのでお兄様をがっかりさせてしまうのではないかと、不安で。それに私は、龍だから成長が遅いから。」

ティリエルは、龍の寿命の長さを気にしていたようだ。

「大丈夫だよ。俺はティリエルのこと大好きだから」

「お兄様、私も大好きです。愛しています。」

「ありがとう。それにね、皆にはまだしっかりと話していないんだけど、俺は人間でありながら、長命なんだ。」

「それって、もしかして」

「ああ、俺と同じ時間を生きられるのは、今の仲間の中では、テツとティリエルだけなんだ。」

この世界のエルフの寿命は400年ほどだからイリヤでも難しい。力をつければ少しは違うだろうが、今はまだ無理だ。

「どっつして長命に？」

「この世界で能力ランクが上がれば寿命が延びるのは知ってる？」

「はい、知っています。龍でも力がある者だけが古龍へとなりますから」

「俺はすでに能力ランクがSだし。さらに精霊界で生活したことで体が変化して精霊にすこし近い存在になっていているらしい。この二つが重なって長命になったんだ。今のままでも700年は生きられそうなんだ。だから小さいとかあんまり気にしないでくれ。俺にとつてテイリエルは救いなんだ。」

「はい、一生お傍にいますよ。『お兄様』」

あの後、テイリエルは「お、お風呂に行ってきます」と残して部屋を出ていった。

ジンはテイリエルとの会話で再確認した。このままだと、今の仲間達といつか別れることになる。

だが、この世界を守るためには、力がある。力を手にすれば寿命が延びる。寿命が延びれば一人になる。

人との別れなんて当たり前のことなのにな、俺は強欲になったようだな

「暇なときに、長寿の方法でも探してみるか」

ジンは、この世界を見て不死は無理でも不老長寿の可能性はあるのではとこのごろ考えていたのだ。

「まあそれも、魔物の大侵攻を終わらせてからかな」

まあ、適当なときに探してみるさ。

その夜

ティリエルが寝巻き姿で、ジンの寝室を訪れていた。

「お兄様、いますか？」

「いるよ。おいで」

「お、お邪魔します。」

「そんなに硬くならないで」

「やさしくしてくださいね」

ジンはベットに腰掛け、ティリエルを膝の上に乗せる。

「もちろん、ティリエルとは数百年の付き合いになるからね。しっかり時間をかけて開発してあげよう」

「うう、みなさんの言ったとおりです。」

「なんて言ってたの？」

「夜のお兄様は、ちょっと意地悪だと」

「たしかに、そうかもな」

そういいながら、寝巻きを脱がす。

「お兄様、展開が早いです。その、キスから」



「わかった。」

ちよつと意地悪をした。ディープキスを十分ぐらい休み無しで続けた。終わった頃にはティリエルはトロトロになっていた。

「愛してる」

「ふあい、お兄様」

その日は、ティリエルにとって色々な意味で忘れられない誕生日になった。

## 48話 大侵攻防衛戦：前

異世界350日目

大侵攻の日まで10日となった日、ジンは『無得と魔物の大地』に立っていた。

そこには、すでにながりの魔物が発生していた。ジンたち、先行部隊は来るべき時のために魔物の駆逐を行っていた。殺すと黒い粒子になって消滅するので後始末は必要ないのは楽だ。来ているのはジンの独立部隊の内の5000人だ。

「本隊が来るまで後三日だったか？」

「はい、三日後になります。」

ジンの問いにミリアが答える。

「今日中に片付きそうだな、どうしよっか？」

「ゆっくり待ちましょう。そして楽しいことをしましょう。」

「まあそうするか」

何事もなく終わればいいんだがな。

異世界353日目

昼前には主力が到着し始めた。

「ジンお疲れ」

アッシュがジンに近づいてくる。

「二日前からのんびりしていたがな」

「それでも警戒はしていたんだろ。あとは、僕たちが引き継ぐよ。」

「ああ、任せる。」

その後は、忙しかった。兵隊が次々と到着してそれを配置につかせたり、人員、装備の確認する。さらに堀を作ったり防御柵を作ったりと大忙しだった。ジン達にはあまり関係がなかったが。

異世界360日目

魔物の大侵攻から二時間ほど前にはすべての軍が配置についた。黒い半球の東西南北を扇型に展開した軍勢が囲み、黒い半球との間には、深い堀が二重に掘られている。その次には防御柵が立てられている。

できるだけの準備はした、力も付けた、あらゆる力を集めた。あとは結果を出すだけだ。

取った戦法は、堀の外から魔術部隊が魔術で殲滅して他はそれを援護する、そして軍を三万ずつにわけ3時間前後で入れ替える、というものだ。3時間の戦闘の後に12時間の休憩できることになるつまり半日もあるのだ。遊撃部隊は、南西と北東に配置して、不利になった戦場に投入される予定だ。

戦場が広すぎるため、すべてを見通せる者がいないため総指揮官はおらず東西南北ごとに指揮官を置いている。

東方軍はクイント皇国のクルト皇帝が

西方軍はヴァーテリオン帝国のライントツ王が

南方軍はテンプル騎士国のジャック騎士王が

北方軍はヤマト国のキリガネ王が

戦争に慣れている王が、指揮官になった。

「そつえば連絡は、どうやるんだ？」

全軍を見渡しながらアッシュに尋ねる、すると呆れた表情のアッシュが

「……ジンのところにも配給してるんだけど」

「何をだ？」

「これだよ」

と出して出てきたのは、数字の書かれた腕輪だった。書かれている数字は3桁でこれには332と書かれている。

「これはね腕輪ごとに番号があつて、登録している番号の腕輪を使って通話ができるんだ。」

まるでケータイだな。

「あらかじめ登録したものの同士しか通信できないけどね」

「便利なものがあるんだな。高いのか？」

「そりゃあもう、世界に千個しかないんだからね、一個3百万ギルはするよ。だから大事に使ってね」

「わかったよ。」

最後の会議が開かれた。

「いまさら話すことなどあるのか？」

キリガネが疑問を口にする。

「これといつてないな。ただ、これだけは伝えておこうと思ってな、・・・前回も話したが侵攻はこれが最後じゃない、だからできるだけ兵を死なせないように戦ってくれ。これは相手を潰して終わりの戦いではないんだからな」

「難しいことを言うなジン殿は」

他の王が苦笑する。戦う以上被害は出るのだ。

その時ジンの腕輪が淡く光りだした。それもそうだとジンも苦笑する。

「なんだ、通信？」

ジンは不思議そうに周りを見る、本来通信できる人間は皆ここに集まっている。ジンは不可解ながらも無視もできず通話に出る。

「誰だ？」

「【英雄ジンだな。】」

会議の途中なのだが、腕輪はそんなことお構いなしに続け、会議をぶち壊す発言をした。

「【お前の屋敷の人間を数人預かっている。人質の命が惜しければお前は、戦闘には参加するな】」

「な、なにを言っている。俺を戦線から外すことに何の意味がある？」

「【お前に活躍されては困る者がいるのだよ】」

「わかっているのか、世界が滅ぶんだぞ」

「【私の知ったことではない、イエスかノーかだけを答えろ】」

「・・・わかった。戦闘には、参加しないこれでいいか？」

「【それで結構。もし参加すれば女は犯した後で殺す。せいぜい静かにしておくんだな】」

それで通話は切れた。

「ジンさんどうするのですか？」

トウカが聞いてくる。

ジンはこれに

「ちょっと待って。クルト、皇都に確認を取ってくれないか？」

「わかった」

しばらくして

「ジン君残念だが君の屋敷が何者かに襲撃されたらしい。タッド師団長が、懸命に搜索している。だから」

「俺は一度皇都に戻る」

「ジン君それはいけない。これは君が始めたことだろう」

「貴様、またしても役割を放棄するつもりか！」

「ジン殿、考え直せ数人の命と世界そのものどちらを取るか、など明白だろう」

王たちが口々にジンを止めるが、

「確かにこの戦いは俺が始めたものだが元々この戦いはこの世界のものだ。そしてこの世界が俺の大事なものと引き換えにしか守れないのなら。そんな世界を俺は守るつもりはない。」

このジンの世界を見捨てる宣言にクイント皇国の人間は戸惑った。ジンが見捨てるといったこの世界には万単位でジンが救った人々がいることを知っているからだ。しかし、他の王はそうもいかない。今まで肯定的だった大国の王たちがジンに非難の声を投げかける

ヘンリー王が

「ジン殿、ふざけるなよ無責任にもほどがあるだろう」

キリガネが、

「ジン俺はお前が気に入っていたんだぜ。だがなそれはだめだろう」

カルディアでさえ、ジンの言葉を理解できないと言うように

「ジン殿、我々を見捨てるのですか？」

他の王たちも不満を口にする。

ジンは彼らを

「だまれ」

罵倒した。

「あんたたちが、俺をどう思っているかは知らないがな。俺は聖人じゃないんだ。そして俺は本来この世界とは無関係の人間だ。俺がこの世界に来て世界を救うのはただ救いたかったからだ。そして今人質に取られているのは、この世界で俺の世界を作ってくれている人たちだ。俺はこの世界では異物だ、だから俺は、・・・俺の世界を、居場所を守る」

王たちもこれには黙った。自分たちがジンに力を貸しているのではない。自分たちが力を借りていることに気づいたのだ。しかし、それでも自分たちを見捨てると言われて平静ではいられない。



「なら、我々は、どうすれば」

「勘違いするなよ、俺は帰ってくる。」

「「「「「はっ?」「」」」」」

「俺は今日の夜には、帰ってくる。それに助っ人も呼んである。あんたたちは、それまで持ちこたえてくれればいい」

「なにをどうやって?」

聖女ウリアが、何を聞けばいいのかもわからず尋ねる。

「こつやってだ、風の聖痕スライグマを発動『嵐帝』」

ジンを風が包む。精霊術師以外にも見えるほどの精霊が集まり風が緑がかって見える。

「もう一度言う俺は、かならず帰ってくる。それまで持ちこたえてくれ」

ジンは言い終わると空へと消えた。

ジンが去った会議の場では

「我々はジン殿に頼りすぎていたのだろうか?」

「しかし、準備はほとんど我々で」

「それも我々に仕事をくれたと言えるし、あちらはあくまで個人だ」

「とりあえず、持ち場に着こう。これは我々の世界を守る戦いな  
だからな。」

各国の王たちは、自分たちの持ち場に戻っていった。

トウカ姫、クリス王女、聖女ウリアは、心配そうに空を見ていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5887w/>

---

聖痕使い

2011年10月25日23時39分発行